

生活文化としての台湾大甲藺工芸に関する調査・研究

—台湾大甲地域における内発的発展計画の導出—

2014年7月

千葉大学大学院工学研究科
デザイン科学専攻・デザイン科学コース

陳 香延

(千葉大学審査学位論文)

生活文化としての台湾大甲藺工芸に関する調査・研究

—台湾大甲地域における内発的発展計画の導出—

2014年7月

千葉大学大学院工学研究科
デザイン科学専攻・デザイン科学コース

陳 香延

目 次

要旨	1
序章	7
1. 研究の背景と目的	9
2. 研究範囲と対象	11
3. 研究方法	12
4. 本研究の視点	13
5. 主な先行研究	14
6. 本論文の構成	17
注	19
参考文献	20
第1章 生活文化としての伝統的「大甲藺工芸」の特質	21
1. はじめに	23
2. 台湾における藺草の特性と用途	24
2.1. 大甲藺	25
2.2. 三角藺（七島藺）	26
2.3. 燈心草	27
3. 大甲藺を活用した製品	28
3.1. 住生活にみられる大甲藺	29
3.2. 衣生活にみられる大甲藺工芸	34
3.2.1. 大甲帽子	34
3.2.2. 袖カバー	35
3.2.3. その他	36
3.3. 食生活にみられる大甲藺	36
3.3.1. カニの調理	36
3.3.2. 豚肉の調理	37
3.3.3. 民間薬の材料	37
3.4. その他	37
3.5. 肥料としての大地への還元	39
4. 大甲藺の人工栽培と生産拡大	39
4.1. 大甲藺の人工栽培	39
4.2. 大甲藺の三種類の収穫時期	41
4.3. 肥料の工夫	42

4. 4. 当該地域の生活のなかで育まれた大甲藺工芸	43
5. おわりに	44
注	46
参考文献	49
第2章 台湾大甲藺工芸産業の変遷と大甲地域における内発的発展の展開	51
1. はじめに	53
2. 大甲地域地域の概況	53
3. 大甲藺工芸の産業史	57
4. 「黎明期（1729～1895年）」における大甲藺工芸	58
4. 1. 「大甲藺工芸」の生活における使用	58
4. 2. 「大甲藺工芸」の交易	59
4. 2. 1. 大甲藺工芸の移出	59
4. 2. 2. 大甲藺工芸の輸出	59
5. 「発展期（1895～1903年）」における大甲藺工芸	60
5. 1. 「大甲藺工芸産業」の成立の背景	60
5. 2. 内発的発展を支えた郷紳	62
5. 3. 「大甲帽子」の開発と輸出産業としての発展	65
5. 3. 1. 夏用の大甲帽子生産の起こり	65
5. 3. 2. 大甲帽子の日本への輸出の始まり	67
5. 4. 「大甲帽蓆会社」の設立と大甲帽子の生産拡大	68
5. 5. 販仔の登場	73
6. 「最盛期（1903～1942年）」における大甲藺工芸	74
6. 1. 内国勸業博覧会への出品	74
6. 2. 粗製濫造の発生と検査制度の制定	77
6. 2. 1. 民間の検査制度の制定	78
6. 2. 2. 台湾総督府の検査制度の制定	79
6. 3. 日本支店の開設	81
6. 4. 帽蓆の初の同業組織「大甲帽蓆同業組合」の設立	81
6. 5. 台湾特産品としての認定	84
7. 「衰退期（1943～1970年）」における大甲藺工芸	85
7. 1. 戦争の影響による生産量の減少	85
7. 2. 販仔の質の変容	86
7. 3. 市場の変化	87
7. 4. 産業構造の変容	88
8. 「復興期（1994年～現在）」における大甲藺工芸	89
9. おわりに	91

注	93
参考文献	99
第3章 大甲藺の生産ならびに製品制作に内包される自然との共生の知恵	101
1. はじめに	103
2. 大甲藺の栽培	103
2.1. 栽培法	104
2.2. 輪作栽培法	106
2.3. 栽培面積の推移	107
3. 「大甲藺」栽培の施肥	110
3.1. 「大甲藺」栽培に用いた肥料の種類	110
3.2. 大甲藺栽培の肥料としての落花生油粕の歴史	111
3.2.1. 落花生油の搾り過程	113
3.2.2. 落花生油粕の産出	116
3.3. 堆肥の製造と使用法	116
3.4. 大甲藺使用の肥料の知恵	117
4. 「大甲藺工芸」に関する技術	119
4.1. 大甲藺の採取	119
4.2. 大甲藺の乾燥	120
4.3. 撚草人の仕事—素材の加工	121
4.4. 大甲藺を素材として生活用具を編む文化	123
4.4.1. 大甲藺製品の生産者	123
4.4.2. 職工の養成及び労働の実態	124
4.5. 大甲藺の製品紹介	127
4.5.1. 細工製品	127
4.5.2. 時代に呼応の製品	127
5. 大甲帽蓆製造を使う道具	128
5.1. 道具の機能	128
5.2. 大甲藺工芸の製作道具	131
6. まとめ	134
注	136
参考文献	141
第4章 台湾「大甲藺工芸」の内発的発展論に基づいた地域振興策	143
1. はじめに	145
2. 台湾における内発的地域づくり「社區総体営造」	146
2.1 社區総体営造の起源	146

2.2 社区企画師制度の起源	146
3. 産官学連携に基づく台湾大甲藺工芸の振興計画	147
3.1. 産官学連携に基づく台湾大甲藺工芸の振興計画のあらまし	148
3.2. 「社区(総体)营造」の特徴と推進する取り組み手法	148
3.2.1. 台湾大甲藺工芸の振興計画の背景	149
3.2.2. 地域工芸多角化支援プログラム	150
3.3. 「工藝文化明珠—大甲藺編織」プロジェクト	150
3.3.1. 申請の経緯	150
3.3.2. プロジェクト概要	151
3.4. プロジェクトの成果と問題点	154
3.4.1. まちづくりにかかわるプロジェクトの効果について	154
3.4.2. デザインにかかわる効果について	155
3.5. プロジェクトの問題点等についての考察	157
4. 台湾大甲藺工芸を振興関する調査	158
4.1 研究目的と方法	158
4.2. 調査及び解析結果と考察	158
4.2.1. 大甲藺工芸品認知度についてのアンケート	159
4.2.2. 大甲藺工芸品の使用の有無についてのアンケート	160
4.2.3. 大甲藺工芸品で代表的な製品の認知度についてのアンケート	160
4.3. 地域競争の意識—大甲藺、苑裡藺名の争い問題	161
4.4. 地域住民の「内発的発展」の概念についての認識	163
4.4.1. 「社区總体营造」と「大甲藺工芸」の振興計画案についての認知度	163
4.4.2. 「大甲藺工芸」の振興計画の立案に参加した経験の有無	164
4.4.3. 「社区總体营造」と「大甲藺工芸」の振興についての意識	164
4.4.4. 「大甲藺工芸」の振興を継続について	164
4.4.5. 「大甲藺工芸」の振興計画実施への参加について	165
4.5. 大甲藺工芸振興の具体的意見の集約	166
4.5.1. 大甲藺工芸品の使用評価について	167
4.5.2. 大甲藺工芸品を具体的な振興策について	167
5. おわりに	171
注	173
参考文献	174
終章	175
1. はじめに	177
2. 各章で明らかにした大甲藺工芸の特質や産業の変遷	178
2.1. 第1章：台湾における伝統的大甲藺工芸の生活文化としての特質	179

2.2. 第2章：台湾大甲藺工芸産業の成立と変遷	180
2.3. 第3章：大甲藺の特性と農業生活文化に関する研究	182
2.4. 第4章：台湾「大甲藺工芸」の内発的発展論に基づいた地域振興策	184
3. 各章の総括的考察	186
4. 今後の課題と展望	188
4.1. 大甲藺工芸技術の継承の問題点を正視する	189
4.2. 大甲藺工芸の創新に向けた提案	191
4.2.1. 「地域づくり」での提案	192
4.2.2. 「ハード面」での提案	194
4.2.3. 住生活	195
4.2.4. 衣生活	197
4.2.5. 包装素材	200
4.3. 大甲藺の物性を活かした「ものづくり」の展開	201
4.4. 大甲藺工芸の持続的発展に向けた意識の転換	202
4.5. 伝統工芸を通して心の豊かな生活と地域の実現	204
4.6. 地域住民と官学連携と内発的地域づくりの可能性	205
注	208
参考文献	209
謝辞	211
付録資料	附1

要 旨

大甲藺工芸は、台湾中西部に位置する大甲地域において創出され発展した工芸である。人口の多くが中国大陸からの移民もしくはその子孫で構成される台湾において、数少ない独自の工芸の一つである。しかしながら、今日の急速な近代化の下で消失の危機を迎えており、その対策が急務である。

本研究は、大甲藺工芸の生活工芸としての特質や発展史を整理・把握すると共に、大甲藺工芸を中心とした今後の大甲地域の発展に向けた指針ならびに具体的方策を導出することを目的としたものである。

大甲藺工芸は、台湾中西部の大安渓流域に自生する特有の藺草の一種である大甲藺を素材として、当該地域で製作され使用されてきた生活工芸である。当該地域の人々によって、大甲藺が発見され、それを素材とした大甲蓆が作られてからの歴史の中で、大甲帽子、煙草入れなどのさまざまな生活用具が製作され、産業としての繁栄を遂げるに至った。文献調査ならびに当該工芸に参加してきた人々とへの聞き取り調査に基づき、以下の諸点を明らかにした。

第1章では、大甲藺工芸の成立過程および人々の生活との関連を明らかにする目的で、文献を主に調査し、次の結論を得た。(1)大甲藺工芸の発展の礎は、台湾大甲地域の人々が、生活のなかで、大甲藺という材料を発見し、その利活用方法のみならず、より良質な材料をつくり出すための工夫を、人々自身の手でさまざまになしてきたことにある。(2)大甲藺工芸は、当該地域の人々の生活のなかで全体活用が徹底されるなど、生活との密接な関連のなかで創生され発展してきたものである。(3)大甲藺工芸は、当該地域の人々を結びつける重要な媒体であった。

第2章では、台湾における大甲藺工芸の特質を明らかにする目的で、その変遷を調査研究して、内発的発展の観点から考察した。その結果、大甲藺工芸の変遷史は次の5つの時期に分けることができた。(1)黎明期：1729～1895年頃に相当し、大甲藺工芸の

原型となった編みの技術が、生活者の手によって創出された時期である。(2)発展期：1895～1903年頃に相当し、大甲藺工芸の産業化のみならず、当該地域の総合的な生活の向上に地元の郷紳らが大きく寄与した時期である。(3)最盛期：1903～1942年頃に相当し、大甲帽子の生産がピークを迎えた時期である。(4)衰退期：1943年より始まった第二次世界大戦を経て、産業としての大甲藺工芸が大きく衰退した時期である。(5)復興期：1996年の社区総体营造の開始から現代までの時期に相当する。

また、大甲藺工芸産の特質を考察した結果、大甲藺工芸産業の成立と発展は、地域の人々の内発的・自発的な活動が、まさにその礎であったことを示唆している。とりわけ、黎明期から最盛期に至る過程においては、当該地域の人々の生活向上への意欲と実践が重要な役割を担った。更に、大甲・苑里地域の無形文化財とみなされている大甲藺工芸は、当該地域の先住民であるパイゴ族とその後に移入してきた漢人が、共に努力を続けてきた結果である。また、大甲藺工芸に関する生活文化は、当該地域の資源の全体活用に基づき形成されたものである。

第3章では、大甲藺工芸文化に含まれる先人の知恵の新しい展開を明らかにする目的で、大甲藺に関する栽培の肥料、刈り取り収穫、精選、編み技術、製品としての道具の文化を解析し、考察した。その考察結果は以下の通りであった。

新たな「大甲藺工芸」文化の振興計画と未来の展望を導出するためには、「大甲藺工芸」の古い歴史をただ単に回顧するのではなく、先人達が作った歴史を参考し、そこに潜在している積み重なった経験とその蓄積で形成されている「大甲藺工芸」文化を良く理解することが必要である。その観点から「大甲藺工芸」の歴史を概観すると、大甲藺工芸は台湾における数少ない伝統工芸の一つであり、この伝統的工芸の復興と保存は私達の世代が担うべき使命と責任であるとの結論に至った。

第4章では、大甲地域の大甲藺工芸を核とした地域づくり活動を展開していく方策を提案する目的で、文献調査や大甲藺工芸産業に関わりがある人々や当該地域の人々に対するアンケート調査を実施して考察した。その結果は以下の通りであった。

大甲藺工芸産業の再興と進展には、先ず、大甲藺工芸産業の変遷と発展の歴史を見つめ直し、その歴史の再確認・再認識を通して、再興・振興策明らかになることが何よりも必要であろうと思われた。何故なら、そこから導き出される結論、すなわち大甲藺工芸の復活と振興にとって、「大甲藺工芸」文化の価値を地域生活者が理解することが必要不可欠だからと考えるからである。

終章では、大甲藺工芸産業の変遷史や特質ならびに生活者らへのアンケート調査の解析結果から、大甲藺工芸産業は今後の課題と展望を核とした当該地域の発展に向けた指針の概要は次の若干点に要約できた。(1)大甲藺工芸技術の継承の問題点を正視する。(2)大甲藺の物性を活かした「ものづくり」の展開。(3)大甲藺工芸の持続へ向けた人々の関心を高める。(4)伝統工芸を通して心の豊かな生活と地域の実現を図る。(5)民官学連携に基づく内発的地域振興の可能性を模索する。

最後に、本論文全体を総括すると共に、大甲藺工芸の「内発的発展」計画の導出として、具体的提案として、ソフト面及びハード面から、以下のような提案を得た。

ソフト面では、地域づくりに関して、(1)地域全体が金色に輝いて見える大甲藺を陽に曝す風景を地域全体の文化財として捉え、さまざまな企画を実施する。(2)大甲藺工芸製品を地域の人々が大いに利活用する事によって、地産地消の合意形成を図る。(3)大甲藺工芸に元々内包されていた「一物全体活用」の精神に基づく大甲藺の廃材を利用した「ものづくり」を推進する。

ハード面では、(1)大甲藺工芸を総体的に「地域の文化財」、「地産地消」の概念を地域住民に認識できるように、さまざまな体験ができる大甲藺栽培畑などを含む「大甲藺文化エリア」を、地域や地方政府、国などが共同で設置する。(2)大甲藺の職人達や一般の地域の生活者が、地域で使うための大甲藺工芸品づくりを体験できる場として、地域に残る古民家等を活用して「大甲藺工芸館」を創設する。

なお、大甲藺工芸品の普及拡大には、時代にマッチした製品作りは極めて重要であり、具体的にさまざまな製品のイメージも併せて提案した。

Abstract

The Dajia rush straw crafts was initiated and developed in the Dajia area located in mid-west of Taiwan. It has boasted a history of 300 years, one of the crafts succeeded from the early immigrants of China. However, nowadays Dajia rush straw craft have confronted with the problems of disappearance. To find the possible way of keep the crafts developing is the urgent business of the times.

This research seeks to explore a concrete policy for future development of Taiwan Dajia rush straw crafts based on literature review and the viewpoint of living culture with crafts.

Dajia rush straw crafts have been made from a characteristic rush growing wild in the Ta-an stream basin in the Taiwan mid-west. The straw became an essential natural material utilized by local people. According to the history, Dajia was famous as a production center of rush straw mat and Dajia hat. Meanwhile, various life tools, such as cigarette case or wallet was popular in fashion.

Based on both literature review and described by interviewee, especially those who participated in straw handicrafts production, several findings can be concluded as below:

The first chapter described the design history of Dajia rush straw, and concluded as below: (1) The various design inspiration was from the living culture. Besides, local people made serious efforts in order to get better rush straw as the material. (2) That made Dajia rush straw crafts were practically use in the daily life of local people. By make use of every parts of the rush straw, we can find the established relationship between living culture and rush straw crafts. (3) The craftsmanship was also the key that bringing the local people closer to each other.

In order to find out the features of Dajia rush straw crafts, the second chapter describes the history from the view point of endogenous development with five different periods.

(1) INITIAL PERIOD (1729-1895); The knitting technique and prototype of local rush straw craft was initiated; (2) BOOM PERIOD (1895-1903): Owing to the efforts of local people to promote domestic industries with expectation of development, the production of Dajia straw mats and hats were industrialized; (3) PEAK PERIOD (1903-1942); The production of Dajia rush straw hats boosted into a peak

state.(4)RECESSIONARY PERIOD(1943-1970) ; The rush straw craft industry declined owing to the civil war. (5)RESTORATION PERIOD(1996-); When Community Development Campaign as the policy was waged in the year of 1996 till now.

Moreover,the research indicated the characteristic of Dajia rush straw crafts.Local people supported the formation and development activities of the crafts on their own initiatives,particularly from initial period to peak period.Local people plays the most important role that owing to improve their life and they put the rush straw industry into practice.Furthermore,the result of rush straw crafts became immaterial heritage of Dajia and Yuanli area,was the collaboration of the initialed native Pingpu tribe and the succeed emigrated Han race.The living culture related to Dajia rush straw crafts was based on make possible use of local resources without any waste.

Chapter three aims to derive possible method for the development of Dajia rush straw crafts from local wisdom of life experience. The process from growing rush straw to production, such as fertilizer,harvesting,refine,knitting skill and production tools,was formed by the living culture.For further promote Dajia rush straw craft in the future,literature study on the accumulated knowledge of locality should be detailed examination.From this point of view,the history indicated the Dajia rush straw crafts has become the one of vanishingly traditional craft.This generation should responsible for the revitalize and preservation of Dajia rush straw crafts.

The fourth chapter derives the questionnaires implemented in order to figure out the possible proposal for revitalization of Dajia rush straw crafts. The findings concluded as below:

It is crucial that local people have to appreciate the value of rush straw crafts from the view point of living culture. Therefore, the first step is to review and reconfirm the history of the rush straw crafts before attempted to promote the industry.It is the basic concept for operate revitalize policy on Dajia rush straw crafts.

The final chapter sorted out the questionnaire intended for craftsman and local people.Through the core of the problem for the future development of Dajia rush straw crafts,the conclusion of questionnaire derives the following five characteristics of Dajia rush straw crafts.(1)Inheritance of Dajia rush straw crafts should be faced.(2)inspire the craftsmanship basis on the properties of Dajia rush straw.(3) local people tend to pay more attention to further promotion of Dajia rush straw crafts. (4)traditional handicraft is the essentials to sustain an affluent community with open mind living.(5)to explore the way of endogenous development by cooperation between local people,scholars and

government.

In conclusion, as the findings in this thesis, by following the guidelines for endogenous development of Dajia rush straw crafts, concrete proposal from both tangible properties and intangible aspects can be concluded as below:

The intangible aspects about designing a living: (1)The love of intangible heritage while drying rush straw in the sun can be provoked by conducting enjoyment program for the beautiful scenery in community. (2)Local people make use of the rush straw products and comes into fashion. Promotes local product consumption in community. (3)The revival of old tradition of rush straw production methods based on the wisdom to use up consumption items as much as possible without waste.

The advice for tangible properties: (1)Conduct Dajia rush straw culture area in order to promote the concept of local product consumption in community and use up consumption items as much as possible without waste. The rush straw fields also provide variety experiences of growing rush straw. (2)Setup the local culture museum by make use of historical houses. A place of experiences exchange between local people, visitors and craftsman.

Moreover, several examples introduced for designing the series of Dajia rush straw products that go well with contemporary fashion is also the key to the spread of rush straw handicrafts.

序章

1. 研究の背景と目的

機械と動力エネルギーを用いた生産方式は、18世紀半ばのイギリスにおいて、産業革命を引き起こした。この新たな生産方式は、その後急速に世界中に広がり、従来の手づくりの生産を凌駕して行った。また、同時に、農業生産を基軸にした社会は、工業生産を基軸にした経済社会へと移行し、その結果、社会における農業従事者の割合は減少し、工場労働者の割合が増加し、労働者と産業資本家という社会的に対立する2つの階級ができあがった。産業革命は、このような、経済・社会の根本に関わる大きな変化を人類社会にもたらした。19世紀から顕著となったその影響は、今日にまで至っている。

こうした状況の中で、世界の多くの国々で、それぞれの国や地域が創出してきた生活習慣などの地域特性、すなわち、国や地域の「アイデンティティ」は、希薄化あるいは消失という窮地に追い込まれているといっても過言ではない。このように、人類社会に生活の向上をもたらした産業革命は、一方において、それぞれの国や地域の独特な伝統的な文化、生活慣習などを破壊してきたとも言えよう。

上述した状況は、台湾においても例外ではない。台湾においては、長らく、国際経済における過酷な競争を生き抜くために、工業化が積極的に推し進められてきた。その結果、台湾は、高い技術力と低い労働コストを武器に、世界の工場としての役割を担い、台湾経済は飛躍的な発展を遂げた。このことは、台湾の人々の生活に、物質的・経済的豊かさをもたらしたが、その一方で、人々の生活におけるさまざまな物質・経済の均質化は、元来、台湾の人々が作り上げてきた伝統文化や伝統技術への尊厳を損なわせる結果につながった。

しかしながら、こうした状況の反動で、ようやく近年、「精神文化」への回顧意識が高まりつつある。さまざまな伝統文化、特に、手づくりの「ものづくり」である工芸を復興しようとする意識の高揚は、その好例であろう。本研究で取り上げた「大甲藺工芸」の振興も、そうした事例の一つである。

大甲藺工芸は、台湾中部に位置する大甲・苑裡両地域で創出され発展した伝統工芸である。当該地域は、今日の台中市大甲区であり（当時 2010（中華民国 99）年 12 月 25 日以前は、台中県大甲鎮と呼ばれていた）、台湾の中部に位置し、西に台湾海峡を臨み、1731（清雍正 9）年に大安港[注 1]が開港してからは、中国大陸との交易で栄えた地域である。また、台湾中西部の重要な品目の物流経由地に当たり、商業地としても繁栄した。

漢民族が大甲地域に移民を始めたのは、17 世紀後半頃のことであった。18 世紀初頭には、清政府が台湾への移民を禁止する政令を発令したため移民の流入は一時途絶えたが、その後、再び「移民政策」が採られ大量の漢民族が移入した。

大甲地域に近い双寮社（今日の建興社区の近く）に居住していたペイポ族の二人の女性が、野生の藺草を用いて、編み物細工として蓆と日用品を織ったのはその頃のことであった。これが、大甲藺工芸の起源と言われており、清時代後期に相当する 1867 年には、大甲藺[注 2]を材料として作られた蓆が、すでに、台湾に訪れた中国の官僚が必ず土産として購入して帰国するものとして知られていた。また、産業としての大甲藺工芸が最も興隆したのは、日本統治時代のことである。当時は、台湾の代表的な輸出産業の一つとなり、大甲藺を用いた工芸品は、幾度も共進会や博覧会に出展され表彰され、大甲地区は、台湾の「編織王国」とも賞賛された。

戦後、とりわけ 1970 年代以降は、産業構造の大きな変容により、台湾が高度経済成長を繰り広げる中で、生活様式の変化や人件費の高騰などを要因として、職人芸的な手編み物細工を主とする大甲藺工芸産業は、国際市場での競争力を失っていった。こうして、台湾伝統工芸である大甲藺製品は、人々の生活からさえ次第に姿を消しつつあった。現在では、大甲藺を編む技術そのものさえが、消失の危機に瀕していると言っても過言ではない。

本研究は、上述のような状況を鑑み、大甲藺工芸の生活工芸としての特質や発展史を整理・把握すると共に、大甲藺工芸を中心とした今後の大甲地域の発展に向けた指針な

らびに具体的方策を導出することを目的としたものである。当該地域の人々が、今後、自立・自律的に大甲藺工芸を核とした地域づくりを展開することができるよう、その基礎的な資料と発展の方向性を指し示すことを目指した。

2. 研究範囲と対象

本論文で対象として取り上げた大甲藺工芸は、台湾の少数は海外輸出実績を有する輸出品の一つで、台湾を代表する伝統工芸品である。

清朝の前期から1970年代までの約300年間は、大甲藺工芸が、その卓越した技術で興隆を極めた歴史を有している。しかし、このような陽の当たる状況は永続せず、戦後、特に1970年代以降の台湾社会の工業化に伴って、大甲藺工芸産業は次第に斜陽産業に変容し、それからの20年間、大甲帽子や大甲蓆などの伝統工芸品は人々の脳裏から徐々に忘れられつつあった。

幸いにも、1990年代、台湾政府が主導した「社区総体营造」は、地方の伝統文化を保存・振興させることを目的としていたため、その施策は、「大甲藺工芸」にも復興と再生という希望の光をもたらした。

このように、今日、大甲藺工芸は、産業の栄枯盛衰の中で、当該地域の人々から復活が求められつつある。著者は、伝承文化の復活の道筋を考察・考案するために、大甲藺工芸の歴史をまとめそれを地域の人々と共有しつつ今後の発展の方向性を把握することが重要であると考えた。それが、著者が、大甲藺工芸を研究テーマとして取り上げた理由である。

上述の研究目的を達成するため、本研究においては、概ね以下の四項目を取り上げた。

- (1) 大甲藺の特性と大甲藺を用いた生活文化に関する調査・研究。
- (2) 1729年～2008年の大甲藺工芸産業にみられる制作技術、生産・販売のシステム、ならびに、それを支えた人々に関する調査・研究。

(3) 大甲藺工芸産業を支えた職人、原料の提供者、大甲藺栽培の農業技術などに関する調査・研究。

(4) 当該地域の社区総体营造に参加する人々、および、大甲藺工芸製品を使った経験の有無に関わらず、多くの人々から大甲藺工芸に関する意見に関する調査・研究。

なお、大甲の大甲藺工芸史では、関係した工芸職人は、今日の台中市大甲地域と苗栗県苑裡地域の2つの行政区分が含まれている。しかしながら、両地域は、かつては、大甲地域と総称されていたため、本研究の範囲には、今日の大甲地域のみならず苑裡地域も組み入れた（苑裡地域では、今日、大甲藺を苑裡藺と称する動きが生まれている）。

3. 研究方法

本研究は、主に、日本統治時代に記録された文献資料に基づいて実施した。また、他にも、論文、書籍、定期刊行物、新聞などを資料にした。

研究の具体的な方法は、以下の通りである。

(1) 大甲藺工芸の変遷史の探求

文献資料に基づき、当該地域の大甲藺工芸の発展に寄与してきた多様な立場の人々を取り上げ、当該地域におけるその役割を俯瞰した。

調査対象としては、主として、史書、工芸史、関係文献、台湾の文化建設委員会が出版した関連資料とした。さらに、論文の定期刊行物（歴史、工芸、文化）、日本統治時代の台湾日日新聞、雑誌等の資料を収集した。

本論文の目的に沿って、収集した資料を解説、考察、総合して大甲藺工芸の歴史を明らかにした。

(2) 大甲藺の工芸職人を対象にした聞き取り調査

聞き取り調査の対象を、現在、大甲藺工芸に携わっている職人の他にも、かつて当該工芸に携わっていた職人も含めて実施した。聞き取り内容は、これまでに制作されてき

た大甲藺製品とその技術、将来の産業発展の展望、ならびに、技術・文化の伝承に関する意見を可能な限り聴取しそれを解析した。

なお、本調査においては、可能な限り、大甲藺製品の実物を収集し、それらが制作された時代背景を併せて調査した。

(3) 一般住民への質問紙調査・聞き取り調査

大甲藺製品の使用者と未使用者の両者を含む当該地域の一般の住民に対して、大甲藺製品の使用に関する質問を記述式調査および聞き取り調査を行い、生活者の大甲藺製品に対する志向性を把握した。また、この調査では、一般住民の大甲藺工芸の特質の理解や、それをこれからどのようにしていきたいかなどを把握することで、大甲藺工芸産業の将来展望を明らかにする材料とすることを意図した。

4. 本研究の視点

人類の文化・文明を支えているのは、何よりも、人々の生活の総体である。世界の数々の文化は、それぞれの民族の知恵の集結であり、台湾における大甲藺工芸も、同様に、人々が生活の中で生み出してきた生活文化の一部と捉えることができる。

しかし、これまでの台湾における大甲藺産業に関する研究において注目されたのは、主として、大甲藺工芸の発展と歴史についてであった。しかし、本論文で探求しようとしたのは、歴史の回顧の中で、台湾の大甲藺工芸の盛況を賛美するだけではなく、大甲藺工芸が有する文化的側面、すなわち、民間の生活用具としての発祥と興隆、また、その後の推移を明らかにすることである。

清時代の台湾には、中国大陸の閩（福建省の別称）や広東省から台湾へ多くの移入民が到来した。それに伴い、中国と台湾の貿易が活発になり、人々の往来が頻繁になされるようになった。この貿易と人々の往来の増大をもたらした要因は、生活工芸品であった。なぜなら、生活工芸品は、直接中国から輸入するか、あるいは、中国の両地域から移住した職人が台湾で制作したものであったからである。このような状況において、大

甲藺工芸は、台湾において発祥した数少ない伝統工芸の一つである。時代の中で、一時は興隆を極めたものの、その後の時代の変化には追従できずに衰退を余儀なくされていた。しかし、社区総体营造などの政策や地域住民の意識の変化によって、近年、大甲藺工芸は再び重視されるようになってきている。

本論文は、大甲藺工芸を通して、歴史の中で、台湾の産業が生活的な社会文化に果たした役割を見出すことを目指した調査・研究である。同時に、大甲藺工芸を地域の内発的発展に資する地域資源として理解し、地域づくりの手段としての活用する提案を目指した。

5. 主な先行研究

台湾には、大甲藺工芸産業に関する専門書、論文などの論述が数多くある。それらの中で、大甲藺産地の『大甲鎮志』[注3]、『苑里鎮志』[注4]は、いずれも、大甲藺工芸を現地の主要な伝統工芸と認定している。

『大甲鎮志』は、1898年～1999年の大甲藺工芸の産業の状況が、「経済篇」および「文化篇」において詳細に述べられている。特に「経済篇」においては、「原料」「製品」「生産と販売」の経緯やその変遷についての記述がある。「原料」の項目では、大甲藺と鹹草[注5]の特性を区別して、大甲藺の生産量を重点的に調査しながらも、刈り取り状況、栽培に関する内容も記載されている。「製品」の項目では、大甲蓆、大甲帽子産業と大甲藺製品の起源、発展の栄枯盛衰に関する歴史が紹介されている。例えば、「生産と販売」においては、販売先の開拓、生産高の統計、輸出先、輸出数量などの状況について詳しい統計が記載されている。一方、品質管理面では、帽蓆同業組合機関、検査制度、講習と指導などを含んだ政策全般が記述されている。また、「発展の内観」の項目では、大甲藺工芸産業に関連する帽子会社、出張員、集帽人、職人および運送と販売制度等についての明解な記述がされている。

さらに、「文化篇」にあつては、大甲蓆、大甲帽子の製品を編む技術の発展史、すなわち、使用する道具、具体的な編む技術、後製加工などの記録がある。

『苑里鎮志』にも、「経済篇」と「文化篇」において大甲藺産業が解説されている。特に、「文化篇」では、大甲藺を編む歴史を清時代からの発展経過、大甲藺の材料の特性、編む技術と製作の過程、生産と販売、および、現況と未来展望についての記述がある。

また、張仲堅の『臺灣帽蓆』[注6]は、隅々まで広く行き渡る大甲蓆と大甲帽子産業の発展の歴史が記述されている。その内容には、時代背景、生産と販売の変遷、また、帽蓆産業が、現代化の影響を受けて経営の苦しい立場にあることも記載されている。

王振勳の論文『日治時期苑裡通宵地區藺草帽蓆産銷與當地社會變遷』[注7]は、主に台湾の苑裡と通宵地域の大甲藺工芸の発展について述べたものである。同論文の中では、史料に基づいて、大甲帽子と蓆の産地についての論証がなされている。それによると、苑裡地域の女性は大甲藺製品の編む技術が大甲地域の女性より細工が高いことが強調されており、当該工芸が苑裡地域において発祥したことが推察されている。しかし、論文中で日本語文献の解釈に誤りが多く散見され、再考が待たれる。また、同氏の論文『有關大甲藺及其製品生産變動的歷史考察』[注8]は、大甲藺製品の生産量の変動が、苑裡地域経済に及ぼした影響について論述されたものである。

郭金潤は、『大甲帽蓆專輯』[注9]において、大甲帽子の起源について、一般的な説とは異なり、苑裡地域が起源であるとの異議を記している。

陳怡芳は、修士論文『描繪苑裡草編、一個傳統工藝産業生態與脈絡的研究』[注10]において、苑裡地域の大甲藺産業を社会学の観点から論述している。その中で、大甲藺編む女性職人たちや集帽人[注11]、大甲藺の農家に焦点を当てて物語風の解説がなされている。

日本語の文献、『大甲藺及同製作品調査書』[注12]には、台湾の日本統治時代の大甲藺産業の様相が記録されている。同書には、当時の台湾における大甲藺研究の欠如、生

育と気候の関係、栽培面積等についての調査結果、さらには、大甲藺製品の製作法、使用する道具、運送と販売の方法、コストの計算などについて詳しく記載されている。

また、『本島製筵に関する調査』[注 13]で、日本統治時代の台湾における鹹草（七島藺）について、台湾北部、中部、南部の各産地の栽培技術、生産量、及び七島藺蓆の日本輸出先などを記載されている。また、七島藺の栽培技術では、移植、施肥、病虫害、収穫等にも詳しい調査結果が報告されている。

『藺草栽培と染め法』[注 14]では、日本の七島藺の蓆製作、蓆面の模様デザインその他に、七島藺の染色に関する技術を知ることができる。この文献は、主に、日本の西南部に位置する岡山、広島、福岡、大分県などでの藺草に関連する栽培、施肥、染色技術（着色剤と色定着について問題）などを総括的に記しており重要な参考文献である。

以上のように、すでに出版された文献や先行研究における論点は、産業としての発展史、製品販売数量の統計、編み技術の変遷、あるいは、集帽人、職人や大甲藺栽培農家の聞き取り調査の取りまとめ等であり、技術論、経済論的な研究考察であると言える。

しかしながら、著者は、大甲藺工芸をこれらの観点のみで捉えるのではなく、台湾社会の近代化に伴って大甲藺工芸産業が影響されたさまざまな点、すなわち、近代化に伴って発生した環境問題、伝統的価値観の変化、地域格差の拡大など、さらには、現在、推進されている「社区総体营造」政策の進展から受けるさまざまな影響などを考慮した視点から大甲藺工芸を捉えるべきだと考える。

特に、日本統治時代に当該地域にもたらされた大甲藺工芸産業の振興は、総督府の振興政策はもちろん大きな影響を与えたが、それだけでは決して達成され中ったであろう。大甲地域の人々の大甲藺工芸、地域振興に対する考えが醸成され、それが活動となって表出したものが、まさに、大甲藺工芸産業の振興という形で現出したものに違いない。その意味においては、大甲藺工芸産業の振興を「内発的發展 (endogenous development)」の視点で捉えなおすことが重要であり、また、そのことは、今後の当該地域の発展にとってきわめて重要な知見を与えてくれるに違いない。

ところで、日本において内発的発展を提唱した鶴見和子は、その著『内発的発展論』において、その定義を、次のように著している。「目標において人類共通であり、目標達成への経路と、その目標を実現するであろう社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である」[注 15]。また、『コレクション鶴見和子曼荼羅』においては、「…それぞれの地域の生態系適合し、地域の住民の生活の基本的必要と地域の文化伝統に根ざして、地域の住民の協力によって、発展の方向と筋道をつくり…」。

本論文では、こうした鶴見の考え方を基底に置きながら、内発的発展に基づく大甲藺工芸に関する歴史、人物、生活文化、大甲藺農業、社区総体营造等研究を論述したい。

6. 本論文の構成

本論文は、上述したように、大甲藺と大甲藺工芸に関する文献資料や現地調査で実施した聞き取りの内容を基盤とし、大甲藺工芸の現状と生活文化に関することがら本質を把握し、大甲藺工芸を内発的地域発展論に基づく地域振興策の核とするための可能性を検討、論述したものである。同時に、地域住民の大甲藺ならびにその工芸に関する再認識を促し、現代に適合した大甲藺工芸を創造し、それを未来へ進化させる道筋を明らかにすることを目指した（図1）。

第1章では、生活文化としての大甲藺工芸の特質を把握することを目指した。かつての当該地域の人々の生活に見られる大甲藺文化の原点を再考し、当該地域の人々の創意と工夫の産物、すなわち、生活文化として生成されてきたことを明らかにした。

第2章では、内発的な観点から、大甲藺工芸産業が発展した歴史のベクトルを、産業として隆盛した日本統治時代から衰退期におけるまで、大甲藺産業に関する歴史、材料、作り方、伝承の仕方、製品種類、出荷の仕方、生活様式などについて、文献と聞き取り調査によって大甲藺工芸の実態を把握しようとした。

第3章では、大甲藺が先住民族によって見出され、さまざまな生活用具に使われるようになった歴史的経緯を振り返り、地域に存在する素材を先人が知恵を絞り、創意工夫

を加えて、素材を加工して生活用具を制作したことを明らかにした。

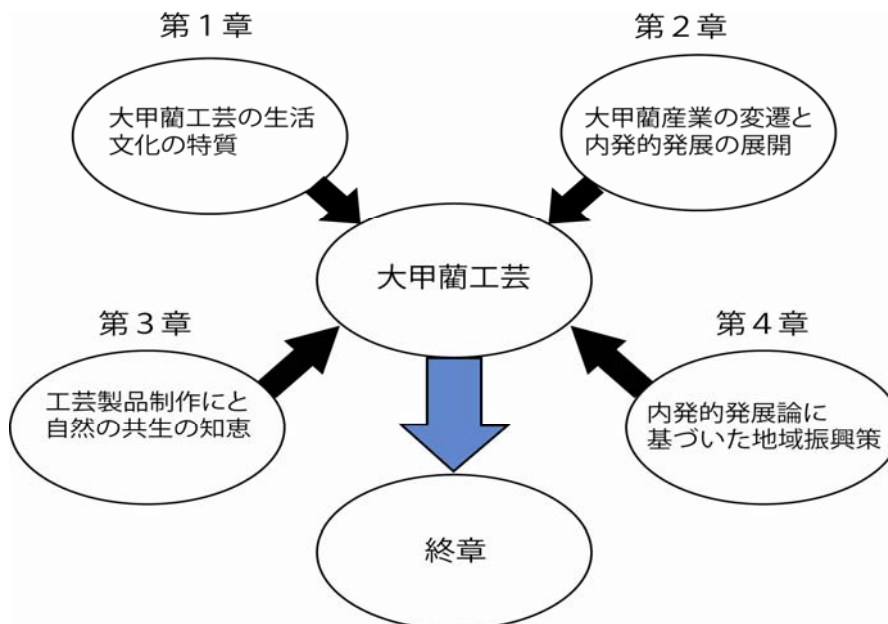


図1 本論文の構成

第4章では、大甲藺工芸文化が再発見される過程で、さまざまな経験と成果を積み重ねてきた。これらの経緯から地域の伝統工芸である大甲藺工芸産業がグローバル化時代に入ったと考えられ始めている。著者の調査結果から大甲藺工芸の振興プログラムを作成すると共に、プログラム実施に関わる国から経費補助金の有効活用には政府の継続的な支援の必要性を提示した。さらに、付け加えるなら、大甲藺工芸の復活と振興にとって、大甲藺工芸文化の価値を地域生活者が理解することが必要不可欠であると考え。

終章では、上述の各章の調査結果で得た内容を検証し、大甲藺工芸の振興は、内発的な手法に基づき、地域資源として大甲藺工芸を捉え、大甲藺工芸が現代における生きる道、生活文化の役割を明らかにしたい。

注

- 1) 大安港：大安港の位置は今日の台中市の大安区で、清時代には台湾中部の重要な輸出港湾であった。日本統治時代の初期にはすでに廃れていた。
- 2) 大甲藺を見出したのは、当該地域の先住民のペイポ族の女性たちであった。女性たちは、大安溪下流の野生の大甲藺を採取し、それをを用いて、自分たちの生活で使う生活用具をつくった。
- 3) 廖瑞銘：大甲鎮志、台中縣大甲鎮公所、2007
- 4) 王振勳編：苑里鎮志、苗栗縣苑裡鎮公所、2002
- 5) 鹹草：台湾における正式な名称は「單葉鹹草」である。和名は、シチトウ（七島藺）、リュウキュウイ（琉球藺）。
- 6) 張仲堅：臺灣帽蓆、臺中縣手工藝品商業同業公會、南天書局、2002
- 7) 王振勳：日治時期苑裡通霄地區藺草帽蓆產銷與當地社會變遷、義守大學人文與社會學報、第1期、38-51、2002
- 8) 王振勳：有關大甲藺及其製品生產變動的歷史考察、朝陽人文社會學刊、第2期、1-30、2003
- 9) 郭金潤：大甲帽蓆專輯、臺中縣立文化中心、1985
- 10) 陳怡芳：描繪苑裡草編、一個傳統工藝產業生態與脈絡的研究、國立藝術學院、2011
- 11) 集帽人：帽子と蓆の買収人と仲介人。
- 12) 島田弥市、倉田藤一：大甲藺及同製作品調査書、台湾總督府殖産局、1908
- 13) 田邊一郎：本島製筵に関する調査、藺ノ種類、台湾總督府殖産局、1915
- 14) 藤原梅次郎：藺草栽培と染め法、酒井重次郎、1900
- 15) 鶴見和子他編：内発的発展論、東京大学出版会、1989

参考文献

- 1) 歴史は何か (“What is History?”) 、1962
- 2) 大甲帽蓆專輯、1985
- 3) 内発的発展論、1989
- 4) 原色台湾薬用植物図鑑(2)、1991
- 5) 台中縣 87 年度「初級藺草工藝實驗教材」・大甲藺編織藝術、1998
- 6) 鶴見和子：コレクション鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換—、藤原書店、1999

第1章

生活文化としての伝統的「大甲藺工芸」の特質

—台湾大甲地域における内発的に関する調査・研究（1）

1. はじめに

人は、長らく、身の周りの環境に存在する多様な資源の徹底した観察に基づき、それらを適度に採取・利活用することによって、自らの生活を構築してきた。世界各地に個性豊かで多様な生活文化が形成されてきた所以である。

本章で取り上げる「大甲藺工芸」は、台湾中西部の大安溪流域(図1)に自生する特有の藺草の一種である大甲藺を素材として、当該地域で古くから制作されてきた生活工芸である。人口の多くが島外からの移民ならびにその子孫によって構成されている台湾あつては、数少ない台湾発祥の生活工芸の一つである。

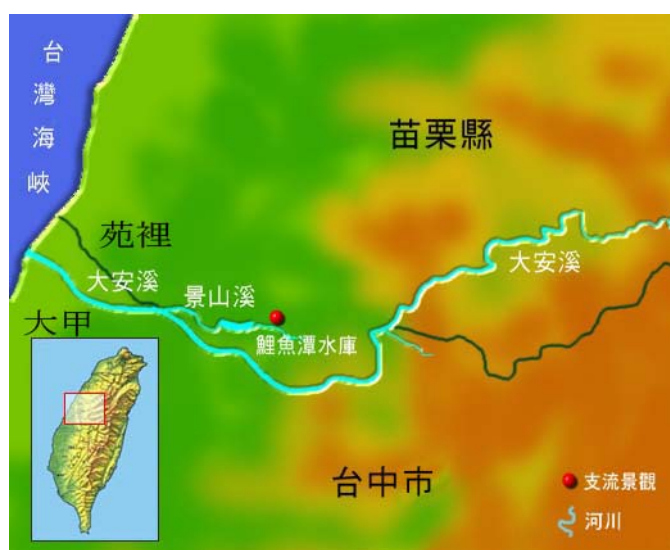


図1 大安溪流域 [注1]

しかしながら、その特質や発展の歴史は、これまで十分に理解されてきたとはいえず、今日の急速な生活様式の変容の中で、当該地域の人々の生活から、その姿を消しつつあるのが現状である。当該地域の人々が自らの力で、この現状を打破し「大甲藺工芸」を核とした地域振興を図っていくためには、その歴史と特質を把握することが今日の喫緊の課題である。

本章は、「大甲藺工芸」を中核に据えた大甲地域の振興策を導出するための調査・研究の第一報である。本章では、諸文献に基づく調査ならびに当該地域で「大甲藺工芸」に携わってきた職人らへの聞き取り調査に基づき、今日の台湾中部の台中市大甲地区と苗栗県苑里地区において大甲藺が利用されるようになった経緯やその生活用具としての特質を明らかにすることを目的とした。

2. 台湾における藺草の特性と用途

台湾において、藺草は、大きく、大甲藺、三角藺、灯心草の三種類に分類されてきた(表1)。それらは、いずれも植物学上異なるものであり、台湾の人々は、それらの差異を認識しつつ、それぞれの利活用の方途を見出してきた。

しかしながら、今日では、それらが混用される場合があり、このままの状態が続けば、特に大甲地域の人々が発見し育成してきた大甲藺の優れた性質は、人々から忘れ去られてしまうことが危惧される。

まず、本項においては、それぞれの藺草の植物としての性質について概観したい。

表1 台湾の藺草の名称 [注2]

台湾の藺草の名称	学名	別名	古名	和名	属
「大甲藺」	Scirpus Triqueter, L. 『大甲藺及同製作品 調査書』	蓆草 (チョー サウ)	三角葱	サンカクス ゲ、 タイコウイ	カヤツリグサ科 (莎草科) (Cyperaceae)
	Schoenoplectus triqueter (L.) Palla (現代の名称)				
「三角藺」	Cyperus Tegetiformis. Roxb. 『大甲藺及同製作品 調査書』	鹹草 (キヤム ーサウ)	苳苳	シチトウ、 シチトウイ (七島藺) リュウキュ ウイ (琉球藺)	カヤツリグサ科 (莎草科) (Cyperaceae)
	Cyperus malaccensis Lam. ssp. monophyllus (Vahl) T. Koyama (現代の名称)				
「丸藺草」	Juncus effusus L. var. decipiens Bucheuan	莞 (トウシ ンソウ)	灯心草	藺(イ)、 イグサ (藺草)	イグサ科 (Juncus)

2.1. 大甲藨

大甲藨は、当該地域に固有の多年生の草本植物である。台湾においては、「蓆草」（ちよーサウ）[注3]とも称されてきたことから、古くから蓆の材料とみなされてきたことがうかがえる。和名は「サンカクスゲ」[注4]、または、「タイコウイ」である。また、「三角葱」との古い呼び名もある[注5]。元来は、湿原や川辺で自生していたが、今日では、「ものづくり」に活用するものは、全てが水田で人工的に栽培されている。

大甲藨という名称が記録に登場するようになったのは、日本統治時代の初期に相当する1908(明治41)年のことである。台湾総督府殖産局によって編纂・出版された『大甲藨及同製作品調査書』[注6]に、大甲藨ならびに大甲藨を素材とした製品として大甲蓆や大甲帽子の記載がみられる。他にも、同書には、大甲藨を素材とした製品として、「苑里帽子」「丸座布団」「煙草入」「紙入」「下駄表」等の記述があり、当時、すでに大甲藨でさまざまな生活用具が制作されていたことがうかがえる。

また、「ものづくり」に活用できる良質の大甲藨は、当該地域以外で栽培することはきわめて困難とされており、そうした意味でも、大甲藨は、まさに、当該地域を代表する素材なのである。

当該地域の水田で生育した大甲藨は、高さ1.3mにも及ぶ。大甲藨の茎の水平方向の断面は、正確な正三角形を呈しており（図2）、人々は、断面の正三角形の頂点に相当する辺を鋭利な刃物で切り分け、スポンジ状の茎芯を取り除き、「大甲藨工芸」の素材としてきたのである。



図2 「大甲藨」の茎の断面（著者撮影）

また、大甲藨は、他の藨草に比較して高い吸湿性があり、こうした特性も人々から好まれた要因の一つである。すなわち、植物学的には、茎の気孔と細胞の間隔が他の草に比

べて大きく、かつ、気孔が半分開いた状態にあり、「大甲藨」が水分が接触すると、直ちに吸湿するのである。さらに、この吸湿性は、病原菌が成長するのに必要な湿気を取り除くことから消臭効果も認められ、その上、大甲藨には、特有の芳香があり、それも人々から好まれてきた。

人々は、こうした大甲藨の特性をみきわめ、それに適した「ものづくり」を展開してきたのである。加えて、より良質の材料が得られるよう、いわば、大甲藨そのものを育て上げてきたのである。「大甲藨工芸」の優れた特質は、まさに、当該地域の人々の工夫の集積といっても過言ではない。なお、これらの工夫については、本章において後述する。

2.2. 三角藨(七島藨)

三角藨は、「鹹草(キャムザウ)」[注7]とも「苙苙(ロウド)」[注8]とも称される。台湾における正式な名称は、「單葉鹹草」(*Cyperus malaccensis* Lam. ssp. *monophyllus* (Vahl) T. Koyama)である[注9]。鹹草の「鹹」とは「塩分を含む」という意味であり、鹹草が台湾各地の塩分含有率が高い海浜や沼沢に自生しているために、そのように称されるようになったものと考えられる。なお、和名では、「七島藨(シチトウイ)」、「琉球藨(リュウキュウイ)」などの別名でも知られている。



図3 三角藨の全体図[注10]

七島藨の茎の断面

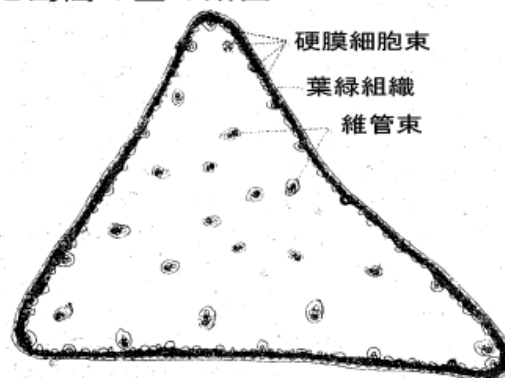


図4 七島藨(三角藨)の茎の断面図[注11]

台湾では、一般的には、「三角藨」という呼称が好まれてきた。それは、茎の断面が図

3に示すように三角形となっているためである。また、それゆえに、上述した大甲藺と混同されることが少なくない。

三角藺は、150~180cmの高さにまで生育する。台湾では、これを採取し乾燥させたものが、主として蓆の材料として使用されてきた[注12]。しかし、この三角藺の茎の断面は(図4)、大甲藺ほどには正確な正三角形を呈してはおらず、大甲藺のように、正確に三つの材料に切り分けることができない。よって、「ものづくり」には、そのまま用いられるか、もしくは、二つに裂いて用いられてきており、完成した製品は大甲藺を素材としたものよりも繊細さの面で劣っているとみなされてきた。

以前は、三角藺は、台湾の各地に自生しており、人々は、それらを採取し生活用具の材料として活用してきたが、今日では、ほぼ全量が人工栽培によって生産されている。そのきっかけは、日本統治時代に家内工業の一環として台湾総督府の指導の下で行われたことにさかのぼる[注13]。また、三角藺は、当該地域だけに限らず、台湾島内のさまざまな地域で栽培されている。大甲藺と異なり、いずれの地域でも「ものづくり」に必要な品質のものが得られたことも、全国的に普及した要因と考えられる。

とはいえ、三角藺の生育は、同じ地域でも土地の肥沃度によって大きく異なり、それゆえに、各地で、収穫時期や回数はそれに応じて多様である。

2.3. 燈心草

燈心草(図5)という名称は、かつて油で明りを採っていた頃に、この植物の茎芯を明りの芯材として使用していたことに由来する。学名は*Juncus effusus* L. var. *decipiens* Bucheuanで、イグサ科(Juncaceae)[注14]に属する。漢字では藺草とも書く。日本名では、「イ(藺)」あるいは「イグサ」、台湾では、「丸藺草」や「燈芯草」とも呼称される。英語ではrushである。

茎は細い円柱形で(図6)、真っすぐに伸びる。横に伸びる地下茎からは、針金状の茎が密生し、それらが高さ1m以上に達する。夏には茎の上部に花梗が側生し、その部分から多く分岐して淡褐色の細い花を付ける。

燈心草の生育地は、日本や台湾を始め、中国、韓国などの東アジアから北米地域まで広く分布している。日本では、畳表や花むしろの材料として、水田で栽培されるのが通例である。台湾では、中海抜の山岳地帯にある湖畔に、燈心草が自生していた痕跡を見出すことができる。今日でも、原野の湿地に自生しているものも少なくない[注15]。



図5 燈心草 [注16]

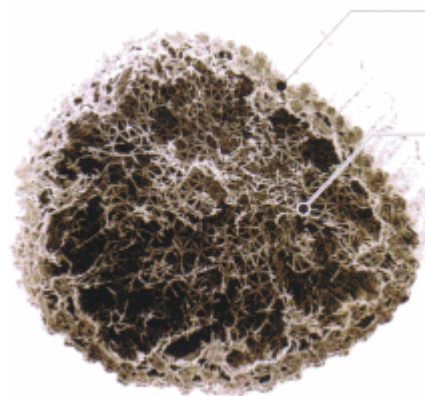


図6 燈心草の断面 [注17]

この燈心草は、三角藪と同様、全国で栽培がなされてきた。また、多くの地域で生活に身近な素材であったことから、さまざまな利活用がなされてきた。例えば、茎を利用して座布団、蓆、帽子、かばん、わらじ、靴のインソールの素材を編む材料として使用されたり、その柔らかさを活かして編んで縄として使用されたりもした。茎の芯は甘味があり、解熱作用や利尿作用、鎮静効果があるとされてきた[注18]。

上述してきたように、台湾における三種類の藪草である大甲藪、三角藪、燈心草は、外見上よく似ており、かつ、いずれも茎を用いて帽子や蓆を編むことができたことから、混同される場合があるが、決して同一の植物ではない。台湾の人々は、それらの差異を認識しながら、それぞれの特性に適した利活用方法を編み出してきたのである。とりわけ、本研究で取り上げる大甲地域と苑裡地域の人々は、当該地域にしか存在しない大甲藪の利用価値を認めて「ものづくり」へ適用するとともに、その品質そのものをより良質なものと育成してきたのである。「大甲藪工芸」の特質を理解しようとする際、こうした人々のなしてきた努力の歴史を見逃すわけにはいかない。

次項以降で、そうした大甲藪にかかわる人々の努力の軌跡を概観していきたい。

3. 大甲藪を活用した製品

「大甲藪工芸」は、日本統治時代の台湾において産業化し、当該地域に大きな経済的利益をもたらしたが、注目すべきはそのことばかりではない。産業化の基盤となったのは、元来、当該地域の人々が生活の中で創出し使用してきた生活用具であった。当該地域の人々の普段の努力と創意工夫が存分に発揮されなければ、産業化は不可能であったといっても過言ではない。

さて、人々は、大甲藺を生活の中で用いるために、どのような工夫をしたのであろうか。まずは、制作された製品とその作り方を概観したい。

3.1. 住生活にみられる大甲藺

「大甲藺工芸」の名声を高めたのは、何といても藺の存在が欠かせない。いわば、大甲藺と称されるそれは、そもそも、当該地域の人々が、生活の中で創出し使用してきた生活用具であった。大甲藺を素材として制作した藺を寝台で使えば、その感触は柔らかく快適であり、温暖で多湿な台湾の気候に適した生活用具として、広く当該地域の人々に受け入れられたのである。こうした大甲藺特有の性質は、大甲藺そのものの性質もさることながら、材料の使い方や編み方に繊細な工夫を凝らしたことにその要因を求めることができる。それでは、大甲藺は、どのように把握され、また、人々の生活において、どのように利活用がなされてきたのであろうか。次に、主として文献資料を頼りに、その諸特性について概観していきたい。

(1) 台湾における藺草ならびに藺草製の藺の記録

台湾における藺草が初めて記録に登場したのは、清時代の康熙56（1717）年に編纂された台湾初の地方誌『諸羅県志』[注19]においてである。同書は全12巻から成り、第10巻「物産」には当該地域のさまざまな産物が紹介されている。同巻には、藺草に関して以下の記述がある。

「蒲 生於水涯 滑而溫 可為席。」[注20]

（蒲は、水辺で生育する植物である。その茎の手触りは滑らかで温もりが感じられる。また、藺を織ることができる。）

当時、中国大陸では、沼沢や湿原などの淡水の水辺に生育する草本水生植物の多くを蒲と記していたため、この蒲と記された植物には、台湾における藺草が含まれていると考えられる。また、「藺を織ることができる」と記されており、当時は、藺草以外の植物で藺が織られていなかったことを考えると、同書に記された蒲は、史上初めて台湾の藺草ならびに藺を記録したものであると考えられる。

この文献においては、蒲が、大甲藺、三角藺、燈心草のいずれを示すのかは判然としないうが、いずれにせよ、藺草ならびに藺草を素材とした藺の利活用は、かなり古い時代からなされていたことがうかがえる。

さらに、上述の『諸羅県志』が著されてからおよそ150年後の1871（同治10）年に編纂された『淡水序志』[注21]には、次のような記述がある（表2）。

「蒲 可織席 大甲最佳。」[注22]

(蒲を材料として蓆が作られている。大甲地域の蓆製品が最高級である。)

また、同書には、物産分類の幣属篇に、以下の記述がなされている。

「番仔席、大甲番女取草織之甚精緻、一張價數十元、或一、二元不等、近漢人亦多效之者。」[注23]

(先住民の蓆は、大甲地域の先住民の婦人が草を取り、精巧な細工で編まれている。一枚の価値が数10元[注24]、あるいは、1~2元のものもあり一様でない。最近では、漢人達も、大勢がこれをまねて蓆を作っている。)

表2 台湾の史書の「蒲」の記載

出处	出版年	品名	記述	類別
諸羅県志	1717	蒲	「埤雅」[注 25]:「水草也」似莞而扁、有脊、生於水涯、滑而温、可為席 (蒲は水草である。莞[注 26] に似ているが、葉が細く、その上脊がある。蒲は、水辺で生育する植物である。その茎の手触りは滑らかで温もりが感じられる。また、蓆を織ることができる。)	草之屬
噶瑪蘭序志	1849	蒲	生於水涯、滑而温、可為席 (蒲は、水辺で生育する植物である。その茎の手触りは滑らかで温もりが感じられる。)(『諸羅県志』からの引用と思われる。)	草屬
淡水序志	1871	蒲	可織席、大甲最佳 (蒲は蓆を織ることができる。大甲産の品質が最も良い)	草屬
			番仔席 大甲番女取草織之甚精緻、一張價數十元、或一、二元不等、近漢人亦多效之者	幣屬
苗栗県志	1893	蒲	可織席、一名鹹草 (蒲 蓆を織ることができる。また、「鹹草」[注 27]と呼ばれる)	草屬

(著者整理)

大甲における蓆が最高級であること、また、当時、1元で約45リットルの米の購入が可能であったことから、当該地域で制作されていた蓆は、きわめて高値で取引されていたことがわかる。こうしたことから、同書に記されている蓆は、大甲藺を材料としたものであると推察される。また、その発祥は、先住民の女性達であり、すでに、1871(同治10)年頃には、当該地域に移住した漢民族も、蓆の生産に携わるようになっていたことがわかる。

また、その後、日本統治時代になった直後の1897(明治30)年に編修された『苑里志』の「物産考」[注28]には、以下の記載がある。

「右花屬一蓆草 燈心蓆草…。」[注29]

(右に示す蓆草も、燈心蓆草も花の属である。)

上述したように、蓆草とは大甲藺のことであるから、当時、すでに、人々の生活の中では、蓆を編むための草である大甲藺と燈心草の二種類の区別が明確であり、その特性に応じて使い分けがなされていたことがうかがえる。

(2) 大甲藺工芸の起源

日本統治時代(1895～1945年)が始まった初期に相当する1908(明治41)年に記された『大甲藺及同製作品調査書』には、大甲藺が発見された経緯が次のように記されている。

「…今を去る百八十年前(雍正五/1727年)大甲附近蕃社の帰化後数年ならずして、双寮社[注30]の蕃婦蒲氏魯禮(プレロレ)、及日南社の蕃社蚶希烏毛(ラヒオモ)なる者ありて、大安溪の下流河岸大安溪の下流河岸双寮社附近海辺湿地に自生せる本草を採りて之を乾燥し、粗製の蓆及日用器具入等を製作せしに良好なる製品を得たり…。」[注31]

この記述からは、当該地域に暮らす先住民が、自生の大甲藺を採取し乾燥させ、蓆やその他の生活用品などの「良好なる」製品の制作に役立てていたことがわかる。

さらに、同書には、その約40年後の1765(乾隆30)年のこととして、以下の記述がある。

「…降りて乾隆三十(1765)年、八十二年前の頃双寮社に性伶俐なる加流阿買(カルアマイ)と名くる一蕃婦あり、此韌強なる茎を細分して蓆を製造せしに従来のものに比して優良なるものを得たり…。」[注32]

ここには、同じ双寮社の加流阿買(カルアマイ)という女性が、野生の大甲藺の茎を裂き、細かい繊維に分けたものを使用して蓆を編んだことが記されている。このことから、今日まで続く大甲藺は、生活の中で、人々の手によって発見され、その利活用がなされていたことをうかがい知ることがきる。

これらの記述は、どのような調査に基づいて記録されたかについては記されていないが、大甲藺が当該地域固有の植物であること、また、当該地域の人々によって栽培されるようになったことで、「ものづくり」にふさわしい優れた品質のものが得られるようになったこと、さらには、当時、すでに、大甲藺を材料とした当該地域に独自の工芸品が作られていたことがわかる。また、上述の内容が『大甲藺及同製作品調査書』に記述されたことから、当時、台湾総督府が、いかに大甲藺に注目し、家内工業奨励事業の一環として大きな期待を寄せていたかをうかがい知ることができよう[注33]。

一方、そうしたその名声は、日本に限ったものではなかったようである。1918(民国7)年に連横によって著された『臺灣通史』巻26には、道光年間(1821~1850年)の大甲蓆について、次のように記述されている。

「大甲之蓆……道光中、大甲番婦始採藺草織蓆、質紉耐久、可以卷舒、漢人多從之織。於是大甲蓆之名聞遠近。其上者一重價至二、三十金。…」[注34]

(大甲蓆……道光年間(道光は清宣宗の元号)、大甲の先住民の婦人が、初めて藺草を採取して蓆を編んだ。その製品は、丈夫で長持ちし、巻いて収納することができる。多くの漢人達も、編む技術を学んでいる。そのため、大甲蓆は遠くまでその名が知られており、上級品は、1枚の価値が20~30金[注35]である。)

すなわち、清時代には、すでに、大甲蓆の名声は遠く中国大陸まで広まっており、しかも、当時、20金でおよそ900リットルもの米が購入できた[注36]ことから考えると、きわめて高価な工芸品と認識されていたことがうかがえる。

(3) 素材の加工

大甲藺は、上述したように、三角藺、灯心草とは異なり、断面が正確な正三角形に近い形状を呈している。当該地域の人とは、正三角形の頂点を一辺とするように材料を切り分けて使用した。これは、大甲藺の大きな特徴の一つである。

また、前述したように、三角藺は断面が正三角形ではなく、大甲藺のような材料の切り分けが困難である。それゆえに、しばしば、蓆にする際、そのまま用いられたり、あるいは、分ける場合があっても、せいぜい二分割する方法がとられた。また、灯心草は断面が円形であることから、大甲藺のように細い材料を取り出すことをせず、日本の畳表がそうであるように、そのまま製品に編み込まれた。大甲藺を用いた製品は、手間こそはかかるが、完成した製品は、三角藺や灯心草を材料としてつくられた製品よりも繊細なものであった。

このように、大甲藺は、当該地域の人々の手によって、良質な材が取り出されることで、

ようやく、高品質な藺草製品として製作されていたことがわかる。

(4) 蓆編みの技術

上述の手続きによって得られた部材は、人々の手で編まれ、蓆や帽子、その他の製品へと姿を変えた。とりわけ、その基盤となったのが蓆である。それゆえに、大甲蓆には「大甲藺工芸」の基本的な技術を確認することができる。次に、その製作の様子を確認していきたい。

「大甲蓆」にみられる基本の編み方は、およそ、次の二種類である。一方が1本ずつを交互に編む「圧一」(図7)であり、他方が1本飛ばしに編む「圧二」(図8)である。「蓆」編みには、主として後者が使われてきた。前者は、後述する「帽子」作りなどにしばしば用いられてきた技術である。蓆作りにあっては、両者を適度に組み合わせることで、蓆に紋様を施すこともあった。



図7 圧一の紋様 [注37]



図8 圧二の紋様 [注38]

(5) 気候・風土に適した「ものづくり」

亜熱帯気候に属する台湾は、夏季はきわめて蒸し暑く、上述したように、吸汗性に優れ、通気性が高く、しかも、消臭効果がある大甲藺で編んだ蓆が、人々に高い清涼感を与えたことは想像に難くない。「大甲蓆」とは、まさに、当該地域の気候・風土に適した「ものづくり」の文化として育まれてきた生活工芸であるといえよう。

(6) 蓆に施された紋様

「大甲蓆」は、主として、寝台で使われる生活用具であった。上述してきたような特性

は、温暖で多湿の台湾において、人々に穏やかな眠りを提供したに違いない。

一般的には、「大甲蓆」には、紋様は施されないものが多い。しかし、中には紋様が施されたものもあり、その紋様は、決まって、「龍」と「鳳凰」であった。これは、「龍鳳蓆」(図9)とも呼称され、当該地域はもとより、日本や中国大陸でも珍重されたという[注39]。

ちなみに、中華文化では、「龍」は男のシンボルであり、「鳳凰」は女性のシンボルである。両者とも、「富貴」を象徴する意味が込められているが、両者が同時に用いられていることから、他の生活用具では決して得ることのできない快適な睡眠が、人々に「富貴」の観念や恵まれた家族生活を想起させたに違いない。また、心地よい眠りこそが、人々の豊かな暮らしを支える源泉と認識されていたのかもしれない。あるいは、男性のシンボルと女性のシンボルが同時に描かれていることから、「子孫繁栄」の思いが込められていたのかもしれない。いずれにせよ、「寝る」という生活行為が、生活文化としてきわめて重要視されており、そういった生活文化の中で創出された生活用具こそが大甲蓆であったことがうかがえる。



図9 龍鳳蓆の紋様 (著者撮影)



図10 大甲帽子 (著者撮影)

3.2. 衣生活にみられる大甲藺工芸

3.2.1. 大甲帽子

大甲藺を素材として編まれた製品の中で、人の身体と最も親密に接触する生活用品は「帽子」であろう。後年になって、大甲帽子と称されるようになったこの工芸品の起源は、日本統治時代になってからのことである。それゆえに、「大甲藺工芸」産業との関連の中で語られる場合が多いが、その誕生時には、必ずしも、産業化が目指されたものではなかった。民間では、大甲帽子の起源は、次のように説明されている。

「…洪鴛編製大甲蓆手藝在鄉里素享令譽。本年、她年幼的兒子頭上長瘡…、未防蚊蟲叮擾和赤陽曝曬、在愛子心切的驅策下、亟思保護其頭部的方法…、苦心研究以

藺草試編成草帽而開始。」[注40]

(…洪鴛という編み細工が上手な婦人の息子の頭に「できもの」ができ…、その傷口にハエが群がるのを防ぐために、大甲蓆を編む技術を活用して創出されたのが大甲帽子である。)

それは、日本統治時代が始まったばかりの1897(明治30)年頃のことであったという。

このように、後年になって、「大甲藺工芸」産業の中核をなしていく大甲帽子であるが、その端緒は、当該地域の現実の生活に極めて密着したものであった。

大甲帽子(図10)の編み方は、蓆のそれを応用したものであり、後年には、型を利用して成型する方法がとられるようになった。

また、「大甲藺工芸」の産業化時代にあって、大甲帽子の生産は各家庭でなされた。細工が難しい山の部分を母親が制作し、比較的細工が容易な鍔の部分に娘が行ったと言う。このようにして、その制作技術が、それぞれの家庭の中で継承されたのであった。そういった意味では、「大甲藺工芸」産業を発展させるだけでなく、当該地域の生活文化の構築に、大甲帽子が果たした役割は決して少なくない。

3.2.2. 袖カバー

上述した大甲蓆、大甲帽子は、大甲藺を素材とした「ものづくり」として代表的なものであり、両者とも、移出・輸出品として経済的価値を具備した商品として認識されている。しかしながら、当該地域の人々は、そうした「商品」ばかりを製作していたわけではない。例えば、図11に示されるような農作業に用いるための袖カバーがつくられ、人々の生活の中で用いられていた。その制作技法は、蓆や帽子と同様である。いわば、「圧二」の技法で帽子のように円柱形を作り、最後に両端を縁取りし固定したものである[注41]。



図11 袖カバー [注42]

これは、当該地域の主要産業である稲作において、屋外で作業を行う際、日に焼けたり、虫に刺されたり、あるいは、稈や葉などに触れることで手首が傷付くことから保護するために創出された生活用具である。大甲藪は、柔らかでかつ丈夫という相反する性質を具備する材料であり、また、適度に水分を吸収し、かつ、風通しが良い。さらに、折り曲げれば着用者の腕の長さに自由に適合させることができる。当該地域では、人々は、こうした生活用具を自ら制作し、生活の中で利用してきたのである。「大甲藪工芸」は、大甲藪の特質を最大限利用した生活用具とってよいであろう。

3.2.3. その他

その他にも、大甲藪を素材として、「丸座布団」、「煙草入」、「紙入(財布)」、「下駄表」、「名刺入」等の生活用品が制作された。もちろん、それらは、他地域で販売するための「商品」でもあったが、いずれも、当該地域における人々の生活から生み出された知恵が基盤となっていることは間違いない。

3.3. 食生活にみられる大甲藪

大甲藪の利活用は、住生活、衣生活に用いられる「ものづくり」にとどまらなかった。当該地域においては、人々の食生活にもその利活用が認められる。次に、そういった側面を概観したい。

3.3.1. カニの調理

カニは、いうまでもなく、数ある食品目の中でも貴重品に相当するものである。それは、当該地域でも例外ではなかった。人々は、貴重なカニを捕獲した際に縛る素材として、大甲藪を用いてきた(図12)。大甲藪の繊維の強靭さを最大限に活用した知恵とってよいが、上述したように、大甲藪には強い吸湿性があり、大甲藪でカニを縛っておくと適度な湿度を維持し、カニの鮮度を保つことができたという。さらに、カニは、大甲藪と一緒に蒸すことによって、淡く微かな大甲藪の香りが付され、カニ独特の臭みを消すことができたという。

また、大甲藪が水分を吸収することによって、見かけ上、カニの重量が増加することも、商人に好まれた理由との話もある。



図12 カニを縛る [注43]



図13 東坡肉 (著者撮影)

3.3.2. 豚肉の調理

当該地域では、豚のばら肉を煮詰めて「東坡肉」を調理する際、肉を縛るために大甲藪の繊維が用いられてきた。もちろん、大甲藪は強靱であるため、長い時間を煮立てても煮崩れることが無かったことがその主な理由であるが、油分を適度に吸収してくれることや、煮汁に大甲藪特有の芳香が付されることもその理由であった(図13)。

3.3.3. 民間薬の材料

大甲藪を栽培する農家の李氏の話によると、大甲藪は、民間の薬としても利用された。その用途は、胃腸薬、生理痛、リウマチ等である[注44]。煮詰めて得られる液体を飲用すると特に効き目があるとされ、当該地域の人々の間で広く用いられた。

3.4. その他

その他にも、人々は、工芸品の制作に用いられない部材であっても、大甲藪を、実に多様に利用しようとしてきたことがうかがえる。いかに、栽培・採取した大甲藪が、大切に使用されてきたかをうかがい知ることができよう。次に、そういった使用例を見ていきたい。

(1) 礼拝紙の結束紐としての利用

台湾では、しばしば、死者へ送るための紙幣として「礼拝紙」が使われる。複数の「礼拝紙」を結束したものを燃やし、煙となって立ち上ることで、天にいる死者に届くことを願ったのである。死者が来世での生活で不自由しないようにとの願いが込められている。



図14 礼拝紙を縛る [注45]

当該地域では、その「礼拝紙」(図14)を結束するためには、決まって大甲藪が用いられた。この場合に用いられる大甲藪は、もちろん、生活用具の制作に用いることのできないものであったが、先祖に捧げるための紙幣という大切なものをしっかりと留めてくれる大甲藪は、その実用性はさることながら、人々に多大な安心感をもたらせたに相違ない。今日にあっては、たいていが、ゴムのような素材で縛るのが一般的であるが、大甲藪の製品に使用しない部分を活用するというこの知恵は、きわめてエコロジカルであるとも言えよう。

(2)簡易的な履物

上述した利用法の他にも、人々は、生活の諸側面で、大甲藪の利活用方法を考案した。例えば、竹の皮を採取し、それを丸め、2～3本の大甲藪で結ぶと、簡易的な履物にもなった(図15、16)。大甲藪がこのような用途に用いられた主な理由は、その繊維が、歩行の摩擦に十分に耐えられるほど強靱であったためであろう。しかし、その際に用いられた大甲藪は、必ず他の生活用具や商品にすることのできないものであった。このように、大甲藪を、廃材・端材であっても積極的に活用しようとする一つ一つの知恵の積み重ねこそが、「大甲藪工芸」が、台湾を代表とする工芸品産業として大きく発展していくための礎となってきたであろうことは想像に難くない。



図15 竹の皮と大甲藺を組み合わせる



図16 簡易的な履物 [注46]

3.5. 肥料としての大地への還元

人々は、大甲藺を収穫すると、天日で乾燥させた。その後、およそ直径21cmを一束として束ね、運搬・保存した。結束するためには、製品にならない大甲藺の部材が縄に加工されて用いられた。また、束ねた大甲藺は、長さを揃えるために、茎の両端を裁断したが、裁断された部分は必ず集められ、堆肥として利用された。

また、大甲藺製品の制作過程では、例えば、「スポンジ状の茎芯」や製品の大きさを整える際に切り取ることから端材が産出した。こうした、今日では「廃棄物」と捉えられる傾向にある部材でさえ、人々は、田畑における肥料として二次利用することを欠かさなかったのである。

人々は、そうした大甲藺の廃材・端材を、「畚堆間（ブンティケン）」または「畚堆仔（ブンティヤー）」と称される場所に、台所から出た廃棄物とともに集め有機肥料を生産した。そこには、使用に耐えなくなった大甲藺の製品も集められた。つまり、当該地域で収穫された大甲藺は、全てが何らかの形で利用されたのであり、まさに、人々の生活の中で「一物全体活用」が徹底されていたと行うことができよう。

4. 大甲藺の人工栽培と生産拡大

4.1. 大甲藺の人工栽培

上述してきたように、当該地域の人々は、身の回りの素材であった大甲藺を利活用して、実に多様な生活用具を制作し、それらを生活の中で活用してきた。しかし、元来、野生の

大甲藷は、茎の長さが不揃いで、必ずしも、「ものづくり」に適した素材ではなかった。そのことが、1908年の『大甲藷及同製作品調査書』に記されている。

「…自生の藷草は其繊維短きのみならず、茎に大小あり品質の優劣甚しく為に製作上不良なるのみならず、斯業発達と共に自生品のみにては将来不足すべき事を豫想し自生せるものより苗を採り之を水田に移植せり、是れ即ち大甲藷か作物となりし起源とす…。」[注47]

それゆえ、生活用具としての質を高めるためには、ある程度均質な素材を作り出すことが必要であり、そのために、当該地域の人々が、努力をしたということである。

それでは、大甲藷は、どのようにして人々の手で栽培され(図17、18)、「ものづくり」に適した良質な材料となったのであろうか。同書には、以下のようなことが記されている。

「乾隆30(1765)年の頃……付近の水田に栽培するもの多く、当該地域新作物の栽培を開始し以って…。」[注48]



図17 大甲藷の栽培水田の様子[注49]



図18 大甲藷の生育状況（著者撮影）

この資料によると、人工栽培の歴史はかなり古いようである。1765年頃には、すでに、多くの人々の手で栽培がなされるようになったものと思われる。なお、上述の水田とは、当該地域で、古くから主要産業になっていた稲作のための水田であろう。人々は、野生の藷草を水田に移して管理・育成することで、茎の太さや長さが不揃いであるという弱点を克服しようとしたのである(図19)。

もちろん、稲作が主な生業とされてきた当該地域においては、大甲藷への転作は比較的容易であったこともそれを後押ししたものと思われる。その後、人々は、水稻、さつま芋を前後作物として輪栽を行うことで、土地の衰えを防ぎつつ、大甲藷の品質を高めていった[注50]。

このように、大甲藷の人工栽培技術は、当該地域の人々の普段の工夫によって創出され

たものであり、人々の大甲藨に対する思いの強さがきわめて良く表れていると言
ってよい。

4.2. 大甲藨の三種類の収穫時期

人々は、栽培・採取時期に応じて、大甲藨の特性が変化することを敏感に把握し、それを大甲藨製品の制作に役立ててきた。

植物学的にみると大甲藨の品種は一種のみである。しかし、人々は、収穫時期の違いによって、「春草」(早草)、「秋草」(允仔草とも称される[注51])、「三冬草」の三種類に区別して捉えてきた。一般的には、年に2回収穫できることから、春草と秋草の二種がよく知られており、それらのおよその収穫時期は、前者が旧暦の6月、後者が旧暦の9月である。また、三冬草は、旧暦1月に、元々生育

していた水田から他の水田へ移植し[注53]、それを同年の旧暦4月(春草)、6月(秋草)、9月(三冬草)に収穫するものである。つまり、年三回の収穫が可能であったことから付けられた名称であると思われる(表3)。これは、大甲藨の収量を増やすための工夫である。なお、上述したような差異は、植物学ではエコタイプと称されている。

ところで、表3は、張仲堅の『臺灣帽蓆』のデータに基づいて作成したものである。この表をみると、3つのエコタイプのうち秋草が最も高品質で価格も高く、大甲蓆や大甲帽子などの高級製品用の材料として用いられてきたことがわかる[注54]。春草は、品質、価格とも秋草より若干落ちるが、主に、鞆、財布入れ等の材料として用いられた。また、三冬草は、温暖な台湾中部とはいえ、生育時期が低温期に相当するため、品質的には他の2種類に劣り、それゆえに、名刺入れ、座布団等、大甲蓆や大甲帽子に比較すると安価な小物製品の材料として利用されてきた。

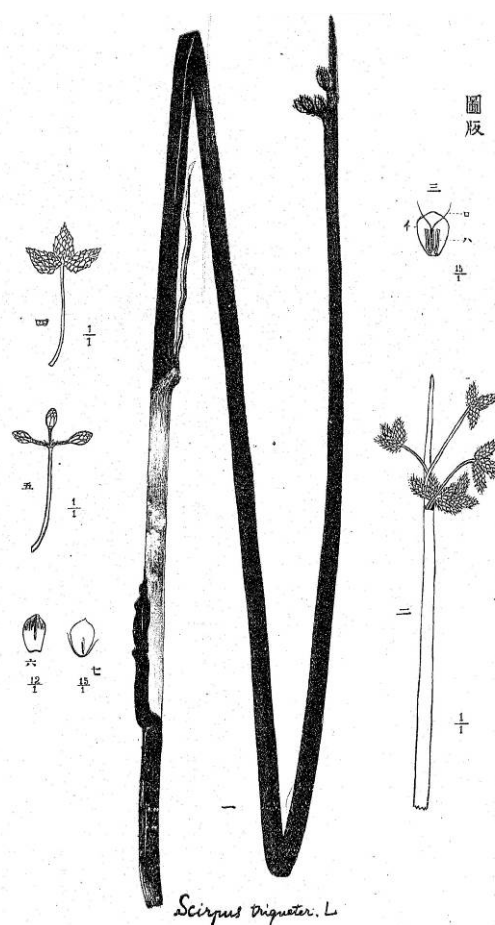


図19 大甲藨の構成図[注52]

表3 「大甲藨」のエコタイプによる生育、品質、価格、用途の違い [注55]

藨草の名前	繁殖の方法	収穫時期 (旧暦)	成長日数 (日)	乾燥後 重量 (斤/ 百斤)	価格(表2 の平均値) (「円/ 百斤」)	製作品品
第一期 春草/	播種	6月	100	20	6	鞆、財布入れ等
第二期 秋草	宿根	9月	60-70	22	7.63	大甲蓆、大甲帽 等
第三期 春草、秋草、 三冬草	宿根	4、6、9 月	60-70	—	—	名刺入れ、 座布団等

また、表4に示すように、大甲藨の価格は、一般的に、秋草が春草より高額であった。さらに、同じ、春草、秋草の中でも、上、中、下の3級の区別がなされていたことがわかる。いずれにせよ、当該地域の人々が、いかに大甲藨を観察し、この植物の特性を深く認識し、その特性に応じた「ものづくり」に活かしてきたかがうかがえる。

表4 1905-1907年の「大甲藨」の価格の比較 [注56]

年	春草 (円/百斤)		秋草 (円/百斤)	
	上	中	上	中
明治三十八年 (1905年)	上	9.30	上	11.10
	中	7.14	中	10.00
	下	6.25	下	9.30
明治三十九年 (1906年)	上	3.20	上	4.8
	中	2.85	中	4.00
	下	2.5	下	3.20
明治四十年 (1907年)	上	5.50	上	7.00
	中	3.80	中	6.10
	下	3.30	下	5.30

4.3. 肥料の工夫

当該地域の人々が、大甲藨を、いかに良質な素材にしようとしたかは、肥料の工夫にも

現れている。『大甲藪及同製作品調査書』の記録によると、大甲藪の栽培で使用された肥料は、いずれも、当該地域で入手可能な落花生油粕、人糞尿、豚糞尿、堆肥の4種類であった。同書を見ると、以下のように記されている。

「大甲藪の肥料として主なものは落花生油粕、人糞尿、豚糞尿、堆肥…落花生油粕は此等の肥料中最も優良にして藪草の生育をして良好ならしむるは勿論、勉強にして良質なるものを多量に収穫することを得るへし…」[注57]

大甲藪の栽培にもっともよく使われたのは、「落花生油粕」であったことがわかる。「落花生」は、当時、食用油脂の原料として当該地域で盛んに栽培されており、重要な特産物のひとつであった。「落花生油粕」は、その絞り粕である。人々は、大甲藪の栽培を繰り返す中で、「落花生油粕」を施用した水田では大甲藪の生育が最も良好で茎も丈夫になり、収量も多くなることを見出したのである。

このように、大甲藪の生産は、当該地域のさまざまな資源の全体活用としてなされてきたことがうかがえる。

4.4. 当該地域の生活の中で育まれた大甲藪工芸

1908年の『大甲藪及同製作品調査書』に記された、1907年の大甲地域における1甲(≒ha)当たりの乾燥大甲藪の収穫量をまとめたものが表5である。

同書には、以下のような記述がある。

「各農業者が僅々五厘乃至一分苑栽培せるもの、総計にして未だ嘗て一人の藪草栽培農家を認めざるなり…」[注58]

ここに記されているように、大甲藪の栽培は、専業で行う者ではなく、当該地域で農業を営んでいた人々が、兼業で行っていた様子が見えてくる。

大甲藪の職人への著者らの聞き取り調査からも、製品作りに用いた大甲藪の全てが、自家の農地で栽培し収穫したものであったことが判明している[注59]。つまり、このことは、そもそも、大甲藪の栽培が、稲作を行う水田で輪作に基づいてなされていた事実とも合致しており、「大甲藪工芸」が、当該地域の他の生業と密接に結び付いてはじめて成立する「ものづくり」であったことを示していると言える。

「大甲藪工芸」が、材料の生産から廃棄に至るまで、いかに当該地域の人々の生活と密接に関わっていたか、また、いかに地域の人々の生活に組み込まれて発展してきたかが如実に表れていると言えよう。

表5 1907年の大甲地域での「大甲藺」収穫量 [注60]

産地	収穫の時期	大甲藺の産量（乾燥の状態）		
		上等（斤）	中等（斤）	下等（斤）
（苗栗三堡）日南庄	第一期（春草）	3,000	2,500	2,000
	第二期（秋草）	3,000	2,500	2,000
	小計	6,000	5,000	4,000
（苗栗三堡）大甲庄	第一期（春草）	5,000	4,000	3,000
	第二期（秋草）	5,000	4,000	3,000
	小計	10,000	8,000	6,000
平均		8,000	6,500	5,000

単位：斤/1 甲≒ha（ヘクタール/hectare）

5. おわりに

これまでみてきたように、日本統治時代の台湾において産業化され、主要な輸出品として認識された「大甲藺工芸」であるが、その礎は、当該地域の人々の創意と工夫の産物として生成されてきた「生活文化」であったことが判明した。

本章において得られた結果を、以下のようにまとめた。

(1) 「大甲藺工芸」の発展の礎は、台湾大甲地域の人々が、生活の中で、大甲藺という材料を発見し、その利活用方法のみならず、より良質な材料を作り出すための工夫を、人々自身の手でさまざまになしてきたことにある。

大甲藺は、台湾中部の大甲・苑里地域のみで生育する当該地域特有の植物である。その発見のきっかけは、台湾の原住民の一つであるタオカス族の女性が、河口の湿原で成長した野生の大甲藺を摘み取って、蓆を編むための素材として利用し始めたことであった。さらに、当該地域の人々は、大甲藺の特質を徹底的に観察・理解し、「ものづくり」に活用しながら、より良質な大甲藺を得るために栽培をも行うようになった。また、その後にあっても、落花生油粕を肥料として活用するなど、産業化以前に、すでに、生活用具としてより良質な材を得ようとする努力が、さまざまに展開されていたのである。

(2) 「大甲藺工芸」は、当該地域の人々の生活の中で全体活用が徹底されるなど、生活との密接な関連の中で創生され発展してきたものである。

大甲藺は、大甲蓆、大甲帽子などの生活用品のみならず、被服に関する文化、食に関する文化、祭礼に関する文化等の多様な側面で利活用がなされ、まさに、当該地域の生活を支える重要な素材としての役割を担っていた。また、使用に耐えない部材、使用後の生活

用具までもが、必ず肥料として田畑に還元されており、徹底した「一物全体活用」が実践される中で構築された生活文化であることがわかる。

(3)「大甲藺工芸」は、当該地域の人々を結びつける重要な媒体であった。

人間社会で、その地域に生育する素材を利用する発端は、まず、生活の身の回りを徹底的に観察・理解することであった。そうした中で、生活で必要とされる用具を作る文化が創生されたと考えられる。今日、大甲藺が発見されそれを素材として、大甲蓆が作られるようになってから、およそ300年が経過した。その間、大甲帽子、煙草入れ、紙入(財布)、下駄表、インソール等、さまざまな生活用具が、自ら考案した道具を使って製作され、産業としての発展を遂げるに至った。その礎は、先人が自然の恵みである大甲藺を大切にし、かつ、自らの手で栽培する術を学ぶことと、資源の有効利用を計るという英知の賜である。また、大甲藺の優良品はもとより、不良品までも徹底して利用したり、自然の恵みを徹底的に利用する「一物全体活用」の観念が見受けられる。総じて、かつて、大甲・苑裡地域の主要な産業として展開された「ものづくり」である「大甲藺工芸」の基盤は、まさに、当該地域の人々の生活にこそあった。かつ、そのことによって、「大甲藺工芸」が、人と人、人と自然とを巧みに結び付けたのであった。

近年、大甲・苑裡両地域の多くの住民が、「大甲藺工芸」を振興するために努力している。しかしながら、この工芸振興の目指すのは主に経済的な発展を遂げることにあるように思われる。しかし、本章で概観してきたように、両地域の住民は、今後の振興の過程で、大甲藺の文化に対してなお一層深い認識を築き上げることができなければ、先人達が残した生活文化を継承して行くことは難しいと思われる。「大甲藺工芸」に編み込まれてきた文化を再思考し、伝統工芸産業の発展を、ただ経済的な側面から捉えるのではなく、生活文化を強く認識して大甲藺産業の振興に取り組んでいかなければならない。地域の内発的発展が叫ばれて久しい今日、「大甲藺工芸」を、当該地域の人々が、自らの生活をより豊かなものにしていく営みの中で構築された生活文化として再確認・再認識し、まさに、これからの当該地域の生活のあり方と一体化させつつ振興していくことが不可欠である。

本章で明らかとした「大甲藺工芸」の特質を踏まえた産業化の歴史の把握、ならびに、地域振興策の導出に関しては、別章において論じることとしたい。

注

- 1) 台湾經濟部水利署の大安溪流域図を修改である。
<http://www.wra.gov.tw/ct.asp?xItem=20073&CtNode=7760#> (日付:2011、11)
- 2) 大甲藪及同製作品調査書、本島製筵に関する調査、本草圖譜、大植物図鑑、國立台灣大學植物標本館、中外商業新報などに参考する。
- 3) 島田弥市、倉田藤一:大甲藪及同製作品調査書、台湾総督府殖産局、3、1908
学名はScirpus Triqueter、L、
- 4) 中外商業新報:世界的に活躍する台湾婦女子の手編み帽子(一)、8.2-8.8、1931
- 5) 前掲書3)、3
- 6) 前掲書3)
- 7) 田邊一郎:本島製筵に関する調査、藪ノ種類、台湾総督府殖産局、4、1915
鹹草(キヤムザウ)と稱シ塩気ある土地に生育する草の意にして…。
- 8) 岩崎常正、本草圖譜 15 卷、濕草部 圖譜、苳苳(シヤントウ)、本草図譜刊行会
14、1917
- 9) 台湾植物資訊整合查詢系統:國立台灣大學植物標本館、2012 <http://tai2.ntu.edu.tw>
- 10) 前掲書8)
- 11) 西川五郎:七島藪の栽培に関する研究(第1報)、水田栽培と畑栽培の比較、日本作物
學會紀事、日本作物学会、18(2、3、4)、173-176、1949
- 12) 前掲書7)、4
- 13) 前掲書7)、49
- 14) 村越三千男:大植物図鑑、大植物図鑑刊行会、811、1925
- 15) 前掲書14)
- 16) 前掲書14)
- 17) 藪草大図鑑、<http://www.omakase-factory.net/igusa/> (日付:2012、2、10)
- 18) 邱年永、張光雄:原色台湾薬用植物図鑑(2)、燈心草、南天書局、2、280、1991
- 19) 諸羅県は、およそ、現在の台湾の嘉義と台南の北部地域一帯に相当する。12巻47目か
ら成り、各巻の分類は、それぞれ、封域、規制、秩官、祀典、学校、賦役、兵防、風
俗、人物、物産、文芸、雜記等である。
- 20) 周鍾瑄:諸羅県志、卷10、物産分類、草之属、台湾経世新報社、933、1717
- 21) 『淡水庁志』が編集された1871年には、清政府によって、大甲溪の以北の地域は、す
べて淡水庁の管轄区域とされた。今日のように、台北の南部から大甲溪までが「新竹
県」に帰属するようになったのは、1875年になってからのことである。

- 22) 陳培桂：淡水廳志、卷12、考2、物産考、物産、草属、臺灣中央研究所、327、1871
- 23) 前掲書22)、幣属、337
- 24) 陳彦同：富強與國際關係-清末貨幣制度之探討、政治大學政治研究所、18、2006
清末には、1銀元は、1元と呼ばれ、1元(銀)の重量は、7錢2分、すなわち、0.72両であった。
- 25) 陸佃：埤雅、四庫全書薈要、經部、小學類、卷18、宋
- 26) 莞：国語辞書、植物の名。フトイ。また、イで織ったむしろ。
- 27) 「大甲藺」の俗称は「蓆草」であるが、「鹹草」と呼ばれることもあった。
- 28) 「考」は、「探究」「研究」を意味する。
- 29) 蔡振豐：苑裡志、下卷、物産考、右花属、臺灣中央研究所、93、1897
- 30) 廖瑞銘：大甲鎮志、第5篇、經濟篇、台中縣大甲鎮公所、663、2007
双寮社:およそ、今日の台中市大甲区建興里の西北部周辺である。大安溪の河道が変更されたために、すでに存在しない。
- 31) 前掲書3)、8
- 32) 前掲書31)
- 33) 台湾日日新報：家内工業の振興策(上・下)、台湾日日新報、1922
- 34) 連横：臺灣通史、卷26、工藝志、紡織、臺灣中央研究所、642、1918
- 35) 明清以後、1両の銀を1金と呼ぶようになった。
- 36) 吳玲青：臺灣米價變動與「臺運」變遷之關聯(1783-1850)、中央研究院臺灣史研究所、118、2010。1850年清時代米の価値は、1石(100リットル)=1.61両であった。それゆえ、1元(0.72両)で、およそ44.72リットルの米を得ることができた。
- 37) 鄭聯慶、黄清龍：百年召集藺、國立台中技術學院圖書館數位内容組、86、2012
- 38) 前掲書37)
- 39) 前掲書30)、文化篇、1260-1261
- 40) 前掲書30)、文化篇、1261
- 41) 大甲地域の李安妮氏と苑裡鎮出身の羅麗芬氏への聞き取り調査による(日付：2013、6)。
- 42) 趙樹人：苑裡・藺草編織人、國立台中技術學院文化創意産業發展中心、25、2008
- 43) 前掲書37)、62
- 44) 民間薬の材料、大甲地域の李金龍氏からの聞き取り調査による(日付：2013、6)。「医食同源」ともいわれる、中華文化の影響を大きく受けた当該地域においては、薬は食に分類されるのが一般的である。

- 45) 前掲書37)、62
- 46) 前掲書42)、45-46
- 47) 前掲書3)、8-9
- 48) 前掲書3)、9
- 49) 絵葉書、李安妮氏提供
- 50) 前掲書3)、22
- 51) 允仔草の発音(ウンアーツァイ)。
- 52) 前掲書3)
- 53) 前掲書3)、22、「…同一地に於て同作物の栽培困難なるものあり…。」
- 54) 前掲書30)、経済篇、664
- 55) 張仲堅：臺灣帽蓆、南天書局、117、2002
- 56) 前掲書3)、49-50
- 57) 前掲書3)、28
- 58) 前掲書3)、12
- 59) 職人、大甲地域の建興社区に居住する李莊完氏(67歳、女性)、莊昭月氏(69歳、女性)
二人からの聞き取り調査による(日付：2013、3)。
- 60) 前掲書3)、34-35

参考文献

- 1) 新日本台湾地図：野島書店、4、1895
- 2) 台湾河川復育網：trrn.wra.gov.tw/
- 3) 渡部富男：珪酸塩白土(ソフトシリカ)利用による湛水土壤中直播の出芽・苗立の安定化技術、雑草とその防除、千葉県農試、(25)、42-45
- 4) 菅谷茂、喜多和子、鈴木信夫：抗酸化健康剤機能性ゼオライトによる放射性物質吸着に関する研究成果、放射性物質除染対策、千葉大学大学院医学研究院、2011
- 5) 藺草栽培と染め、1900
- 6) 台湾人士鑑、1937
- 7) 台湾館之図、風俗画報、1903
- 8) 実験活用一坪学校園、1937
- 9) 台湾帽子要覧 第7、1941

第2章

台湾大甲藺工芸産業の変遷と大甲地域における 内発的発展の展開

—台湾大甲地域における内発的に関する調査・研究（2）

1. はじめに

本章は、台湾大甲地域における今後の地域振興のあり方を導出する調査・研究の第二報である。当該地域の特産である大甲藺工芸は、清時代に台湾における少数民族の一つであるタオカス族の二人の女性が、大安溪下流付近に自生する大甲藺を発見し、蓆などの生活用具の材として用いたのが始まりとされる。人口の多くが中国大陆からの移民もしくはその子孫で構成される台湾において、台中市近郊地域で創出され発展した大甲藺工芸は、数少ない独自の工芸の一つである。しかしながら、今日、大甲藺工芸は消失の危機を迎えており、その対策が急務となっている。

本章は、当該地域において展開されつつある「社区総体营造」[注1]の手掛りとなるよう、これまでなされてこなかった大甲藺工芸産業の変遷をまとめると共に、それに関与した人々の活動を「内発的發展」[注2]の観点から明らかにすることを目的としたものである。

なお、本研究は、『大甲藺及同製作品調査書』『台湾帽子の話』『臺灣帽蓆』『大甲鎮志』『大甲帽蓆專輯』などの文献資料、ならびに、当該地域で大甲藺工芸の生産や流通に関与してきた人々への聞き取り調査に基づいて実施した。

2. 大甲地域の概要

大甲藺工芸が発祥し興隆した地域は、今日の台中市と苗栗県にまたがる大甲地域と苑里地域である。すなわち、台中市の北西部の大甲溪下流の北岸に位置する約 60 平方キロメートルの範囲で、人口はおよそ 80,000 人である[注3]。当該地域は、元来、台湾の先住民（ペイポ族）の一つであるタオカス族の居住地であった(図1)。17 世紀中頃の清の康熙の初年の記録によると、当時、タオカス族は、大甲街[注4]と苑里街[注5] 一帯にいくつかの集落を形成しており、その人口は 2～3 千人程であった[注6]。

一方、台湾南部に定住していた大陸からの移住者が中・北部に移り、その一部が当該地域の沿岸部に居住するようになったのは、鄭氏政権(1662 年)開始前後のことであっ

た[注7]。さらに、1669(永暦23)年に、鄭成功の部将の一人であった劉国軒氏が副官を派遣し、大甲の鉄砧山[注8]に兵を駐屯させて開墾を始めたことが、当該地域へ多くの漢民族が移住するきっかけとなった。

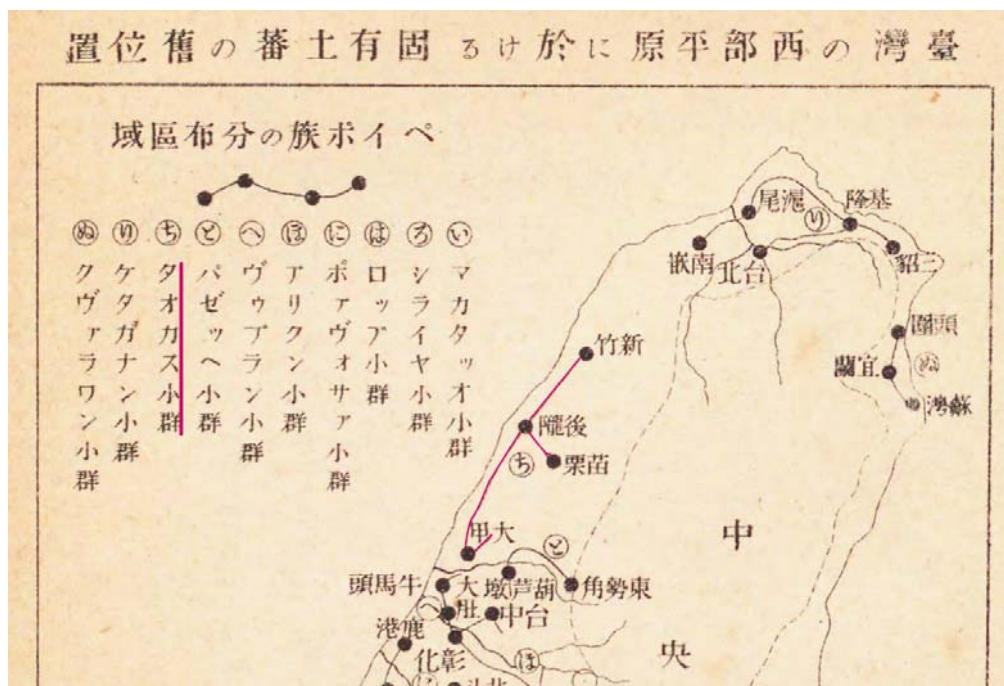


図1 平埔（ペイボ）族のタオカス小群の位置図 [注9]

その後、清時代の初期に相当する 1684(康熙 23)年には、清朝が台湾への移民を禁止する政令を出したことから、台湾の開墾が制限されるようになった。1701(康熙 40)年にこの禁止政令が緩和されると、漢民族の人々は、鹿港[注10]、あるいは、大安港[注11]から台湾に入り、ますます大甲地域への移住の速度を速めていった。『諸羅縣志』には、その当時の様子が記載されている箇所がある。

「…康熙 49 年 (1710) 因洋盜鄭盡心騷擾、清政府設「大甲塘」目兵 5 名。證明大甲已有漢人聚落、並有官方保護、但人口不是很多。」 [注 12]

(…康熙 49 (1710) 年、鄭盡心という海賊が大甲地域の沿岸部で騒動を起こした。清政府は、兵士 5 名を派遣し「大甲塘」を設けた。これは、当時、すでに大甲に漢人集落があったことの証明で、それを清政府が保護していたことになる。

しかし、当時はまだ人口は少なかった。)

このように、地名に「大甲(TAOKAS)」が用いられているようになったが、これは、タオカス族の民族の名称のいわば当て字である。「大」や中国語で「一番」を表す「甲」が用いられていることからみても、当該地域がいかに「豊かな地域」と見なされてきたをうかがい知ることができる。ちなみに、「塘」とは、「堤防」の意味である。ここは、大甲溪という河川の河口付近の防衛点であった。

その後、清朝の雍正年間末期から乾隆年間初期、すなわち、1735 年前後になると、大甲地域で最初に開墾を始めた林成祖[注 13]らが大甲で水利工事を行った。また、1780 年には、大甲の用水路（現在の名称は、「虎眼大圳」）を堀抜いて開墾地に灌漑ができるようになると、耕地面積は数千ヘクタール以上に達した。また、漢人の宗教・信仰の場として、「國姓廟」[注 14]と「鎮瀾宮」[注 15]の二つの寺廟が建立されたのもこの時期のことであった。



図 2 大甲・苑理地域の位置図[注 16]

このような経緯で、大甲・苑理地域には(図2)、次第に人々が集住するようになっていった。さらに、大甲区役所の資料[注17]には、市街地が形成された様子が以下のように描かれている。

「1787年(乾隆52年)因鄰近農村居民集中、使新庄地區又由鄉街形態演進至商業街市、成為當時大甲堡內各庄之經濟活動中心。」

(1787(乾隆52)年に、新庄地域の周辺に農村の住民が集中し市街地の形態ができ、さらに発展して商業の中心街ができあがった。ここは、当時、大甲堡(清時代大甲鎮の旧名)内の経済活動の中心となった。)

このようにして、大甲地域は、台湾中部の海岸線地域の中でも1～2に数えられる豊かな鎮に発展していった。こうした地域の発展は、ますますの開墾と水利の整備に結び付き、その後、当該地域の代表的な産業になっていく水稻や落花生などの生産を中心とした農業の振興につながっていった。前報で記したように[注18]、「大甲藺」の人工栽培は、水田において、落花生油の絞り粕を主な肥料として生産がなされたことから、後に「大甲藺産業」が成立するための基盤は、まさに、この時期に構築されたといっても過言ではない。



図3 大甲藺の編み模様(著者撮影)

3. 大甲藺工芸の産業史

上述したように、大甲・苑理地域において、当該地域に自生していた大甲藺を活用した「ものづくり」が展開し(図3)、その後、台湾の発展を担う産業として成立していくこととなった。本章においては、大甲藺工芸産業の変遷を、産業の発生や生産量の変化(図4)を参照しつつ、以下の5つの時代に区分した。

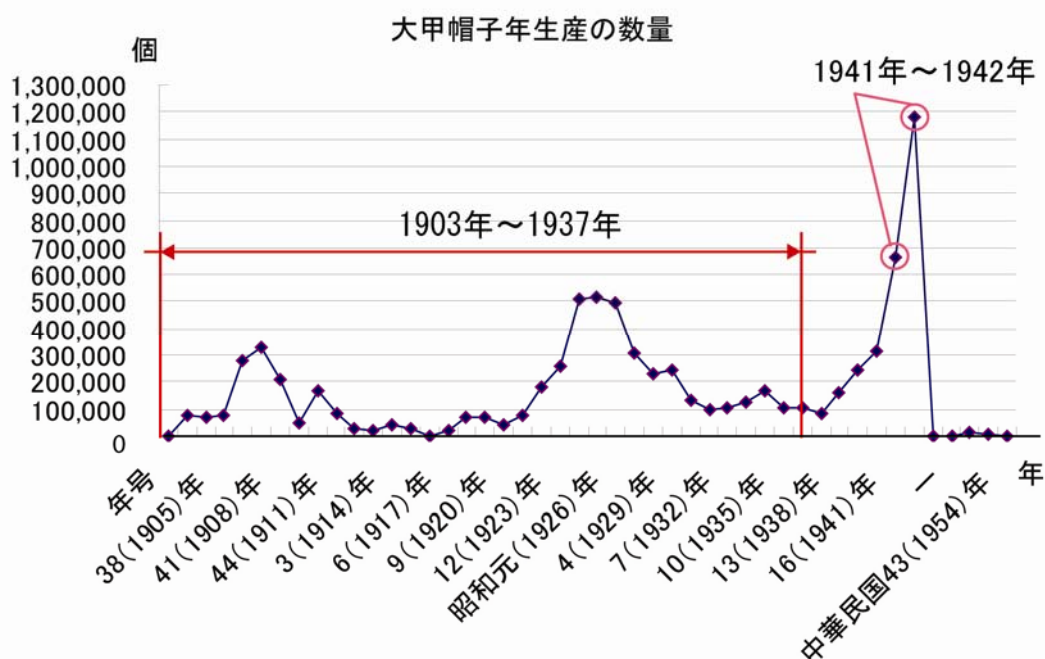


図4 大甲藺帽子の年別生産量の推移 [注19]

- 1) 黎明期：清時代に「大甲藺」の編み技術が発展した時期で、1729～1895年頃に相当する。
- 2) 発展期：日本統治時代が始まり、台湾総督府の家内工業の推進を受けて、「大甲蓆」や「大甲帽子」の生産が産業化した時期であり、当該地域の総合的な生活の向上に地元の郷紳らが大きく寄与した時期である。1895～1903年頃に相当する。
- 3) 最盛期：「大甲帽子」の生産がピークを迎えた時期で、1903～1942年に相当する。
- 4) 衰退期：さまざまな原因で産業界が不況に陥った1943年から第二次世界大戦を経

て、1946年から始まった中国国民党と共産党との内戦、ならびに、1970年代の台湾の社会・経済体制の変容に直面し、産業としての「大甲藺工芸」が衰退した時期である。なお、同時期は、台湾の産業全体が不振に陥った時期でもある。

5) 復興期：1990年代の「社区総体营造」施策の開始から現代までの時期に相当する。

次に、これら5つの時代について、時代背景や「大甲藺工芸」の特徴を詳述すると共に若干の考察を加える。

次に、これら5つの時代について、時代背景や大甲藺工芸の特徴を詳述する。

4. 「黎明期(1729～1895年)」における大甲藺工芸

4.1. 大甲藺工芸の生活における使用

大甲藺工芸が創始された当時の人々の暮らしは、1894(光緒19)年に著された沈茂蔭[注20]の『苗栗縣志』に垣間見ることができる。

「…至衣裳鍼綻、不假外人；甚有刀尺精良、為裁縫家所不及者。貧者不為婢。或紡綿為線、或織草為席、後壟、大甲等處皆同；而席、則大甲為尤着。」[注21]

(…服が破れた時、当該地域の人々は、自ら針を手に取り、それを見事に縫い合わせる。女性の中には、裁縫の専門家でも及ばないほどの高い技術をもった者がいる。当該地域の人々は、たとえ貧者でも下女のような仕事はしたくないと言う。この技術をもって、真綿を紡いだり、草を編んで蓆を作ったりする。後壟地域[注22]や大甲地域等の婦人達の多くが、その才能を活かして「ものづくり」を行っている。近隣の地域で最も優れた蓆は大甲でつくられたものである。)

このように、人々は、自給自足を基盤とする生活の中で、さまざまな生活用具を、自らつくり出し、また、それらを日々の生活の中で誇りをもって大切に用いていたことがうかがえる。とりわけ、大甲地域でつくられる蓆が良質であるとの記述があることから、当時から、大甲藺を素材とした蓆がつくられ、生活の中で使用されていたことがうかがえる。

4.2. 大甲藺工芸の交易

4.2.1. 大甲藺工芸の移出

大甲地域周辺の人々の生活の中で用いられた大甲藺工芸であるが、他地域への移出も、比較的古くから行われていた。1908(明治41)年に著された『大甲藺及同製作品調査書』には、すでに1828(道光8)年前後には、大甲街の莊助という人物が、木綿や絹ならびにその他の物品を付近の先住民の居住地で藺草製の蓆と交換したことが記載されている。なお、当時、「藺草製の蓆」は「番仔蓆」と呼ばれていた[注23]。

さらに、『大甲藺及同製作品調査書』には、次のような記述がある。

「…其編方の其巧妙なるを以て大甲蓆の名は普く世に知られ、…地方の商人に於てのみ取引されもの漸次新竹台北より之か仕入の為め同地方に来るものを見、各地に仲買商人の続出するに至れり。」[注24]

このように、物々交換によって取引された大甲蓆が、新竹や台北といった台湾島内の他地域へ転売されるようになっていたことがわかる。

4.2.2. 大甲藺工芸の輸出

台湾島内で広く大甲蓆が販売され商売として成立するようになると、いよいよ海外への輸出の時代を迎えることとなった。

清時代は、水運が発達し、台湾と中国大陸との間では船による交易が盛んになされていた。1860(咸豊9)年に、清国が天津条約に基づいて台湾の台南と淡水を開港すると、物資の取引はますます活発になり、大甲蓆も台湾から中国大陸への重要な輸出品となった。

当時の大甲蓆がいかに重要な品目であったかについては、『臺灣帽蓆』に、次のように記されている。

「…加花紋圖案的草蓆稱為加紋蓆、為高官富賈離臺赴京餽贈長官親友的最佳禮品、清朝皇帝也以此頒賜王公大臣、被視為珍品…。」[注25]

(…紋様が付された蓆は「加紋蓆」と称され、高官や金持ちが、上京の際、上官や親友への贈りものに用いた台湾で最上の土産品であった。清朝の皇帝も、この蓆を有爵者や大臣に贈る珍しい物とみなしていた…。)

上記から、大甲蓆は、すでに清の官吏らが贈りものとして台湾からもち帰る重要な工芸品とみなされていたことがわかる。こうして、大甲蓆は、「加紋蓆」[注 26]と称された文様が付されたものを含めて、中国大陸向けに輸出され、良く知られるようになっていった。

このように、「黎明期」は、いまだ産業と言えるような規模ではないものの、大甲藺工芸の品質が広く知れ渡り、大甲地域から他地域への移出・輸出が行われ始めた時代であったことがわかる。

5. 「発展期(1895～1903年)」における大甲藺工芸

5.1. 「大甲藺工芸産業」の成立の背景

「黎明期」において、広く知られるようになった大甲藺工芸は、やがて、台湾の主要な輸出産業へと発展していく時期を迎える。それが、日本統治時代の前期に相当する「発展期」である。

この「発展期」の「大甲藺工芸」の生産高については、『台湾貿易四十年表』の統計に基づいて、1902年～1912年の推移を表すグラフを作成した(図5)。1906年からの3年間は大甲帽子の生産量が急増しており、大いに流行したことがうかがえる。

この時期、大甲藺工芸が産業として発展した主な要因は二つあると考えられる。

一つは、当時、新たな統治者となった台湾総督府が、島内各地の工業を発達させるために、全島に「家内工業」を推進する政策をとったことである。大甲藺工芸も、その重要な品目の一つとされたのである[注 27]。1919(大正8)年の『帝国の殖民(下)』には、そのことが次のように記されている。

「製帽業は一種の手工業又は家内工業に過ぎずと雖も近来最顕著なる発達を遂

げ将来最有望なる手工的家庭工業の一なるべし…。」[注 28]

また、『大甲藺及同製作品調査書』には、次のように記されている。

「…大甲藺製品従業者は何れも徒手遊食の婦女子のみにして其家内工業として利ある。所以は之か原料に多くの資金を要せずして製品の価格は全く労働賃銀にあるを以てなり。」[注 29]

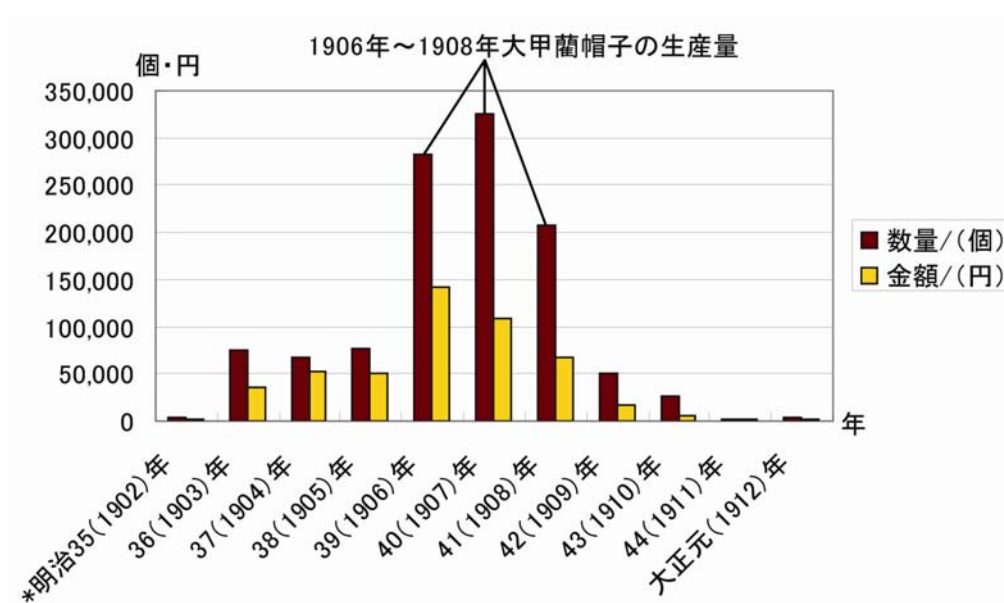


図5 夏帽子輸出の統計表 [注 30]

清時代には、生活用具としての蓆を編む技術の基盤ができあがっていた大甲藺工芸は、当時すでに高い品質を有しており、かつ、産業化に当たっての設備投資をそれほど必要としなかったことから、「家内工業の推進」という政府の施策に取り上げられ易い条件を具備していたと言えよう。

また、主な要因の二つ目は、当該地域の「郷紳」と称される地域社会のリーダー達が、積極的にこの産業を推進したことである[注 31]。このことは、今後の大甲藺工芸が内発的に発展して行くにあたって、とりわけ重要な示唆を与えてくれるものと思われる。

次に、当該地域における郷紳らの活動を概観する。

5.2. 大甲藺工芸の発展を支えた郷紳

ここでは、大甲藺工芸産業の主軸となった「大甲帽蓆合資会社」（一般的には「大甲帽蓆会社」と呼称された）の共同設立者であり、地域の内発的発展に寄与した6名の「郷紳」である朱麗(図6)、李聡和、杜清(図7)、陳瑚、李進興、李城について概観したい。特に、朱麗、杜清、李聡和の3名は、1906(明治39)年に台中庁の公共衛生の費用から「大甲浄水場」の建設補助金3万円を獲得した人物である。



図6 朱麗 [注32]



図7 杜清 [注33]

それぞれの人物の概略は、以下の通りである。

(1)朱麗 大甲街の出身で、1897(明治30)年から1922(大正11)年までの25年間にわたり、大甲街副街長、街長等の公職に就いた人物である。1897(明治30)年に初めて大甲街副街長を担当した際、疾病の伝染を防止するために、飲用水の水質を改善することを最重要課題と考え、当時の台湾総督府の衛生顧問であった後藤新平に「大甲浄水場」を設置することを進言するなど、当該地域の発展に尽力したことで知られている。

1906(明治39)年に「大甲街長」に任命された朱麗は、大甲地域の他の郷紳らと共に、台中庁の公共衛生の費用から3万円の公共衛生費用を獲得した[注34]。5年後の1911(明治44)年7月10日に「大甲浄水場」の工事が開始され、翌(1912/明治45)年6月

30 日に竣工し使用が始まった。その際、不足した 5 千円を、この朱麗を始めとした 6 名の郷紳達が共同で設立した「大甲帽蓆会社」が出資した。この社名は、一般的には、「大甲帽蓆会社」と呼称されていたため、本章においても、その名称を用いる。その後、朱麗は、1915 年(大正 4)には、当時、台湾中部には台湾人が通える高等学校がなかったため、霧峰の林猷堂、彰化の辜顕榮、大甲の李進興、李城と共に、台湾中部で最初の台湾人の高等学校を創設したメンバーの一人となった。当時、「公立台中中学校」と呼称された現在の「国立台中一中」である。

朱麗は、上述したようなさまざまな功績によって、1911(明治 44)年に台湾総督府から台湾紳章を、また、1915(大正 4)年 11 月には大正天皇から御大典記念章を授与された。

(2) 杜清 大甲街(今大甲里)の人で、公益を重んじ、情熱ある人柄として知られた。1899(明治 32)年に、民間信仰の拠り所である「鎮瀾宮」を修築した人物である。1909(明治 42)年には、台中庁参事に就任し、「大甲帽蓆産業」を推進した功績で台湾総督府から台湾紳章を授与された。

(3) 李聡和 大甲庄尾の出身で、1906(明治 39)年に、「大甲帽蓆会社」の創立にも関わっており、また、1912(大正元)年には、「元泰商行」[注 35]の支店を神戸に設立したが、同年、39 歳の若さで日本において病死した。

(4) 陳瑚 苑裡房裡の出身で、1899(明治 32)年に「大甲公学校」の教員になった。翌 1900(明治 33)年に、台湾の中部で、「礫社」[注 36]という詩社の創立に参加した。1907(明治 40)年に苑裡区長に任命され、就任期間中は日本赤十字会の台湾支部の委員を担当し、台湾紳章を授与された。

(5) 李進興(図 8) 大甲街の営盤口の出身で、1899(明治 32)年に大甲保甲局の事務員を拝命した。朱麗、李城と義兄弟となり、共に大甲地区の地域振興に尽力した。そして、1901(明治 34)年 6 月に「臨時台湾土地調査」の委員を担当して、1902(明治 35)年褒賞を獲得した。李氏は滅私奉公の人物であり、自らの 5 甲[注 37]の畑を「大甲公学校」の用地

として寄付した。1922(大正 11)年に大甲街長になり、翌 1923(大正 12)年には、「大甲公学校」の高等科を、1927(昭和 2)年 4 月に「大甲女子公学校」(図 9)を創立した。それらの功績で台湾紳章を授与された。



図 8 李進興 [注 38]



図 9 大甲女子公学校 [注 39]

(6)李城(図 10) 大甲支庁の大安中庄の人で、1900(明治 33)年に土地仲裁委員を担当して、勤勉に職責を果たし、その功績で表彰された。1914(大正 3)年、「大安公学校」の学務委員を担当した。1920(大正 9)年、最初の大安庄長を務めた。任期内には、大安海水浴場を創設したり、大甲溪の堤防を建設した。水利組合評議員を担当したこともあって、1921(大正 10)年に台湾紳章(図 11) [注 40]を受賞した。



図 10 李城 [注 41]



図 11 台湾紳章の図案 [注 42]

上述の郷紳らの努力で、産業としての大甲藺工芸は大いに発展を遂げ、台湾の 5 大産業の一つに飛躍していったのである。また、これらの郷紳達が、「大甲藺工芸産業」の発展だけでなく、当該地域における福祉や教育の推進など、地域全体の発展に大きく寄与したことは特筆すべき点であろう。

次に、上述の郷紳らの「大甲藺工芸」の発展における活躍を概観していきたい。

5.3. 大甲帽子の開発と輸出産業としての発展

5.3.1. 夏用の大甲帽子生産の起こり

台湾が日本の統治下に入ったのは、1895(明治 28)年のことであった。2年後の1897(明治 30)年には、台湾総督府は、苑裡街に、「苑裡街役場」を設立した。そのことは、大甲帽子の出現と大きな関わりがある。『大甲鎮志』には、次のような記述がある。

「…明治 30 年、臺灣總督府苑裡辦務署署長浅井元齡、……有一天率部屬出巡、見大甲蓆精緻美觀、一時興起、脫下頭頂戴的時尚呢製小禮帽、詢問能否仿編、西勢社農婦洪鴛允予試編而開始。」[注 43]

(…明治 30 年、苑裡街の辦務署の署長・浅井元齡が、…ある日、視察に出る部屬を率いた。精緻な大甲蓆を見て、自分の帽子を取って、西勢庄で蓆を編み技術が上手い婦人・洪鴛に、その帽子を模倣して作らせた。これが「大甲帽子」生産のきっかけとされる。)

同様のことが、『大甲藺及同製作品調査書』にも記載にされている。

「…有名なる大甲帽子は今を去る十一年前即ち明治三十年苑裡街に辦務署の辦務署長浅井元齡西勢庄の人洪央の妻女をして之を製作に始まり、爾後煙草入、紙入、下駄表、座蒲団の類と共に製作増加し来れり。」[注 44]

また、『大甲鎮志』には、別の大甲帽子の起源が記されている。

「…另一種口耳相傳的說法是、洪鴛編製大甲蓆手藝在鄉里素享令譽。本年、她年幼的兒子頭上長瘡、為防蚊蟲叮擾和赤陽曝曬、在愛子心切的驅策下、亟思保護

其頭部的方法…、苦心研究以藺草試編成草帽而開始。][注45]

(…洪鴛という編み細工が上手な婦人の息子の頭に「できもの」ができ、その傷口にハエが群がるのを防ぐために、大甲蓆を編む技術を活用して創出されたのが大甲帽子である。)

このように、大甲帽子の起源には諸説があるが、いずれにせよ、当該地域の特産物であった大甲藺工芸の技術を応用して、人々の工夫によって夏用の帽子として発展したものであることがわかる。

こうした大甲帽子(図12)が産業化されたきっかけは、1900(明治33)年に、大甲地域の郷紳であった朱麗、李聡和、杜清の3人が、当時の苗栗庁長であった家永泰吉郎から、適当な夏用帽子作りを依頼されたことにある[注46]。この3人は、これを契機として、大甲藺を利用した編み工芸には大いなる発展の可能性があることに気付いたのであった。彼らは、李聡和の家に先住民の女性を呼び寄せ、野生の大甲藺で蓆を編む技術を活用して、大甲藺で夏用の帽子を編ませたのである。さらに、大甲の婦人の陳阿市、呉幼、黄廉、呉玉、陳富の5人[注47]を招いて大甲帽子の編みの技術を身に付けさせた[注48]。こうして大甲帽子の制作方法が、次第に当該地域の人々の間に広まっていったのである(図13)。



図12 大甲帽子 [注49]



図13 帽子技術者の育成訓練 [注50]

5.3.2. 大甲帽子の日本への輸出の始まり

大甲帽子が日本に輸出されるようになったのは、1901(明治 34)年のことである[注 51]。1900 (明治 33) 年、朱麗が、京都で開催された「全国貿易品博覧会」を見学して、帽蓆会社を興すことを考えたのである。翌 1901 (明治 34) 年には、朱麗、李聡和、杜清、李城の 4 人が、大甲帽子を販売するために、「元泰商行」という商社を創立した。また、同じ年、李聡和は、新竹から基隆港まで汽車で帽子 2000 個を託送し、さらに、それらを大阪府の樋口商店での販売を目的に船で神戸へと送った。こうして、台湾の大甲帽子の日本への本格的な輸出が始まったのである。

また、『大甲帽蓆專輯』には以下の記述があり、日本への輸出が、積極的になされていったことがうかがえる。

「…蓆販直接向製作蓆帽婦女收購、積極從大阪開始拓展大甲帽蓆。」[注 52]

(…商売人が「大甲帽子」と「大甲蓆」を制作した婦人達から直接入手し、それを積極的に大阪へ送り、大甲帽子と蓆の業務が広く開拓された。)

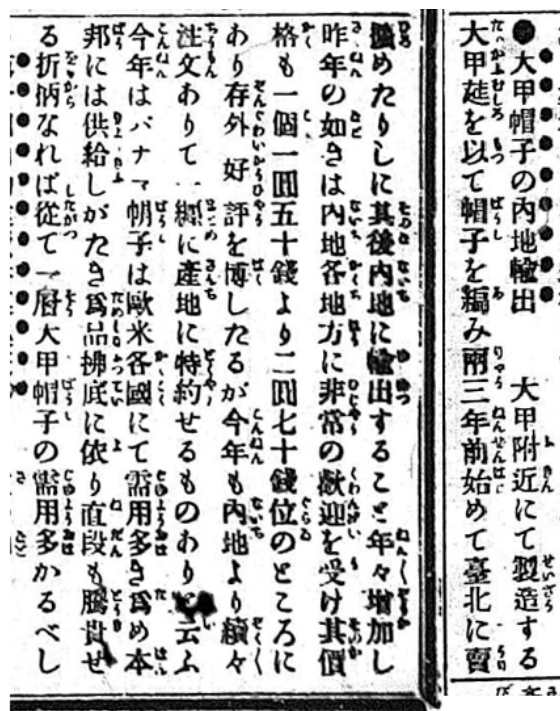


図 14 大甲帽子の内地輸出

それらの製品は、当時の日本において大きな人気を博していくことになった。その様子は、1902年4月22日付けの『台湾日日新報』に(図14)、以下のように記されている。

「●大甲帽子の内地輸出 大甲附近にて製造する

大甲箆を以て帽子を編み両三年前初めて台北に賣拵めたりし。其後内地に輸出すること年々増加し昨年の如しは内地各地方に非常の歡迎を受け其価格も一個一圓五十錢より二圓七十錢位のところにあり存外好評を博したるが今年も内地より続々注文おりて一纏に産地に特約せるものありと云ふ…。」[注53]

こうして、大甲帽子は、大甲地域の郷紳達の全面的な支持によって、海外への輸出販売がなされるようになったのである。

5.4. 「大甲帽蓆会社」の設立と大甲帽子の生産拡大

上述したように、大甲帽子の輸出先が日本本国となり好評を博していくと、当該地域における生産と移出・輸出に対する意欲はますます高まりを見せて行った。そのことは、1903(明治36)年の「大甲帽蓆会社」(図15)の設立に見ることができる。また、前述したように、この会社の設立者こそ、当該地域の主要な郷紳であった朱麗、杜清、李聡和、陳瑚、李進興、李城の6名であった。

この会社の住所は、「大甲街第二百三十二番地」であり、『大甲藺及同製作品調査書買』には、買入出張所を「苑裡庄に置く」と記されていることから、かなり広範囲にわたって、「大甲帽子」が制作されていたことがわかる。

『大甲藺及同製作品調査書』によると、この会社の設立目的は、「苗栗二、三堡[注54]において生産する大甲藺製品、林投製品[注55]等を制作・販売すること、ならびに、副業として、米の売買を行うこと[注56]」とされた(図16)。



図15 大甲帽蓆会社[注57]



図16 大甲帽蓆会社の製品[注58]

当時の『台湾日日新報』も、その内容を次のように報じている。

「…苗栗廳管下に製造する一切の大甲帽蓆は同會社に買収するの仕組にて品質の吟味は勿論帽子の型等を精選し普く一般の注文に應ずる筈なりと。(原文ママ)」(図17)

大甲帽蓆會社の設立 苗栗管下大甲附近に産出する大甲帽子は近來内地に於て大に需要を増加し製産地非常に繁昌を極むるに至りたる折柄各製造者競ふて製造の多きを貪り粗製濫造の弊隨て生じ其の儘に放置せば此迄得來りたる聲價を失墜するの恐れあればとて苗栗廳にては帽子及蓆製造業者の組合を設置し嚴重なる取締を爲さんものと曩に其の方法を具して之を殖産局に交渉したる該業者組合規則の發布なき限りは適當の制裁を加ふるの道なければ組合の設置も結果を奏するに由なからんとのことなりしかば組合組織の事は見合はせどなり更に各製造業者を結合して合資會社を起さしむることし之を重立ちたる本島人に勸誘したるに何れも異議のあるべきにあらず茲に十萬圓の資本を以て大甲帽蓆會社を起すに至り資本金は既に夫々拂込済となりたりと云ふ右會社の愈々事業に着手するに至れば苗栗廳管下に製造する一切の大甲帽蓆は同會社に買収するの仕組にて品質の吟味は勿論帽子の型等を精選し普く一般の注文に應ずる筈なりと

図17 大甲帽蓆会社の設立[注59]

このような状況の下、制作者達は、競うようにして大甲蓆製の製品の生産に注力していった。一方で、「粗製濫造」の弊害が生じるようになったことも事実であり、「大甲帽

蓆会社」の使命の一つに、そうした問題を克服し、大甲帽子の名声を高めることがあった。

それゆえ、「大甲帽蓆会社」では、二つの工場(図 18)を設立するとともに、業務の発展と職工の技術向上のために、香月貢と岡本三郎の2名の日本人を教師として招聘し、「大甲蓆製品」の技術開発と産品開発、ならびに、職人の技術指導に当たらせていたのであった[注 60]。

工場での技術の訓練がどのような内容であったかは、『発見道卡斯・大甲村庄史一』に、以下のように記されている。

「…位於媽祖廟之大甲工廠、以林紅柿、郭富為教師、計有婦女編工共 250 人。社尾工廠則以張枝、林快、駱駢為教師、編工有 100 人…。」[注 61]

(…大甲の工場は、媽祖廟(現在の鎮瀾宮)(図 19)に位置していた。そこでは、林紅柿と郭富が教師になって技術を教え、編細工として従事した女性は総計 250 人もいた。また、社尾の工場では、張枝、林快、駱駢が教師となり、編細工職人は 100 人に及んだ…。)



図 18 大甲帽蓆会社第一工場[注 62]



図 19 大甲鎮瀾宮[注 63]

このように、工場には、生産活動と帽子を集めて検査を行うだけでなく、技術指導を行う機能があったことがわかる。工場が、当該地域の大甲蓆工芸の技術の向上と普及に

果たした役割は、決して小さいものでなかったことがうかがえよう。

こうして、表1に示すように、1904年に一時的に生産個数は減少するが、この点については後述する。1903年と1905年には、大甲帽子の生産量は7万点を超えるようになり、1906年には飛躍的に増加して、28万個、翌1907年には32.5万個とピークを迎えた。

表1 夏帽子輸出の統計表 [注64]

日本の年号	西暦	大甲帽			林投帽		
		数量 (個)	金額 (円)	平均単価 (円)	数量 (個)	金額 (円)	平均単価 (円)
*明治35年	1902	2,811	1,546	0.55	—	—	—
明治36年	1903	74,364	36,375	0.49	—	—	—
明治37年	1904	67,752	52,381	0.77	—	—	—
明治38年	1905	76,980	51,062	0.66	1,656	5,500	3.3
明治39年	1906	282,852	142,882	0.51	1,452	5,500	3.8
明治40年	1907	325,723	108,447	0.33	—	—	—
明治41年	1908	208,415	66,454	0.32	—	—	—
明治42年	1909	50,788	15,932	0.31	180	140	0.8
明治43年	1910	25,486	5,937	0.23	10,769	11,886	1.1
明治44年	1911	2,645	2,012	0.76	—	—	—
大正1年	1912	4,180	2,086	0.50	7,424	14,846	2.0

(*統計の出典：東洋経済新報社、1935/1903-1912年の出典：台湾貿易四十年表、1936)

このように、「発展期」にあって、まさに、順調に発展して行った当該地域の「大甲藺工芸」であったが、1904(明治37)年には日露戦争が勃発し、この年の生産個数は一時的に減少した。『臺灣帽蓆』には、当時の様子が、次のように記されている。

「…1904年日露戦争、1905年5月13日臺灣全面實施戒嚴、7月7日才解除。

這段時間大甲藺製品銷售出現鈍化現象、價格下跌…。」[注65]

(…1904(明治37)年に日露戦争が勃発した影響を受けて、日本政府は1905(明治38)年5月13日から7月7日まで、台湾に全面的な戒嚴令を布いた。こ

の期間に大甲藪製品の販売は鈍化現象が現れて、価格は低下して行った。…)

その後、戦争の影響で経済が低迷したにもかかわらず、大甲帽子は、日本で大いに流行したのである。当時の様子が、『大甲藪及同製作品調査書』に描写されている。

「…今や (1908/明治 41 年) 年々七十万個内外を産し大甲藪製品の名は帽子に依を之を標倣するに至れり之か顧客は全く内地人のみにして販路は広く東京、大阪、京都、中国、四国、九州の各地に洩り何れも夏に於て用ひらる…。」[注 66]

しかし、その一方で、新たな問題が生じたことが、同書に記されている。

(…而して四五年前までは各階級の人を通して広く需要されしか漸次降り今や殆んど下流社会殊に多く労働者間に需要せらる。…其産額の増加に伴ひ粗製濫造の弊を生し…。) [注 67]

それは、生産販売量の増加に伴い、次第に「粗製濫造」されるようになり、品質にはばらつきが出るようになったことである。その結果、価格は、1902年には平均単価が0.6円であったものが、1907年には0.33~0.36円へと暴落した。[注 68]



図 20 大甲帽藪の検査[注 69]

このような状況にいち早く気が付いた「大甲帽藪会社」は、「大甲帽子」の品質面で

も安定と向上に大いに努力した（図 20）。それが 1907（明治 40）年の地域の「同業組合」設立であった。そこで帽子の検査を実施して品質の安定化を図り、生産した大甲帽子は東京、京都、大阪、広島、岡山、高知、博多、小倉などへ向けて輸出されるようになっていったのである [注 70]。

5.5. 「販仔」の登場

ところで、当該地域には、上述したように、工場で大甲藪工芸を生産するばかりでなく、各家庭で生産活動を行う女性が数多く存在した（図 21）。そのような婦人達から大甲帽子と大甲蓆を直接入手する専門職が生み出された。すなわち、当該地域の言葉で「販仔」、日本語で「集帽人」と称された職業が生み出されたのである。「販仔」の仕事は、まさに、職工と移出業者との間をつなぐことであった。「この販仔には2種類あり、それらは、店に雇用される者と店との雇用関係が無い者であった。」前者は、大甲藪工芸を扱う会社に勤めてから弟子になった[注 71]。



図 21 大甲帽を編む婦人[注 73]

その場合、販仔は、会社での修業を経て「つくり手」と接するようになったため、しばしば、販仔は、「つくり手」に帽子の新しいデザインの見本を伝えるなどの役割を担った。また、大甲蓆の制作は手間がかかり、たいていが数人の女性の共同作業で行われたが、一枚を完成する度に販仔が「つくり手」を映画に連れて行くなど、やり甲斐を与えるような活動を行ったという[注72]。「つくり手」の婦人達にとって、販仔は、上司や仲間のような存在であり、つくり手と深い絆で結ばれていたことがわかる。

一方、店との雇用関係がない者もあり、多数の店の間に入って取引を行った。彼らの収益は、移出業者より受け取る販売代金と職工に支払う工賃との差額であった[注74]。

いずれにしても、交通や情報網が発達していなかった当時であって、各地への往来が頻繁な販仔には、製品の仕入以外にも、外来の情報を伝達するという重要な役割があった。販仔が伝えた情報には、隣村での結婚の話や民間療法の薬の情報のような生活に即したものから、会社の経営状況や大甲街での最新のニュース等に至るまで実にさまざまであったが、時には、製品レベルを評価したり、材料を確保したり、製作者達を励ましたり、また、大甲藪製品の販売状況や制作技術を伝達することもあった。このように、販仔は、単に製品を輸出するのみならず、帽子産業にたずさわるさまざまな人と人とを結び付ける重要な役割を担い、大甲藪工芸の発展を影で支えたのである。

6. 「最盛期(1903～1942年)」における大甲藪工芸

6.1. 内国勸業博覧会への出品

日本国内で毎年開催されていた「内国勸業博覧会」への出品は、大甲藪工芸の重要な転機となった。19世紀末期から20世紀初期にかけては、博覧会が世界各地で盛んに開催された時代であり、欧米の国々のみならず、明治維新で西洋化した日本本国でも、物産会や博覧会が開催されるようになっていた。それが契機となって、日本の植民地になった台湾の特産工芸品である「大甲帽子」と「大甲蓆」が、1903（明治36）年から正式に国際舞台に進出して行った。そこに、大甲藪工芸が出品されるようになっていったのである。

その主な目的は、1895(明治 28)年に台湾の統治権を得た日本の主権を世界に向けて喧伝することであったが、19 世紀末～20 世紀初に、ヨーロッパと日本で盛んに行われた展示会・博覧会はその絶好の舞台だった。日本にとっては新しい国土である台湾の特産物である「大甲藪」製の帽子と蓆を、その流れに乗って、国際的な舞台へと登場させていったともいえる。当該地域の人々は、大甲藪工芸の優れた特質を世に知らしめ、販路を拡大する絶好の機会と捉えた。

例えば、大甲藪製品が、博覧会や共進会に出展された記録には、以下のようなものが挙げられる。

「…1897 年長崎舉辦之第九回九州沖繩八縣聯合米外十八品共進會、藪草即已開始被送至會場展示。」[注 75]

(…1897 年、長崎で開催された「第九回九州沖繩 8 県連合米外十八品共進会」には、藪草が会場へ送られ開始、展示品の一つとなった。)

同じ 1897 年、

「京都で行った「創立二十五週紀念博覧會」には、大甲藪と大甲蓆が会場へ送られ開始、展示品の一つとなった。」[注 76]

また、翌 1898 年には、韓国駐在領事の要求に応じて、台湾総督府は台中県地方の藪草繊維品を始めとする数種類の産物を集めて、韓国駐在領事館に送り、それらが館内に展示された[注 77]。

また、日本国内で毎年開催されていた内国勸業博覧会への参加が「大甲藪製品」の転機となった。特に、1903(明治 36)年に大阪天王寺で開かれた「第 5 回内国勸業博覧会」(図 22)は、大きな転機のひとつとなった。同博覧会は、海外からの出品が初めて許可された博覧会であり、その博覧会で、大阪の商人達は、大甲帽子や大甲蓆等の製品を外国商館に推薦したのであった。そこで大甲帽子が好評を博したことで、それまで以上に多くの国々に販売する機会を得たのである。なお、同博覧会において、「大甲藪、大甲帽子、大甲蓆、紙入、座布団」などの大甲藪製品は三等賞を獲得している[注 78]。



図 22 第五回内国勸業博覧会の台湾館 [注 79]

さらに、1904(明治 37)年には、米国で行なわれたセントルイス万国博覧会において、台北の「藺草製品」と大甲帽蓆会社の「藺草皿敷」が、それぞれ、金賞、銀賞を獲得した[注 80]。

また、翌 1905(明治 38 年) 9 月には、日露戦争の勝利を祝うために「凱旋記念五二共進会」が東京で開催された。同会における台湾からの出品リストが『五二共進会之出品』であり、ここには大甲地域の業者名が掲載されており、当該地域の人々が、積極的にこういった展示会に参加しようとしていたことがうかがえる[注 81]。

そのことが、「台湾日日新報」漢文版で報道されたが、その内容は以下の通りである。

五二共進會の出品 9月に東京凱旋記念五二共進会が開催するため、

大甲帽子	半打 (6 個)	大甲帽蓆會社
紙入	半打 (6 個)	大甲帽蓆會社
卷煙草入れ	半打 (6 個)	大甲帽蓆會社
蓆	半打 (6 個)	大甲帽蓆會社

また、1907年には、「大甲帽蓆会社」が出品した「林投帽子、大甲帽子、敷布各種」が、「東京勸業博覧会」で記念二等賞を獲得した [注 82]。

もちろん、総督政府からの奨励もあったが、大甲と苑裡地域の郷紳を始め、大甲藺工芸の各業者が、主体的にこうした博覧会に参加することによって、数回に渡って行なわれた博覧会における展示製品をみると、その頃は、優れた製作技術が維持されていたことがうかがえる。このように、日本統治時代の初期には、大甲帽子と大甲蓆の名声が欧米にまで及ぶようになったのであった。

6.2. 粗製濫造の発生と検査制度の制定

大甲藺工芸の中でも最も重要な製品は大甲帽子であった。図 23 に示したように、この時期の大甲藺工芸の生産高を、『台湾貿易四十年表』の統計に基づいて、著者らが作成したグラフである。1902～1912年の推移をみると、1906年からの3年間は大甲帽子の生産量が急増しており、特にこの時期に大いに流行したことがうかがえる。

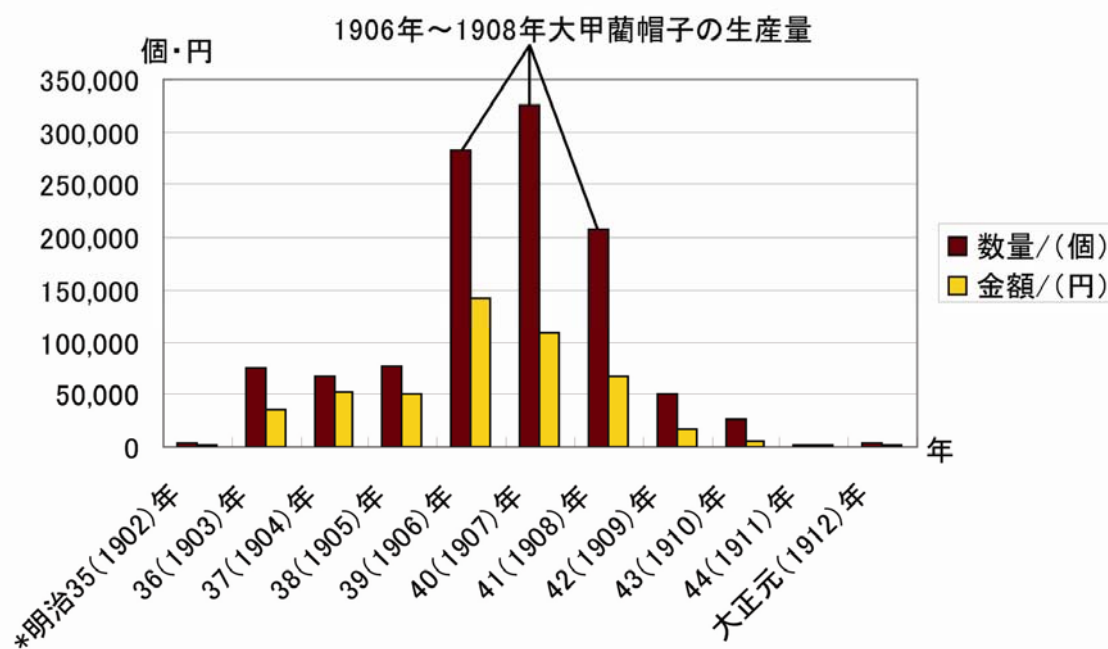


図 23 1902～1912年大甲帽子輸出数量の推移 [注 83]

1903(明治36)年と1905(明治38)年には、大甲帽子の生産量は7万点を超えるようになった。また、1906(明治39)年には飛躍的に増加して28万個、翌1907(明治40)年には32.5万個とピークを迎えた。

それと共に、1902(明治35)年には平均単価が0.6円であったものが、1907(明治40)年には0.33~0.36円へと暴落することとなった[注84]。しかし、この価格は、戦争の影響で経済が低迷したにもかかわらず、大甲帽子が日本で大いに流行した一つの要因ともなった。当時の様子が、『大甲藪及同製作品調査書』に描写されている。

「…大甲藪製品の名は帽子に依を之を標倣するに至れり之か顧客は全く内地人のみにして販路は広く東京、大阪、京都、中国、四国、九州の各地に涉り何れも夏に於て用ひらる。」[注85]

しかし、その一方で、新たな問題が生起した。粗製乱造である。このことが、同書にも記されている。

「…而して四五年前までは各階級の人を通して広く需要されしか漸次降り今や殆んど下流社会殊に多く労働者間に需要せらる。…其産額の増加に伴ひ粗製濫造の弊を生し…」[注86]

このように、販売価格の下落と生産量の増加に伴い、質の低下が免れなかったことがわかる。

6.2.1. 民間の検査制度の制定

ところで、こうした状況にいち早く気が付き対応策を講じたのが、前述の「大甲帽蓆会社」であった。同社は、大甲帽子の品質向上に努力するべく、1907(明治40)年には、帽子の生産検査を実施するようになった。こうして、安定した品質の大甲帽子が、東京、京都、大阪、広島、岡山、高知、博多、小倉などへ向けて輸出されるようになっていったのである[注87]。

つまり、「大甲帽蓆会社」では、総督府が「検査所」を設置する以前から大甲帽子の品質

の維持・向上を目指して、各会社、商店の組合組織による帽子の検査を開始したのであった。もちろん、行政組織である苗栗庁の命に促された経緯はあるが、やはり郷紳達にそうした意識が無ければ、上述のような有効な対策は講じることができなかつたと思われる。このように、大甲帽子と大甲蓆を産業化し大量に販売するという事に止まらず、郷紳らが、当該地域の将来の展望を主体的に描き出し導いたことが、当該地域の総合的な発展をもたらしたと言えよう。

6.2.2. 台湾総督府の検査制度の制定

大甲藪工芸に生じた粗製濫造の問題については、台湾総督府もやがて策を講じることとなる。それは、1911(明治44)年5月25日のことであつた。「台湾帽子検査規則」が制定されたのである。この規則では、検査所に、「配見/拝見」と呼ばれる検査員若干名と書記1名を置き、台湾帽子[注 88]の品質を厳しく検査することが定められた。合格証と不合格証(図24、図25)を発行し、手数料は帽子1枚につき1銭であつた。また、合格品は、一等(黄)、二等(青)、三等(赤)に分けられた(図26)。



図24 大甲帽蓆の検査の合格証・不合格証の雛形(1)



図 25 大甲帽蓆の検査の合格証・不合格証の雛形（2）[注 89]



図 26 帽子の検査等級の印章[注 90]

もちろん、すでに主要な生産地となっていた大甲地域にも、「台中州大甲帽蓆検査所」が設立された(図 27)。その目的は「帽子の品質向上に対する声価の失墜を防止して、地方産業の発達に資す。」[注 91]というものであった。検査は、(1)原料、(2)色合い、(3)形状、(4)寸法及重量、(5)編方、(6)耳組(縁取り)の順で行い、検査結果を総合して1から3等に判別された[注 92]。

この制度は、その後、1911(明治 44)年から 1945(昭和 20)年まで 35 年間続くこととなった。しかし、第二次世界大戦末期の 1941(昭和 16)年頃には、民間の「帽子同業組合連合会」が代行するようになり、さらに、戦後には、帽子の検査制度は全て廃止され、検査は商社が自己責任で行うようになった。

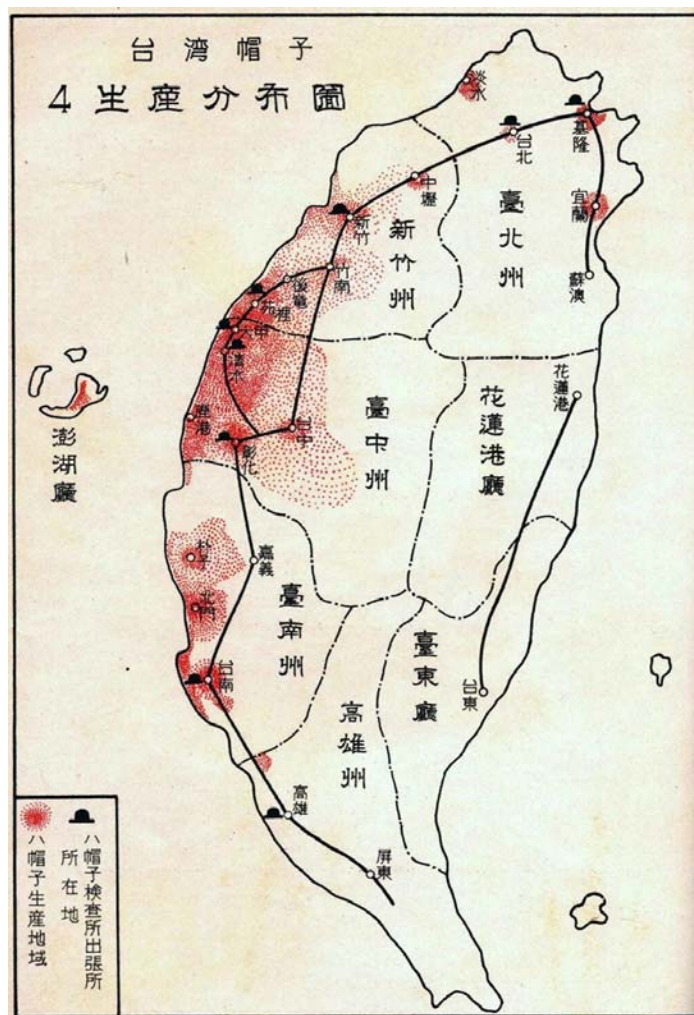


図 27 台湾帽子生産分布図[注 93]

6.3. 日本支店の開設

1912(大正元)年には、前述の「元泰商行」の葉園と呉海涼の2人が駐日代表となり、大甲帽の注文の確保と日本での販売を担当した。しかし、台湾と日本の間を頻繁に往復する時間を節約し、効率的に受注・販売を行うために、彼らは帽子を販売する店を購入したのであった。これが、神戸での支店設置の先駆けとなった[注 94]。

6.4. 帽蓆の初の同業組織「大甲帽蓆同業組合」の設立

台湾帽の流行に伴い、好みが多様化し、原材料もさまざまな素材が使用されるようになった。こうして、1901(明治 34)年頃には、台湾帽の素材(図 28)の主役は大甲藺

から阿檀[注 95]や紙[注 96]へと移り変わり、それぞれ「林投帽子」「紙帽子」と称されたそれらの生産量は、大甲藺帽を大きく凌駕していった(表 2)。

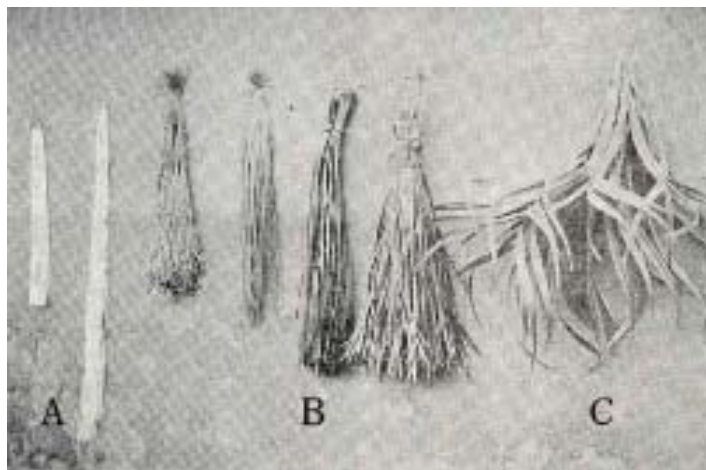


図 28 A:漂白後の林投(阿檀)の葉 B:大甲藺 C:阿檀 [注 97]

1916(大正 5)年頃には、以前から存在していた大甲帽子の粗製濫造の問題も相まって、その輸出量は急速に減少した。さらに、大甲地域の人々も、大甲帽子の編みの技術を応用して林投帽子や紙帽子を編むようになっていった。

一方、1914(大正 3)年に、「大甲帽蓆会社」は解散した、この様子が、『郷土の概観』に次のように記されている。

「…明治 36 年 3 月 1 日「大甲帽蓆合資會社」として創立し、大正 3 年 6 月 6 日都合に依り解散せり。これ即ち当組合の前身にして後……、大正 4 年 6 月 5 日其の認可を受けて成立す。」[注 98]

その基盤を引き継いで、1915 年 6 月 5 日に大甲町 232 号に創立されたのが「大甲帽蓆同業組合」である(図 29)。同組合は、台湾における最初の帽蓆の同業組織である。先述した杜清が組合委員長に就任し、大甲街、大安庄、外埔庄、内埔庄の 4 地域を管轄地域として、この組合組織は、帽子・蓆産業の発展を目指して、「営業上の弊害を矯正し、帽蓆の改良を計り、同業者間の義を守り、事業の発達を期す。」という目的が設定され

た。事業内容は、以下の3つの事業を行った[注99]。

- (1) 製品の改善及帽型の改良を計り、販路拡張に力む。
- (2) 優良職工の奨励に力む。
- (3) 帽子輸移出の奨励、意匠、新案特許、発明の奨励に力む。

表2 1910年～1941年帽子の生産量の推移 [注100]

年	大甲帽子	林投帽子	紙帽子
明治43(1910)年	169	535	—
44(1911)年	81	865	—
大正元(1912)年	27	1,210	—
2(1913)年	19	1,490	3
3(1914)年	39	2,159	—
4(1915)年	29	2,489	3
5(1916)年	3	2,026	1,854
6(1917)年	22	581	3,260
7(1918)年	73	15	3,445
8(1919)年	71	2	3,488
9(1920)年	44	18	1,996
10(1921)年	78	7	1,318
11(1922)年	179	28	2,321
12(1923)年	258	24	1,507
13(1924)年	508	67	2,065
14(1925)年	514	36	4,405
昭和元(1926)年	493	10	4,518
2(1927)年	309	5	2,407
3(1928)年	234	28	2,654
4(1929)年	242	57	5,196
5(1930)年	133	29	4,699
6(1931)年	98	3	13,644
7(1932)年	105	1	9,797
8(1933)年	128	26	12,138
9(1934)年	171	12	13,608
10(1935)年	108	39	7,046
11(1936)年	102	7	6,420
12(1937)年	85	1	5,525
13(1938)年	161	101	4,143
14(1939)年	242	34	4,814
15(1940)年	314	233	3,745
16(1941)年	662	225	2,331

1915(大正4)年～1932(昭和7)年の「大甲帽蓆同業組合」の会員は131名であり、まさ

に地域を挙げて大甲藺工芸産業の拡大に取り組んだことがうかがえる。事実、『郷土の概観』に事業の状況が以下の記載されている。

「数年来の帽子界は以前に比し幾分好況にして、昨年迄の状態に於いては月十二
三万箇以上の受検数を計上してゐる…。」[注 101]

同組合の設立以降、数十年間は、大甲帽子大甲蓆ともにその生産量は大きく増加したことがわかる。拡大した市場に対応しつつ品質管理を行うにあたり、組合の果たした役割は、きわめて大きなものがあったと言えよう。なお、同組合は、1940(昭和 15)年に、全島を管轄範囲とする「台湾帽子同業組合連合会」に吸収合併された。



図 29 大甲帽蓆同業組合 [注 102]

6.5. 台湾特産品としての認定

大甲帽子が輸出されるようになった当初は、その輸送手段は、小包郵便物と汽船であった。すなわち、帽子会社は鉄道による出荷を行っていなかったのである(図 30)。その状況は、1917(大正 6)年に、次のように変化した。

「1917 年臺灣總督府順應帽界需求、同意大甲帽和林投帽為臺灣重要特産、自

1917年(大正6年)12月起、鐵路運費有五折優獲。從此帽商紛紛捨棄以郵局小包寄貨、改採鐵路方式寄送。』[注103]

(1917(大正6)年12月、台湾総督府は、帽子業界の要請に応え、大甲帽子と林投帽子を台湾の重要な特産に認定した。この認定によって、それ以降に出荷される製品については、鉄道運賃が50%割り引かれることになった。そのため、帽子販売会社の多くが鉄道輸送へと切り替えていった。)

これは、日本本土をはじめ、中国、朝鮮、欧米各国へ輸出し易くするための帽子業界の積極的な働きかけによるものであった。大甲帽子を含む台湾帽子は、港まで鉄道で運ばれるようになり、そこで船積みして輸出されるようになった。これによって、製品の売り込みと利益が格段に向上し、1934(昭和9)年には、台湾帽子の生産量合計は1,532万個に達した。依然として、日本が最大の輸出先であり、かつ、最大の消費地であった。



図30 大甲駅の記念スタンプ「帽子編み娘」[注104]

7. 「衰退期(1943～1970年)」における大甲藺工芸

7.1. 戦争の影響による生産量の減少

1937(昭和12)年に日中戦争が起こり、帽子や蓆を中国大陸へ販売することが不可能となった。その2年後の1939(昭和14)年には第二次世界大戦が勃発し、国際情勢がますます悪化した。1941(昭和16)年7月に、イギリス、アメリカ2ヶ国が日本に対して

資産の凍結を実施し、同年 12 月上旬に太平洋戦争に突入すると、台湾海峡を渡る無数の輸送船が爆撃されて沈没した。台湾帽子の輸送手段は失われ、欧米諸国からの注文に応じることができなくなった。さらに、運送保険をかけていなかった貿易商は大きな損失を受け、多くが破産してしまった。

『台湾帽子の話』の統計によると、台湾帽子の生産量は 1934(昭和 9)年に最大を記録したが、それ以後は減少に転じ、1938(昭和 13)年には 458 万個、1941(昭和 16)年には 371 万個にまで低下した。大甲帽子については、1941 年～1942 年は太平洋戦争に突入した影響で、日本軍に台湾産の植物ならびにそれを材料とした製品が大量に採用されるようになったことを背景として(図 31)、生産量は過去最大の 118 万個に上った[注 105]。しかし、それも長くは続かず、それを境に、「大甲藺産業」も衰退を余儀なくされていった。



図 31 台中州大甲街林投製軍用防暑帽編製講習會 1942 年 [注 106]

7.2. 販仔の質の変容

この時期になると、販仔の性質にも変化がみられるようになっていった。

1943(昭和 18)年に小池金之助が書いた『台湾帽子の話』によると、販仔は、移出業

者から原材料を引き取って、それを職工に渡して帽子を編製させた。彼らは、職工達が編製した帽子のできばえに応じてランク付けをして給料を支払い、集めた帽子は1個あるいは1ダース単位で移出業者に転売した。当時は、販仔と移出業者との間には雇用関係はなく、その他の作業上のパートナーも不要であり、販仔は完全に独立した存在であった。

また、同書においては、この販仔について、次のように指摘されている。

「集帽人は女性労働者の無知を利用し、下記の4種類の悪行をしている。(1)帽子の買収値段を抑える。(2)帽子は独善的に1等品を2等品や或は他のランクのレベルに偽って認定している。(3)帽子48個分の原料一貫(3.75キロ)を職工に交付しながら、彼女達に51個~52個の帽子を要求している。(4)納品の最盛期には、他の集帽人が注文して作らせた帽子を職工の方に値段を引き上げたりして、奪い取るように買い取ることである。さらには、極めて悪質な集帽人は職工に5銭或は10銭を余計に出して、他者の比較的に優良な原料の製品を自分の粗雑な材質で製作した帽子を交換させることすらあった。」[注107]

著者らの聞き取り調査によると、上述したような「販仔」が必ずしも全てであったわけではないが、こうした状況が生み出される社会的状況になっていたことも事実のようである。

7.3. 市場の変化

1945(昭和20)年に第二次世界大戦が終了すると、台湾帽子の生産は再度ピークを迎えた。なぜなら、日本に代わり、中国が帽子と蓆の最大の消費市場となったためである。中国における「大甲藪製品」に対する市場の反応はかなり良好で、帽蓆業者は大きく復興することとなった。再び最盛期を迎え、帽蓆の専門店は最も多い時で50軒以上にもなった[注108]。

戦後、台湾経済は不景気の時代を迎え、多くの産業が低迷したが、こうした状況下で

繁栄を維持した数少ない例外に藺草産業が含まれていた。

しかし、その後、中国において、国民党と共産党の内戦が緊迫するに伴い、中国への輸出も危うくなっていった。そして、中国共産党が大陸を支配するようになった1949(民国38)年には、輸出は全て途絶えてしまった。

一方、帽蓆業者は、帽子や蓆を郵便で日本へ送っていたが、その数は、毎年、数万でしかなかった。さらに、1950(民国39)年に、台湾政府が対外貿易の制度を変更し輸出代金为先取りと定められると、それに従えない場合は日本への輸出は不可能となった。こうして、1955(民国44)年以降、帽蓆業は再び衰退して行った[注109]。

このような状況下にあっても、苗栗県の婦人連合会の理事・鄒靖氏が、台湾の各中学・高校のボーイスカウトに向けに大甲帽子の採用を促し、大甲藺による帽子と蓆の国内での需要は再び広がりを見せた[注110]。その結果、1956(民国45)年から1957(民国46)年まで、大甲地域の帽蓆業は、政府による普及政策の下で、年平均50万点が輸出されるようになり、その額は800万元にも達した。大甲藺工芸に携わる職人の所得は、公務員あるいは農民の収入よりかなり高額となった。

7.4. 産業構造の変容

1970年頃になると、台湾の社会構造の急激な変化で、帽蓆業者の中には、藺草に代わってプラスチックを材料に用いる者が現れるようになった。その状況は、台中縣87年度「初級藺草工藝實驗教材」に、下記の記載があるように、

「…1970年代開始、由於社會型態急遽變遷、工商業發展快速、經營帽蓆業的大甲三和公司轉為用塑膠原料製造。」[注111]

(…1970年代に入り、台湾の社会構造は急激に変容した。商工業が急速に発展し、帽蓆業を經營する大甲の三和会社は、藺草に代わってプラスチック原料を用いて製作を行うようになった。)

こうした変化は、伝統的帽蓆業界に大きな衝撃を与えた。その後、世界の經濟情勢が

低迷し、輸出市場は日々狭まり、国外販売が少なくなると、帽蓆業は急激に衰退した。数年後、台湾政府は、地場産業の振興に向けて一連の施策を実施し、特に、1975(民国64)年には、大甲、苑裡地域の間に、「幼獅工業區」と称される現代工業地区を設置した。しかしながら、結果的には、工場における労働賃金が大甲藺工芸の生産のそれよりも高額であったため、両地域の婦人達は工業における労働を志向した。さらに、東南アジアや韓国などのより安い人件費との競争に敗れ、大甲帽子と大甲蓆の生産業は衰退の一途を辿ることとなった[注112]。

8. 「復興期(1996年～現在)」における大甲藺工芸

台湾政府は、1994(民国83)年以降、各地域の資源、つまり、「人」「こと」「もの」「歴史」「伝統技術」など掘り起こす運動を展開してきた。この政策は、「社区総体营造」と称され、その流れは、次第に国民全体の共催運動へと広がった。

この施策によって、伝統工芸は、台湾全土に渡って復興に取り組みられるようになった。この運動の中心になったのは、台湾の中央政府直属の政府機関である「文化建設委員会」(略称「文建会」、現在の「文化省」)で、伝統工芸復活に関するさまざまな施策を継続的に実施した。さらに、「手工業研究所」(後の「国立台湾工芸研究所」、現在の「台湾工芸研究センター」)は、各地域にある工芸産業の発展に尽力した。

同年に、「文化建設委員会」からの資金割り当てを得ることになった大甲鎮役所は、1999(民国88)年に、「大甲帽蓆工芸産業文化活動」を立ち上げた。当該地域においては、「藺眼相看」という工房が設立され、さらに、2008(民国97)年に台湾の「手工芸研究所」が施策した「2008 地方特色工藝輔導 一多角化社區工藝扶植計畫育成計畫」(図32、33)による支援を受け、大甲藺編み細工を行う職人達が朝陽科技大学と協働し、新しい大甲藺工芸に関する研究と普及活動を行っている(図34、35)。



図32 「2008 地方特色工藝輔導 —多角化社區工藝扶植計畫育成計畫」のイベント様子（1）



図33 「2008地方特色工藝輔導 —多角化社區工藝扶植計畫育成計畫」のイベント様子（2）



図34 大甲藺製品（1）（著者撮影）



図35 大甲藺製品（2）（著者撮影）

9. おわりに

各時代の大甲藺工芸産業の変遷、ならびに、それに関与した人々の活動をまとめると、およそ以下の通りとなった。

(1)黎明期 清時代の1729～1895年頃に相当し、大甲藺の編み技術が発展した時期である。大甲藺工芸は、初期の大甲地域において、人々が自給自足を基盤とする生活を繰り広げるための「生活用具」として創出され使用されたものであった。そうした大甲蓆が物々交換によって取引され島内外に転売されるようになり、その後に産業化していくための礎が築かれた。

(2)発展期 日本統治時代前期の1895～1903年頃に相当し、台湾総督府の家内工業の推進を受け、大甲蓆や大甲帽子の生産が産業化した時期である。中でも重要なのが、郷紳と称される当該地域のリーダー達の活動であった。彼らは、大甲藺工芸の生産の場においては、技術開発と産品開発を始め、職人の技術指導体制を整え、その後の品質の安定化に大きく寄与した。また、衛生面の向上、福祉の確立、学校の設定など、当該地域全体の発展を大きく支えたのも彼らであり、大甲藺工芸産業の発展のみならず、当該地域の発展に果たした貢献はきわめて多大なものがあつた。

(3)最盛期 1903～1942年頃に相当する。「内国勸業博覧会」を介して、「大甲藺製品」の優れた品質が、広く海外から認められたことを契機として、特に大甲帽子の輸出が伸び、生産がピークを迎えた時期である。1937(昭和12)年には、台湾総督府に特産として認定された。製品の品質維持に向け、政府に先駆けて、各会社や商店が組合的に検査を開始するなど、最盛期で果たした民間の輸出への努力は大きい。いわば、大甲地域の郷紳らが、大甲帽子と大甲蓆の産業化のみならず、当該地域の未来の展望を主体的に描き出し、その方向へと地域を導いたことが、当該地域の総体的な発展に寄与したものと考えられる。

(4)衰退期 1943年より始まった第二次世界大戦を経て、内戦や国内の社会・経済体制の変容を諸因とし、産業としての大甲藺工芸が市場を失い衰退した時期である。輸出

産業として経済的成功を収めるなかで、知らず知らずの内に生じた地域内のほころびの修復が疎かになっており、そのことが社会体制の大きな変化の中で柔軟な対応を阻害したと言っても過言ではない。こうした中、大甲藺工芸の需要は減少したが、苗栗県の「婦人連合会」が、地産地消を促すなどして一時内需の回復が見られた時期は、内発的発展の観点からしてみると、重要な取り組みの実践として注目すべき点であろう。

(5)復興期 1994(民国 83)年の「社区総体营造」施策開始から現代までの時期に相当する。1990年代以降の大甲藺工芸の復興には、大学と工房とが共同にデザイン開発を行うなどの積極的な取り組みがみられる。台湾が国を挙げて推進している内発的地域振興政策ともいえる「社区総体营造」が、さまざまな意味で大きな支えとなったことは言うまでもない。大甲藺産業が大きく変貌した現代において、新しい発想の製品づくりも欠くことのできない要素である。この点については、台湾工芸研究センターや著者が関係している大学等の教育・研究機関の継続的な支援も必要であろう。

「内発的発展論」の視点からみると、伝統工芸産業の振興には、技術の伝承のみならず、地域の人々による、地域が有するさまざまな資源の積極的な利活用こそが重要である。その意味においては、本稿で取り上げた大甲藺工芸の「黎明期」「発展期」「最盛期」に至る発展の歴史は、まさしく「内発的発展」の実践であったと言ってよい。今後にあつて、大甲藺工芸の振興を図る際には、上述した事実を踏まえ、ますます、現代における「もうひとつの発展」としての「内発的発展」を志向すべきであろう。

注

- 1) 台湾の「社区総体营造」とは、1994(民国 83)年に生みだされた「地域づくり」を意味する概念である。
- 2) 本章において「内発的発展」とは、およそ、以下のような意味に用いた。
「目標において人類共通であり、目標達成への経路と、その目標を実現するであろう社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。」
鶴見和子他編：内発的発展論、東京大学出版会、49、1989
- 3) 大甲区公所の資料を収集（日付：2013、3）。
- 4) 大甲街：現在の台中市の大甲区の中心部に相当する。
- 5) 苑里街：現在苑裡鎮の町の中心部に相当する。
- 6) 島田弥市、倉田藤一：大甲藺及同製作品調査書、台湾総督府殖産局、6-7、1908
- 7) 鄭成功(1624-1662年)は、中国明代の軍人・政治家であり、清に滅ぼされる明を擁護し抵抗運動を続けた人物である。台湾にわたり、その礎を形成した。
- 8) 鉄砧山は、台中市大甲区から外埔区一帯に位置し、北に大安溪を臨む標高 236mの山である。山頂の地形は平坦で、外見が鉄床に似ていることからその名前が付された。
- 9) 伊能嘉矩：台湾志 2、平埔族分布地圖、文学社、233、1902
- 10) 鹿港は台湾西岸の中間に位置し、清の統治時代には天然の良港として商業の中心地として発展した。
- 11) 大安港：大安港の位置は今の台中市の大安区で、清時代に中部重要な輸出港湾である。日本統治時代の初期には地形のため、だんだん落ちぶれた。
- 12) 廖瑞銘：大甲鎮志、第 3 篇、開墾篇、第 3 章漢人的遷移與入懇、大甲鎮公所、324、2007
- 13) 前掲書 12)、第 11 篇、人物篇、第 1 章人物伝、1519
林成祖、本名は秀俊、福建漳州人、1699 年（康熙 38）生、1771（乾隆 36）年卒、

大甲の用水路を切り開いて水を引いて耕地を灌漑した。

- 14) 國姓廟は鄭成功に祭祀の廟、位置が大甲の鐵砧山です。
- 15) 鎮瀾宮は媽祖に祭祀の廟、大甲鎮瀾宮が台湾に大人気のお寺。
- 16) 陳培桂：淡水廳志、卷 1、沿海礁砂形勢圖 1、大通書店、14-15、1871
- 17) 認識大甲、日治前大甲市街之形成、大甲区公所の資料を収集（日付：2012、9）。
- 18) 前掲書 6)、28
- 19) 神原周平：日本貿易精覽、東洋經濟新報社、499、1935。
台湾総督府財務局稅務課：台湾貿易四十年表、台湾総督府財務局稅務課、541-542、1936。
台湾総督府殖産局商工課：台湾帽子要覽 第 7、1、1941。
大甲鎮志：第 5 篇、經濟篇、第 7 章帽蓆産業、大甲鎮公所、699、2009。
- 20) 沈茂蔭は、清時代の 1892(光緒 18)年に、苗栗県の知事に就いた人物で、『苗栗県誌』の編纂者の 1 人である。
- 21) 沈茂蔭他編：苗栗縣志、卷 7、風俗考、大通書店、114、1894
- 22) 「後壟」とは、台湾苗栗県の「後龍鎮」を指す。
- 23) 前掲書 17)、卷 12、考 2 物産考、右幣屬、337
「番仔蓆」とは、大甲地域の先住民の婦人達が編んだ蓆である。
- 24) 前掲書 6)、46
- 25) 張仲堅：臺灣帽蓆、臺中縣手工藝品商業同業公會、南天書局、4、2002
- 26) 蔡振豐：苑裡志 下卷、風俗考、大通書店、113、1897
- 27) 台湾日日新報：新聞記事文庫工業(03-024)、本島の工業(一～六)、台湾日日新報 1916. 5-1916. 6. 16
- 28) 大喜多筆一：帝国之殖民(下)、東亜評論社、114、1919
- 29) 前掲書 6)、80
- 30) 神原周平：日本貿易精覽、東洋經濟新報社、499、1935 (*1902 年の統計)

台湾総督府財務局税務課：台湾貿易四十年表、台湾総督府財務局税務課、541-542、
1936（1903-1912年の統計）

- 31) 前掲書 27)、(五)製蓆及製簾業
- 32) 連雅堂序：人文薈萃、236、1921
- 33) 前掲書 32)
- 34) この時点では、浄水場の建設経費 3 万 5 千円の予算確保ができず、企画段階で中止となった。それが竣工したのは、1912(明治 45)年のことである。
- 35) 1901 年に大甲帽子を販売するため創立された会社である。
- 36) 「礫社」とは、当時の台湾中部で有名だった詞社である。
- 37) 1 甲=9、699 m²=2、934 坪。
- 38) 前掲書 32)、232
- 39) 王正雄：往日情懷・大甲老照片展專輯、臺中縣立文化中心、18、1994
- 40) 台湾總督府報：台湾紳章条規、台湾總督府報 NO. 24、府令 NO. 50、1896
「台湾紳章」については、「台湾總督府」府令の「台湾紳章条規」にその内容が明示されており、以下の通りである。「一台湾住民にして学識資望を有す者には本条規に依り紳章を付与。」
- 41) 台湾新民報：台湾人士鑑、410、1937
- 42) 前掲書 40)、台湾紳章が円形径 1 寸 5 分地質厚赤羅紗両側に銀線菊模様を置き中央に金線紳章の 2 字を織出す。
- 43) 前掲書 12)、第 8 篇、文化篇、第 6 章傳統工藝與現代藝術、1261
- 44) 前掲 6)、46。『大甲鎮志』『苑里志』には、最初に大甲帽子をつくった人物は、全て「洪駕」と記録されている。台湾の学者の間では、「洪央」の「央」は「鶯」の誤記の可能性が高いとされており、これは「鶯」と「駕」は非常に似てゐるため、誤って書いた可能性がある。
- 45) 前掲書 43)

- 46) 前掲書 12)、第 5 篇、經濟篇、707
- 47) 前掲書 46)、671。陳阿市、吳幼、黃廉、吳玉、陳富の 5 人は大甲地域の婦人、蓆を編み技術が上手。
- 48) 前掲書 47)
- 49) 前掲書 46)、690
- 50) 前掲書 39)、84
- 51) 前掲書 47)
- 52) 郭金潤：大甲帽蓆專輯、臺中縣立文化中心、9、1985
- 53) 台湾日日新報：大甲帽蓆の内地輸出、台湾日日新報、第 1189 號、1902. 4. 22
- 54) 台湾總督府：府報、3241、台湾總督府、62、1911
- 55) 植物であるアダン(阿檀：Pandanus odoratissimus L. f.)の葉でつくられる帽子、鞆などの製品。
- 56) 前掲書 6)、91
- 57) 台湾總督府總督官房文書課：台湾写真帖、台湾總督府、39、1908
- 58) 台灣日日新報、第 2270 號、1905. 11. 25
- 59) 台湾日日新報：大甲帽蓆会社の設立、台湾日日新報、NO. 1454、1903
- 60) 前掲書 47)
- 61) 張慶宗・張仲堅：發現道卡斯・大甲村庄史一、大甲鎮公所、171、2004
- 62) 前掲書 39)、15
- 63) 雷養德：發現道卡斯・大甲老照片專輯二、臺中縣大甲鎮公所、216、2004
- 64) 前掲書 19)
- 65) 前掲書 25)、58
- 66) 前掲書 6)、52
- 67) 前掲書 66)
- 68) 前掲書 6)、52-53

-
- 69) 台湾日日新報：大甲帽蓆の検査、台湾日日新報、NO. 2884、1907. 12. 12
 - 70) 前掲書 6)、76、
 - 71) 張強：藺草帽蓆的世界、苗栗文獻第八期、156、1993
 - 72) 大甲地域に居住する莊昭月氏(69 歳、女性)からの聞き取り調査による(日付:2013、3)。
 - 73) 朝日新聞社:南方の拠点・台湾・写真報道、93、1944
 - 74) 小池金之助：台湾帽子の話、台湾帽子同業組合聯合会、21、1943
 - 75) 台湾總督府：民政提要 2、台湾總督府、85、1896
 - 76) 京都博覧協会：京都博覧会沿革誌、京都博覧協会、375-376、1903
 - 77) 台湾總督府：民政提要 4、台湾總督府、201、1898
 - 78) 前掲書 43)、1278
 - 79) 山本松谷：台湾館之図、『風俗画報』臨時増刊 269 号、東陽堂、1903
 - 80) 台湾日日新報：聖路易博覧会、漢文台湾日日新報、第 2278 號、1905. 12. 05
 - 81) 台湾日日新報：五二共進会の出品、漢文台湾日日新報、第 2278 號、1906. 8. 3
 - 82) 月出皓：東京勸業博覧会臺灣館、東山書店、付録 2、1907
 - 83) 前掲書 19)、*日本貿易精覽(1902 年の統計)。台湾貿易四十年表(1903-1912 年の統計)
 - 84) 前掲書 6)、52-53
 - 85) 前掲書 6)、52
 - 86) 前掲書 85)
 - 87) 前掲書 6)、76
 - 88) 台湾帽子は林投纖維、紙捻或は大甲藺、他種々の原料を用い作られた夏帽子である。
 - 89) 台湾總督府：府報、3241、台湾總督府、62、1911
 - 90) 前掲書 74)
 - 91) 富田豊：郷土の概観、大甲公學校、195、1933

- 92) 前掲書 79)、117-118
- 93) 台湾総督府殖産局商工課：台湾帽子要覧第 7 号（昭和 16 年）、台湾総督府殖産局、4、1942
- 94) 郭金潤：大甲帽蓆專輯、臺中縣立文化中心、8-9、1985
- 95) 前掲書 57)
- 96) 紙材料が紙捻にセルロイを引いたもの。
- 97) 前掲書 73)、93
- 98) 前掲書 91)、193
- 99) 前掲書 91)、193-194
- 100) 前掲書 74)、3-4
- 101) 前掲書 91)、194-195
- 102) 前掲書 46)、682
- 103) 前掲書 25)
- 104) 臺中州：臺中州概観、臺中州、128、1936
- 105) 前掲書 46)、699
- 106) 前掲書 63)、36
- 107) 前掲書 74)、21-22
- 108) 王振勳：苑裡鎮志、苑裡鎮公所、952、2003
- 109) 前掲書 108)
- 110) 前掲書 108)、953
- 111) 台中縣政府：台中縣 87 年度「初級藺草工藝實驗教材」・大甲藺編織藝術、台中縣政府、8、1998
- 113) 王振勳：有關大甲藺及其製品生產變動的歷史考察、朝陽人文社會學刊（1）2、21、2003

參考文獻

- 1) 描繪苑裡草編・一個傳統工藝產業生態與脈絡的研究、2001
- 2) 日治時期苑裡通霄地區藺草帽蓆產銷與當地社會變遷、2002
- 3) 有關大甲藺及其製品生產變動的歷史考察、2003
- 4) 富強與國際關係-清末貨幣制度之探討、2006
- 5) 臺灣米價變動與「臺運」變遷之關聯 (1783-1850)、2010
- 6) 日治時期苑裡通霄地區藺草帽蓆產銷與當地社會變遷、2002
- 7) 台湾鐵路管理局の資料を収集 (日付: 2013、6)。
- 8) 台灣地方志寶鑑、物產篇
- 9) 伊能嘉矩 (編): 台湾志 1、文学社、233、1902
- 10) 台中農田水利会: <http://www.tcia.gov.tw/>(日付: 2012、10)。
- 11) 番社采風圖考: 六十七、臺灣文獻叢刊第 90 種、臺灣銀行經濟研究室、1960[1747]
- 12) 台中市大甲区役所: 大甲往日情懷-大甲老照片徵展專輯 (電子書)
<http://163.29.86.75/book07/015.htm>、2012 年 10 月引用
- 13) 陳運棟 (編): 重修苗栗縣志、大事志卷一、第一冊、苗栗縣政府、274、2006
- 14) 本草圖譜、1917
- 15) 工藝作物各論、1919
- 16) 内発的発展論、1989
- 17) 臺中州概観、1936

第3章

大甲藺の生産ならびに製品制作に内包される

自然との共生の知恵

1. はじめに

人は、身近な材を用いて必要な用具をつくり出すことで、自らの生活を作り上げてきた。人が、「ホモ・ファール」といわれる所以である。それゆえ、人間社会が発展するきっかけは、「ものづくり」にあると言っても過言ではない。その素材は、植物、動物、鉱物等、地域特性に応じてさまざまであったが、いずれも、人々は、自然資源を徹底的に観察することによって生活用具・用品の素材として認識し、はじめて、それらを利用することができるようになったのである。また、人は、そうした生活用具・用品を、実に長い年月をかけて創意工夫を加え改善しながら、生活の質を向上してきたのである。その経験の蓄積こそが、地域の人々の歴史であり知恵であり、それらの総体的な累積が、それぞれの地域に特有の生活文化を形成したと考えられる。

本研究のテーマとして取り上げた大甲藺工芸の発端は、台湾中部の海岸地域の大甲、苑里地域において、そこに居住する人々が大甲藺を見出し、その素材の特質に気が付き、生活用具・用品の素材として有効に活用したことであった。さらには、大甲藺の質の向上を目指して人工栽培を始め、その品質向上を追求する栽培法の改善などのさまざまな創意工夫を加えてきたのである。また、同時に、生活用具・用品の制作方法の改善にも努力し、それらの使い良さ、品質向上にも知恵を絞ってきた。このような絶え間ない進化への努力の積み重ねが大甲藺文化を形成したとすることができる。

このように、今日、大甲・苑里地域の無形文化財と見なされている大甲藺工芸は、当該地域の先住民であるペイボ族とその後に移入してきた漢人が、共に努力を続けて来た結果なのである。本章では、大甲藺に関する栽培の肥料、刈り取り収穫、精選、編み技術、製品としての道具の文化を解析して、大甲藺工芸文化に含まれる先人の知恵の新しい展開を考察することを目的とする。

2. 大甲藺の栽培

これまでも記してきたように、大甲藺工芸の端緒は、ペイボ族の婦人達が野生の大

甲藺を見つけ出し、その特長に気が付き、生活用具を編み始めたことにある。その代表的なものが蓆であった。それゆえ、大甲藺工芸は、まず、蓆として知られるようになった。しかし、蓆が知られるような優れた工芸品として完成するまでの道のりのなかで、当該地域の人々は、優れた品質の蓆を編むために、大甲藺を素材として使用しながらも、さらにより質の高い大甲藺を得るために、自分達で大甲藺を栽培し始めた。そして、試行錯誤を繰り返しながら、さまざまな改良を加えて来たのである。こうした観点から大甲藺について調査した結果は、以下の通りである。

2.1. 栽培法

大甲藺は、元来、大甲地域に自生する野生の藺草の一種であった。それゆえに、「ものづくり」の素材としての品質は必ずしも安定したものではなかった。そのため、今からおよそ250年前の1765/乾隆30年頃に、大甲双寮社のペイポ族の婦人加流阿買（カルアマイ）が野生の大甲藺を採取して移植し人工栽培を始めたのである。その内容は『大甲藺及同製作品調査書』に、大甲藺が農作物になった過程として記されている[注1]。

しかし、大甲藺の種子は小さく、発芽が難しい。そこで、大甲藺の栽培は株分けによる栄養繁殖法を用いる栽培がなされるようになった。

『大甲藺及同製作品調査書』に次のように記載されている。

「大甲藺ノ蕃殖ハ種子ヲ以てセスシテ根分法ニ依リ、其法前年九月第二回収穫後灌排水に便ナル大甲藺田の一部ヲ残シ置キ……斯く残シ置キ苗床地よりは温暖ナル期間絶対ヘス新芽ヲ發生シ一月ノ頃ニハ七八寸ノ長サニ達スヘシ、ヲ再ヒ根元ヨリ刈除シ乃チ施肥ヲ行フ……[注2]。

苗取ヲ行フニハ先ス苗ノ根元五寸ヲ残シテ其上部ヲ切り捨テ、後鋤若クハ水稻苗取用ニ供スル秧鋤ト稱スル鋤形ノモノニテ床土凡ソ六七分ノ深サニ崛起スカ、若クハ削り起シテ成ルヘクノ損傷ナキ様土ヲ振ヒ落シ、五六本ヲ一株分トス、男一人一日ノ採苗株數ヲ一萬ト計セラル……[注3]。」

著者が大甲地域の建興社区で、栽培農家の李氏[注4]に聞き取り調査を実施したところ、以下のような内容が得られた。

「大甲藺の栽培方法は、株分け方法を行っている。大甲藺を刈り取った切り株の根部を株分けして、次の栽培の苗とするのである。」

この栽培法は、大甲藺以外の一般的な植物が種子を播種して栽培する方法とは異なるが、この聞き取り結果と『大甲藺及同製作品調査書』に記載された内容はほぼ一致していることから、当該地域における大甲藺の栽培は、古くから、この方法が行われていたことがうかがえる。



図1 刈り取り株の根部の様子[注5]



図2 大甲藺の生育状況（著者撮影）



図3 大甲藺の種子（李安妮提供）



図4 大甲藺の花の拡大写真[注6]

また、現地で大甲藺製品を専門に制作している「藺眼相看」工房の李安妮氏によると、

以下のような話も聞き取ることができた。

「大甲藷は、花が咲くから種子ができる。したがって、若い苗は、大甲藷の種子が落ちて発芽し成長した可能性もある。それを栽培に用いたことも考えられる。」

台湾においては、大甲藷を植物学の観点から研究した文献はほとんど存在しないため、この推論は実証することはできないが、栽培法の一つであったかもしれない。いずれにせよ、当該地域の人々が、当該地域特有の大甲藷の性質を見極め、かつ、多様な栽培法を試行しながら、収量や品質の改善を試みてきたことの証と言ってよい。

また、大甲藷の大きな特徴の一つに、当該地域以外では良質なものが得られないことが挙げられる。例えば、近年、ある台湾人が、中国の江南地域（浙江・寧波、長興）への移植を試みたが、結果的には、良質な材料が得られなかったという記録がある。屋内で乾燥した大甲藷からは、大甲藷の特徴である独特の芳香が消えてしまい、黴のような匂いになってしまったという[注7]。

このように、大甲藷は、長い時を経て、その品質が当該地域の人々自身の手によって改善されてきた当該地域ならではの産物であると言えよう。

2.2. 輪作栽培法

一定の土地に同じ作物を数年間続けて植えると、次第に土壌養分が収奪され、土壌が痩せ作物の発育が不良となることが少なくない。また、場合によっては、病虫害が多発するようになる。この現象は連作障害と呼ばれている。

大甲藷は、いずれの地域でも中等以上の肥沃な水田で栽培されている。もし、痩せた水田で栽培する場合は肥料を多く加えなければならない。しかし、肥料を多く加えた場合は、その跡作に水稻を栽培する際に雑草の生育が旺盛なるので、多くの農家は肥料を追加することを躊躇する傾向にある。そうすると、大甲藷の収穫と品質は悪化するため、その対応として、水稻と大甲藷を2～3年毎に栽培する輪作栽培方式が行われるように

なってきた。

また、連作障害は、畑でも同様に発生するため、大甲藷とサツマイモを交互に栽培する場合でも、水稲と同様、対策として輪作栽培が行われている。なお、輪作とする作物は地域によって若干異なるが、それは、各農家の経験に基づく知恵である（表1）。

表1 地域別の輪作体系に用いる作物の違い[注8]

地域別	前作物	第一年	第二年	第三年	第四年	第五年
苗栗二堡 苑裡庄	水稲 甘藷	大甲藷	水稲	大甲藷	水稲	大甲藷
苗栗三堡 五里牌庄	水稲 甘藷	大甲藷	水稲	大甲藷	水稲	大甲藷
苗栗三堡 大甲街	水稲	大甲藷	水稲	水稲	水稲	大甲藷

上述したように、大甲藷は、効率良く、かつ、より高い品質を得るために多大な努力が払われてきたことがうかがえる。それは、輪作栽培に関する資料に極めて明瞭に示されていると言えよう。

2.3. 栽培面積の推移

大甲藷は、日本統治時代には、経済的に有利な作物であったため、当該地域の農民達は、競って自分の水田に大甲藷を栽培するようになった。その理由が、当時の『台湾日日新報』に、以下のように掲載されている。

「新竹廳苑裡庄、通霄支廳。大甲、苑裡、通霄等地，種植三角藷草，用以製造帽蓆、煙包、紙袋、需求量大，利潤不錯，平均一分田之面積，收入可得百餘金，獲利比稻米高。」[注9]

その意味は、次の通りである。

（新竹庁の苑里庄、通霄支庁の大甲、苑里、通霄など地方では三角形の藺草（大甲藺）を栽培して、それによって帽子と蓆、菸草入（タバコケース）、紙袋をつくっている。それらの需要量が多く、しかも利潤が高く、1分の面積での平均的な収入は百元余りになり、稲を栽培するよりも利益が高くなる。）

このように、大甲帽子の生産量は、輸出の増加に応じて急激に増え、生産は活況を呈していった。それに伴い、大甲藺の価格は高騰した。その状況を、『台湾日日新報』は以下のように伝えている。

「栽培藺草水田地包括苗栗郡苑裡庄：苑裡、瓦壠房裡、貓孟、社苓、山柑、山脚、石頭坑、南勢林、田壠、苑裡坑、舊社大埔；通霄庄：通霄、通霄灣南勢、五里牌等地、栽培面積超過六十甲。」[注 10]

（藺草を栽培する水田は、苗栗郡の苑里庄の瓦壠房裡、貓孟、社苓、山柑、山脚、石頭坑、南勢林、田壠、苑裡坑、舊社大埔と通霄庄の通霄、通霄灣南勢、五里牌などにまで広がっていった。その栽培面積は 60 甲[注 11]以上にも達した。）

大甲藺の取引価格は固定されていたわけではない。その価格は、大甲藺の製品の需要と供給に応じて変動した。1905 年に大甲藺の価格は高騰してピークに達した。100 斤が一気に 8~9 元まで暴騰したのである。しかし、翌 1906 年には、突然 3~4 元まで下落した。このような価格の変動の根本的な原因は、価格の上昇に応じて栽培農家が生産を増やした結果であると考えられる（表 2）。なぜなら、大甲藺の需要先は、大甲帽子と大甲蓆と中心とした大甲藺工芸製品の素材としてだけの使用であり、つまり、生産過剰に陥ったものと思われる[注 12]。

また、『大甲藺及同製作品調査書』の記録によれば、大甲藺製品の制作者は、必要とする原料を、栽培農家あるいは大甲藺の売買業者から購入していたと記されている。この調査書の記述にある大面積栽培の専門農家の存在について、若干の考察をしてみたい。

苑里地域において、古くから帽蓆会社を経営していた羅氏への聞き取り調査では、以

下のような、大甲藪の栽培に関する実態を把握することができた。

「自分の義父は最初に集帽人をやっていた。買収の範囲を次第に拡大し、最終的に帽蓆製造業者になりました。しかも、義父は同時に自分自身で大甲藪も栽培するようになり、収穫した大甲藪は、帽蓆を編む労働者に配給するなどして経営を広げて行きました。」[注13]

表2 1899-1906年の「大甲藪」収穫量の推移 [注14]

年次	苗栗二堡 (通霄区、苑裡区、山脚区)		苗栗三堡 (五里牌区、大甲区、外埔区、十八庄区、大安港区)		合計	
	作付面積 (甲)	収穫 斤数 (斤)	作付面積 (甲)	収穫斤数 (斤)	作付面積 (甲)	収穫斤数 (斤)
明治32(1899)年	20,30	159,000	10,07	94,400	31,00	253,400
明治33(1900)年	18,05	44,050	6,45	18,240	24,50	62,290
明治34(1901)年	4,20	37,500	3,70	25,850	7,90	63,350
明治35(1902)年	7,83	62,800	5,20	48,600	13,03	111,400
明治36(1903)年	13,30	49,700	4,35	58,500	17,65	108,200
明治37(1904)年	14,30	52,450	—	—	14,30	52,450
明治38(1905)年	9,50	29,140	1,25	8,400	10,75	37,540
明治39(1906)年	48,40	151,400	11,97	36,186	60,37	187,586

単位：斤/1甲≒ha（ヘクタール/hectare）

つまり、この話によると、当時（日本統治時代）は、大甲藪を専門に栽培する農家の

存在はあったにせよ、羅氏の義父のような集帽人が自分で大甲藺を栽培し大甲藺工芸を編む労働者に材料としての大甲藺を供給することがあったようである。

また、大甲・建興社区の大甲藺栽培者の李氏への聞き取り調査によると、大甲藺は、茎の中心部が「鹹草」より充実しているため、茎は「鹹草」より柔らかく弾力があるとのことであった。また、大甲藺は、独特の澄んだ香りを放ち、しかも、その生育地は台湾中部の大甲、苑里両地区に限られているため、極めて特異な植物であると言える。この地域の人々は、そうした大甲藺を、肥沃な水田で人工栽培して、主に大甲帽子や大甲蓆の素材として用いてきたのである。

3. 「大甲藺」栽培の施肥

『大甲藺及同製作品調査書』の記録によると、大甲藺の栽培で使用した肥料は、「落花生油粕」「人糞尿」「豚糞尿」「堆肥」の4種類であった[注15]。それは、施肥に関する資料を見ると明らかである。次に、施肥の観点から、大甲藺生産の特殊性を概観していきたい。

3.1. 「大甲藺」栽培に用いた肥料の種類

大甲藺栽培が行われてきた地域では、上述の4種類の肥料の中でも、落花生油粕が最も優良な肥料とされてきた。これを肥料として施用した水田での大甲藺の生育は良好で、茎は丈夫であったし、収穫量も多かった。人糞尿は、落花生油粕に次いで高い肥料としての価値があると見なされていたが、窒素成分の多い人糞尿を肥料として使って栽培した大甲藺は繊維が弱くなり易く、品質がやや劣る欠点があった。

『大甲藺及同製作品調査書』[注16]に記載されている大甲藺栽培の施肥についての調査結果を表3に引用した。

これによると、苑里、日南[注17]、大甲の三つの地方(表3)で使う肥料を比較すると、いずれの地域、いずれの作期でも共通して使用されている肥料は落花生油粕であっ

た。また、その他に人糞尿と堆肥が使用されている場合が多かった。しかし、大甲地区では、堆肥を含めて大甲藺栽培に肥料を使う例は記載されていなかった。

表3 大甲藺栽培で使用する地域別肥料の種類（著者整理）[注18]

庄名	苑裡庄		日南庄		大甲庄	
	第一期作	第二期作	第一期作	第二期作	第一期作	第二期作
肥料の 種類	落花生油 粕	落花生油 粕	落花生油 粕	落花生油 粕	落花生油 粕	落花生油 粕
	人糞尿	人糞尿	x	x	人糞尿	人糞尿
	堆肥	x	x	堆肥	x	x

このように、当該地域では、大甲藺栽培のための肥料として、いずれの地域でも、また、一期作、二期作のいずれの場合でも、落花生油粕が使用されていたことがわかる。

次に、落花生油粕の生産について、その元となる落花生油の生産や落花生油粕の産出過程について記述する。

3.2. 大甲藺栽培の肥料としての落花生油粕の歴史

大甲藺栽培の肥料として落花生油粕が広く使用されるようになったのは、日本統治時代が起源である。その端緒は、台中州が当時台湾3大落花生の生産地であり、多量の落花生油粕が存在したことが主な要因と思われる。なお、大甲郡における落花生の生産量は、全州で第二位である（表4）。

落花生から搾った油のことは、清時代の康熙33（1694）の年間の地方史書に、すでに記載されており、当時は燈油として用いられていた。なお、台湾における落花生油の俗称は、このことを反映して「火油（フェユウ）」[注19]であった。

表4 日治時期台中州四郡の食用落花生油・胡麻油の生産量と価格 [注20]

郡称	落花生油		胡麻油	
	生産量 (キログラム)	価格 (円)	生産量 (キログラム)	価格 (円)
大屯郡	48,293	55,870	8,802	13,634
豊原郡	330,713	328,325	75,213	94,608
東勢郡	10,788	13,303	3,707	45,96
大甲郡	50,960	62,212	85,581	128,249
小計	440,754	453,710	173,303	241,087
総産量	614,057 (キログラム)			
総価額	694,797 (円)			

落花生油の抽出が盛んに行われた様子を詠んだ詩が、朱景英の『海東札記』（1773年）に、記載されている。

「南北路連隴種土豆，即落花生也。沙壤易滋，黄蘗遍野。每冬間收實，充衢盈擔。熟啖可佐酒茗。榨油之利尤饒。巨桶分盛，連檣壓舶販運者、此境是資[注21]。」
その意味はおよそ次の通りである。

（南北に畝を作って、土豆（トウダウ）を植えて、落花生を得た。砂の土地で成長が良く、黄色い花が漫々と咲く。毎年、冬に収穫して、落花生の担ぐ荷物が多く、大通りが満ち溢れる。よく煮た後、お茶やお酒と一緒に食べる。落花生の搾り油の利益は非常に大きく、巨大な桶が溢れるほどに満杯にして、たくさんの大きな船を連ねて、それを輸出する。）

このように、落花生油の生産は台湾全島で早い時期から盛んに行われていたことがうかがえる。その後、18世紀の後半に、落花生油の抽出業はますます興隆し、嘉慶(1796～1820)年間には、落花生の栽培は一般的に広く行われるようになった。それに伴って、

落花生油を圧搾する産業が極めて盛んになって行った。その後も落花生栽培と落花生製油は拡大を続け、台湾の主要な食用油製品の一つになった。

落花生の利点はその高い含油率の高さだけではなく、落花生の茎は熱源として利用された。また、新鮮な蔓や葉は牛、羊の飼料としても利用された。

油を搾った油粕は、俗称「豆餅（タオッピン）」（または、豆圈（タオッコウ））の材料になる。その他に、余剰価値があつて、搾り油粕は農作物の肥料や家畜の飼料として用いることができた[注 22]。

なお、表 4 には、『台中縣志』[注 23]に記されている「日治時期台中州四郡食用油産量統計表」（1947 年）を示した。これによると、日本統治時代の台中県(州)4 郡の当時の落花生油総産量は 614,057kg であった。この数値の大きさを見ると、落花生油粕が大甲藺栽培の主要な肥料として使用されたことは、まさに当該地域の産物の全体活用であり、大甲藺栽培が大きく拡大したとこと、密接な関係があつたことがうかがえる。

3.2.1. 落花生油の搾り過程

落花生油粕の原料は、主に落花生油を搾った落花生の残渣である。それを丸い餅のように円盤状に固めたのが落花生油粕である。台湾においては、この円盤状に固めた落花生油粕を「豆圈（タオッコウ）」あるいは「豆箍（タオッコウ）」と呼んでいる（「圈」と「箍」は台湾語で発音が同じである）。

次に、台湾伝統的な落花生油を搾り取る二つのプロセスを概観する。

- (a) 乾燥（図 5、6）：大型オーブンで落花生を煎る。シャベルで連続して攪拌して混ぜながら煎る。焙煎の際には、煎り過ぎてこげ付かないように注意する。また、未熟な落花生の使用は避ける。



図5 乾燥場の様子[注24]



図6 焙煎の様子[注25]



図7 粉碎場（煎り落花生磨砕用の石輪）[注26] 図8 砥石（石輪）で磨り砕く[注27]

(b) 粉碎（図7）：乾燥した落花生を、図8に示した砥石（石輪）を使って磨り砕く。

(c) 篩別：油を効率よく搾るために、蒸す前に篩で選別して粉の大きさを揃える。篩で残った大きい粒の落花生は再び粉碎して細かく揃える。



図9 蒸熟場[注28]



図10 蒸熟蒸し器[注29]

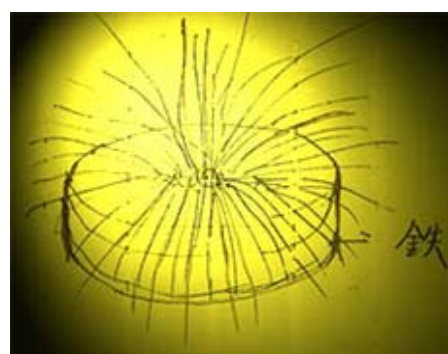


図11 円盤状の鉄と藁[注30]

- (d) 蒸熟 (図9) : 細かく磨砕した落花生を専用の蒸し器で蒸す (図10)。
- (e) 壓模 : 「金輪」と呼ばれる特殊な丸い器のなかに、最初に稲藁を入れて閉じ込め、次に蒸した粉状の落花生 (粉碎豆) をその中に入れる。足で金輪を踏み付け、粉碎豆を円盤状に固めて落花生粕を作る。その後、圏外の稲藁を内側に折って、円盤状に固めた粉碎豆を稲藁で包み込む (図11)。それを天井から垂らした荒縄に身を支えながら再び足で体重を掛けて踏み固めて、一枚の円盤粉碎豆を作る (図12)。
- (f) 圧搾 (図13) : 作成した円盤状の粉碎豆を搾り油台の上に20枚を並べて閉じ込め、粉碎豆の内側を押し出して、落花生油を搾る。円盤状の粉碎豆が平坦になるまで搾り込む、最後に落花生の滓が残す、一枚の「豆圏」 (図15) をなる。この方法は「楔式圧搾法」である (図14)。



図12 踏み固めて円盤粉碎豆を作る[注31] 図13 圧搾場[注32]

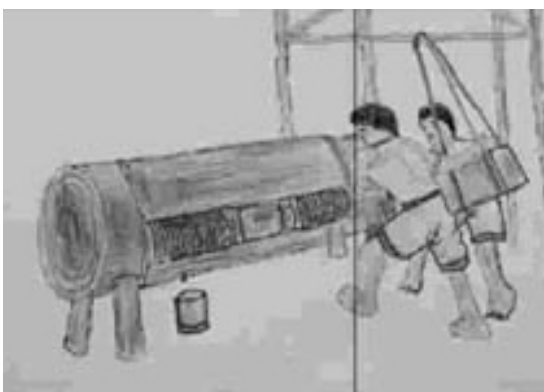


図14 落花生油製作過程[注33]

図15 豆圏 (落花生油粕) [注34]

3.2.2. 落花生油粕の産出

かつて、人々は、生活を豊かにするために、身の回りの資源の徹底的な利活用を、さまざまに工夫した。それは、落花生油の搾油においても例外ではなく、第1回目の搾油で残った滓から、再度製油作業を行い、最終的に残ったものを落花生油粕とした。その過程は以下の通りである。

(a) 1回目の落花生の粕を粉砕する→(b) 篩に掛ける→(c) 落花生の粕を金輪に入れる→(d) 圧搾して、少量だが落花生油を搾り取る→(e) その後、更に搾り込んでも油が出なくなり、最後に一枚一枚の円盤状粕が肥料や飼料等に使用される落花生油粕を得る [注 35]。

3.3. 堆肥の製造と使用法

堆肥（台湾における俗称は「土糞」である）は、古くから良く利用されてきた肥料の一つである。以前の農家には、家の外に「畚堆間（ブンティケン）」 [注 36] と呼ばれる場所を設けており、そこに農業の廃棄物や台所の残飯を積んで置いて、有機肥料いわゆる堆肥を作った。それだけでは必要な量の堆肥を作ることはできないので、適切な材料を探し集めなければならない。例えば、稲藁、野草、野菜、あるいは、果物の皮、植物の茎葉、落葉、人、鳥、鴨の糞便などを集めた。それらと大甲藪が切断された部分も、それに農家の生活から出たゴミ（葉、野菜の根、果物の皮等）を堆肥づくりに利用した。これらを十分に混合した後、高温多湿の条件下で発酵と微生物による分解を利用して堆肥化を進め、さらに、約3～4週間に一回切り返しを行う。これを繰り返して、3ヶ月位かけて堆肥を作った。

堆肥の施用は、大甲藪の作付け前に行った。まず家の屋敷内で作った堆肥を水田まで運搬する。そして、堆肥（土糞）を水田に均一に散布して、その後に鋤起こしを行い、さらに肥料を散布してから土で覆った。

このように、大甲藪の栽培では、堆肥も肥料の一つとして使われており、それは、鋤

起こしの前であったようである。このように、人々は、工夫しながら、作業行程に適した肥料を用いて収量と品質の向上を図ったものと思われる。しかし、これは先人の「物がもったいない」の生活態度に基づく伝統である。

今日、当該地域においても、ますます、環境保護意識は高まる傾向にある。上述してきたような自然との共生に基づいて形成された生活文化に込められた先人の知恵、つまり、天然の素材の全てをとことん使い尽くす文化に、現在の人類はもっと深い関心を注ぐ必要があるように思われる。

3.4. 大甲藨使用の肥料の知恵

大甲藨栽培している現地において、その栽培に当たっての施肥法について聞き取り調査を行った結果、以下のような結果が得られた。

落花生油粕を使用して大甲藨を栽培した時の印象を、建興社区の李荘完氏は、以下のように語ってくれた。

「落花生油粕は丸くてとても大きい。落花生油粕は大きな『円形』をしているため、肥料として使用する前に、先ずそれを細かく砕く必要があった」。

また、その後、「大甲藨を栽培する水田に散布した」と話してもおり、落花生油粕の施用に当たって注意すべき点があったことがわかる。

また、同氏は、文武里に居住する李氏の伯母について、「糞尿」の利用について、以下のように語った。

「彼女の父は『落花生油粕』を鉋で削って、鉋屑のようにしてから使ったので、落花生油粕を比較的容易に細い粉の形を粉碎できて、大甲藨栽培の水田に散布して使用した。したがって、落花生油粕の使用には特に問題はなさそうだ。一方、「糞尿」の施用は彼女の家の大甲藨の栽培田には適していないようだ。」[注 37]

と話した。

また、李氏の隣家の高齢女性の蘇氏は、

「私が子供の頃、父は、同じ「円形」の『落花生油粕』を砕いて使用していた。また、他には糞と小便を肥料として使うこともあった。その場合は、施用後直ちに水を水田に入れて、『人糞尿』の肥料を希釈していた。『人糞尿』は肥料濃度が高過ぎて、大甲藺の苗が枯れるのを避けるためであった。」[注 38]

と話した。

なお、『大甲藺及同製作品調査書』に、

「人糞尿におよそ九倍の水を加へて稀薄にしたるものを稚苗に施し…。」[注 39]とあるように、人糞尿の施用には細心の注意が払う必要があったようである。

いずれにせよ、当該地域固有の植物である大甲藺は、地域の素材の全体活用に基づく、人々の絶え間ない努力の結果、最良の工芸材料として完成されて行ったものであったと言えよう。

なお、表4に、落花生油粕、人糞尿、豚糞尿、堆肥の窒素、加里、リン酸の含有率を示した。

表4 有機質肥料の成分分析例 (%) [注 40]

種類	窒素 (N)	リン酸/りん酸 (P205)	加里/カリ (K20)
落花生油粕	4.01%	0.85%	1.28
人糞尿	6.08%	9.14%	0.81
豚糞	0.65%	0.50%	0.30%
堆肥	0.55%	0.48%	0.39%

(著者整理)

人糞尿は、大甲藺栽培では落花生油粕に次いで高い価値を認められたが、即効性が高い窒素成分が多い人糞尿を使って栽培した大甲藺は、カリ成分が少ないこともあって、徒長して繊維が弱くなり易く、品質がやや劣る欠点があった。そのため、大甲藺の栽培

には、落花生油粕が肥料として積極的に用いられるようになった[注 41]。

台中市大甲区建興社区で、現在も継続して大甲藺を栽培している李氏の話によると、大甲藺の栽培には、以前は落花生粕と人糞尿を肥料として使用していたが、1950年代に化学肥料が普及してきたため、現在では化学肥料に変更しているという [注 42]。

なお、苑裡地域の職人朱氏は、「肥料にとして落花生油粕、茶粕が使用すると藺草が滑らかで、しかも柔らかく、藺草の品質が化学肥料で栽培したものより扱い易く、製品を編み易かった」と述べている[注 43]。

4. 大甲藺工芸に関する技術

ここでは大甲藺工芸に用いられる技術を概観したい。

大甲藺工芸品の作り方の概略の手順は以下の通りである。

- (1) 採取
- (2) 乾燥
- (3) 素材の加工
- (4) 大甲藺の編む文化
- (5) 時代に呼応した製品

これらについて、以下に詳細を記す。

4.1. 大甲藺の採取

大甲藺、三角藺の収穫に当たっては、先ず、栽培農家は第一に天候の変化に注意しなければならなかった。大甲藺の栽培農家の李氏によると、

「大甲藺を刈り取る際は、ほぼ1週間前から、天候の変化に注意しなければならない。そして、少なくとも1週間以上晴天が続くのを確認してから収穫作業を開始しなければなりません。なぜなら、大甲藺は、刈り取り後、直ちに乾かして、かびが発生しないように注意しなければならないからです。もし、乾燥の途中で

雨に遭遇すると、その栽培期間の苦労は全て水泡に帰してしまいます。」

とのことであった。

当時、天気を予測することは栽培者自身の経験によって判断する事であった。それほど、日中に降り注ぐ太陽光線が大甲藺の乾燥には不可欠であったことと思われる。

4.2. 大甲藺の乾燥

聞き取りによると、通常、大甲藺の刈り取りは、早朝4時頃から始め、太陽が昇る午前8時前後までに刈り取り作業を完了する。その理由は、大甲藺の刈り取りは大変な作業で、朝8時には体力的に限界に達し、太陽光も熱くなっている。また、農家は他の農事作業も抱えているためである。



図16 藺草の日干し状況[注44]

刈り取った大甲藺は、海岸、道路、屋敷内等の広々とした場所に運んで、まんべんなく太陽光が当たるように広げて良く乾かす。



図17-1 藺草の日干しと収穫の様子

大甲藺の全体に日光が当たるように、1時間ぐらいに一度の割合で裏返しにする。1

～7日間太陽に晒した後に、再び大甲藪を1束1束括る(図16)。そうすることによって、効率よく保管することができる。そのようにして、夜には部屋に運び入れて保管し、次の日の日中も続けて大甲藪を晒して乾燥させるのである(図17-1)。



図17-2 藪草の日干しと收藏の様子[注45]

4.3. 拵草人の仕事—素材の加工

乾燥して、収束した大甲藪を直径が約7寸[注46] (21センチメートル) で一束にする。そして、約10数束を集めて整理・保管する(図17-2)。この仕事を専門に行う人がおり、彼らは「拵草人」と呼ばれている。大甲藪を梱包した後に、拵草人は椅子の上に立って、長さが異なる大甲藪を揃えて、最も長い大甲藪で選別する。また、正規の販売用のために、揃えた大甲藪は両方の根と先端の花部分を切断して、一括りにする。これが「拵草」[注47]という作業過程である。この仕方は日本の藪の選別とほぼ同じである(図18)。



図18 日本の藁の選別様子[注48]



図19 大甲地域の大甲藁の選別様子[注49]



図 20 昔と変わらぬ現在の「捫草」の作業工程[注 50]

4.4. 大甲藎を素材として生活用具を編む文化

すでに述べたように、大甲藎を発見し、これを採取し、乾燥したものをを用いて、荒い蓆と生活用具を編み出して使用するようになった起源は、ペイポ族の女性達であった。その約 40 年後に、今日見られるような大甲藎の繊細な製品の制作が始まった。その後、清時代を経て、1895（明治 28）年に日本が台湾を併合したのは、日本には無い南国の資源を手に入れ、産業振興を進めようという側面が強かった。当時、産業振興の一環として、大甲藎が日本人からも大きく注目されていたことがうかがえる[注 51]。

4.4.1. 大甲藎製品の生産者

大甲藎職人らへの聞き取り調査によると、大甲と苑里地域での大甲藎製品の技術者は大部分が女性で、また、ほとんどが、7～8歳の時に、編みの基本的な技術を家族の大

人、通常は母親または姉から学んだと言われている。

「苑裡地方の婦女子は既ね七八歳に至れば其母又は姉の製作を見習ひ先ず粗製の蓆を編ましめ…。」[注 52]

4.4.2. 職工の養成及び労働の実態

大甲藺帽子を編む場合には、帽子の本体部分と帽子の縁に分けて製作された。通常は、帽子の本体部分は熟練した女性技術者が編んだ。一方、帽子の縁は、職工養成中の8歳～12歳の小さい女童がこの部分を作った。

大甲藺製品は、帽子と蓆以外にも、かばん、煙草入、紙入（財布）、下駄表等の製品が作られている。また、著者が聞き取りした結果によると、一般的には、母が何かをつくる時に、娘にその作り方の技術を教え伝えたとのことであった[注 53]。しかし、この状況は大甲藺工芸技術研修会を実施して、大甲藺製品を学んだ人々に、さまざまな製品の編み技術を伝授するので、この状況もう存在しません。

当時の社会情勢における民間人の生活は非常に苦しかった。そのため、子供達は、学校の放課後になると、家計を助けるために働くのが一般的であった。したがって、帰宅しても、勉強したり、友人達と遊んだりといったようなことはできなかったと言われている。しかし、その時代の女の子供達はそのような境遇に特別な不満は持っていなかったと思われる。むしろ、編むことを機会に幼なじみの親友を得ることができたのであった。

また、大部分の人々は、主に、「自宅の仕事場で帽子を編んだ。しかし、蓆を編むには広い空間が必要であったために、隣近所の職工は、大きな部屋を持つ家に集まり、その家の比較的大きい部屋で一緒に蓆を編んだ。朝から晩まで、食事以外は休むことなく編んだという。」[注 54]

そういった中で、人々は、大甲藺蓆という製品作りに精出した。また、できた製品を前に互いに鼓舞し合ったに違いない。例えば、大甲の建興社区の職人である莊昭月氏、

李莊完氏の話によると、

「2人共に8、9歳頃から他の姉妹と一緒に、大甲藺製品やさまざまな材質の帽子を編んだ。その間、姉妹はお互いにその技術的な問題を話し合っ、協力して解決して行っ。また、蓆や帽子を編む技術は難しいが、出来映えの良い作品を完成した時には、お互いに褒めあっ、次の仕事に励む力を得ていた。」

「なお、一緒に働く時、曲を歌ながら、手が蓆や帽子を編み、次々と完成する事ができた。1960年代当時の流行歌は主に台湾語の歌である。姉妹は歌いながら、帽子や蓆を一点、また一点と楽しく編んで行っ。」



図 21 手擲仔火[注 55]

そうである。

また、彼女らの話によると、

「母は事を処理する時間に外出する時に、姉妹はお小遣いを出した、買い物料理したと食べることである。彼女達は母を出て行っ時間のが長さが抛り所に軽食の種類を決定した。食物の内容は、たいてい、ビーフンや小麦粉焼き、素麵等数種類であった。そして母を帰ってくる前に、皆は口の周りをきれいに拭いた。それから、帽子を編んで、また目をあつた時、互いにほほえみが現れた。これも大変な編み細工の工作中楽しことの一つである。」[注 56]

と話した。

また、苑裡地域においては、

「周りに同年齢の友達が仕事をやりながら、喋り、一緒に協力完成した蓆が売った。それで貰うお金の一部で夜食として食べる物の食材を買い、それを料理して皆で食べた。」

という。

このように、その姿は、『描繪苑裡草編描繪苑裡草編——一個傳統工藝產業生態與脈絡的研究』[注 57]に記述されている通りである。

これらの事実から、当該地域の人々は、大甲藪製品を制作することが生活上の喜びでもあったであろうことがうかがえる。

なお、当時、蛍光灯は普及しておらず、夜の作業の照明は、「手擲仔火(チュウキヤーフエ)」(図 21) と呼ばれる照明器具であった。照明は暗く、夜の仕事は視力を非常に消耗させたと言う[注 58]。

また、当該地域においては、1950 年代までは、娯楽が非常に少なかった。しかしながら、人々は地域の財産としての大甲藪を作る一連の仕事の中にこそ楽しみと喜びを見出したに違いない。集帽人も、そういった人々の意識を鼓舞するために、奨励方式を採用した。給金もさることながら、彼女達が 1 枚の蓆を編み終わると、若い女性労働者を映画館に招待して映画を見せることもあった。

当時は、映画を見るのは贅沢な楽しみであった。そのため、映画を見に行きたい職人達は、一層努力して蓆を編んだ。上映される映画は、通常は台湾語あるいは台湾の標準語、たまに日本映画や外国語もあった。

このことは、特に、若い女性労働者にとっては、仕事以外での当時の最大の楽しみだったと言う[注 59]。

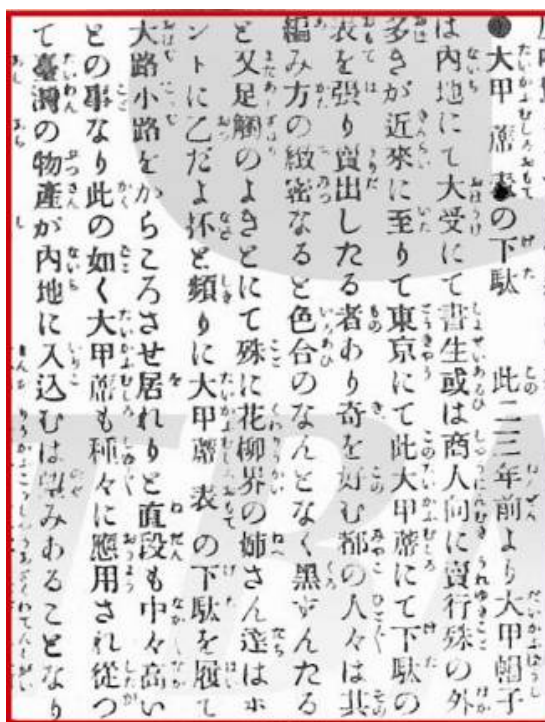


図 22 大甲藪 表下駄の流行を報じる新聞記事 [注 60]

4.5. 大甲藪の製品紹介

4.5.1. 細工製品

大甲藪を用いた細工製品としては、「丸座布団」「煙草入」「紙入（財布）」「下駄表」「名刺入」等の生活用品が生産されてきた。中でも、「丸座布団」は、感触が柔軟で、夏に使用するとツルツルとした爽やかさが感じられる。

また、紙入（財布）は、日本統治時代にお洒落な小物として愛用され、現在でも少数ではあるが、使用している人がいる。

4.5.2. 時代に呼応の製品

（1）日本統治時代：「下駄表」

大甲藪で作られた生活用具が、いわゆる製品として最初に作られたのは大甲蓆であったと考えられている。1897年、日本政府は苑裡街に官庁を設置した。当時の庁長・淺井元齡が西勢庄の婦人・洪鶯に要請して、大甲帽子の手本の制作が行われた。その後、つくられる製品の種類は増加し、大甲帽子、苑里帽子、丸座布団、煙草入、紙入れ、下駄表などの数種類の製品が作られるようになった。

これらは、いずれも、他の製品にもみられるが、『大甲藪及同製作品調査書』の中には、大甲藪の特性を上手く利用した製品が、東京で大いに流行したことが記されている。それが、下駄表である。

「本品を製出し始めしは僅かに二三年前の事に属し爾来好事者間に愛用せらる、所となりしも其産額大ならず……[注61]。」

この大甲藪で作られた下駄表が編まれたのは、1905年以降のことであった。当初は、ファッションに興味を持つ人の用品に属していたため、生産額そのものは多くなかったが、その後、流行して生産額は徐々に多くなっていったという記事である。

関連することが1903年に台湾日日新報の記事に掲載されている。そこには、東京では、大甲蓆を表に貼り付けた下駄を履くことが流行していると報じられている。内容は図22のとおりである。

「大甲蓆 表の下駄 此の二三年前より大甲帽子は内地……（図22）」

大甲蓆は、全ての大甲藪の製品の中で最も単価が高い製品である。そのため、販売価

格もやや高い。ところが、販売上手な商人は、大甲蓆を応用し、大甲藺製の下駄表をつくらせて販売を伸ばしたのである。

1945年の台湾総督府の官報の中に、履物表の統計が出現するようになった。このような流行によって、市場の需要に応じて、大甲藺履物表の生産が拡大して行ったようである。

(2) 現代（中華民国）：ヘルメット用内帽[注 62]

台湾は亜熱帯に属しているため、夏季は特にひどく暑く、バイクを運転する人が夏にヘルメットを被るのは、非常に蒸し暑く、耐えがたい苦痛である。

大甲藺は吸汗性に優れ、通気性も良く、消臭等の特性がある。したがって、大甲藺で編んだヘルメット用内帽を使用すると、内帽と頭部が接触して、直ちに大甲藺の吸湿の長所が発揮され、頭部のムツとする熱は緩和され、耐え難い苦痛から解放される。

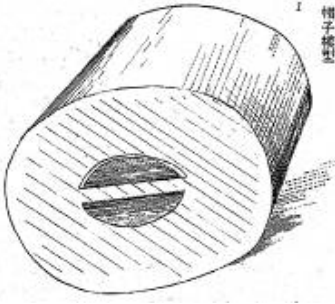
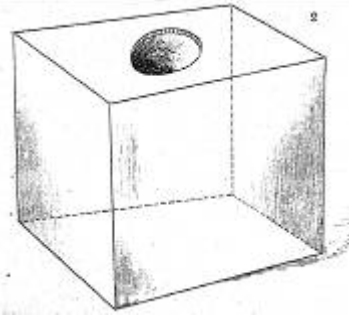


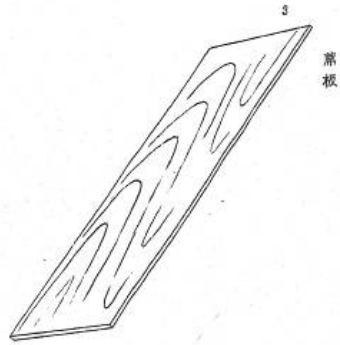
5. 大甲帽蓆製造を使う道具

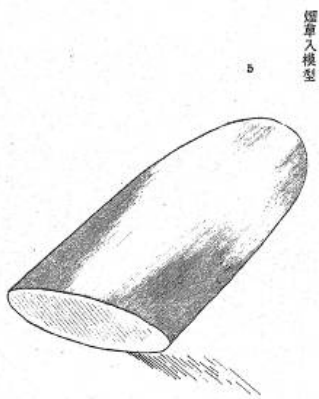
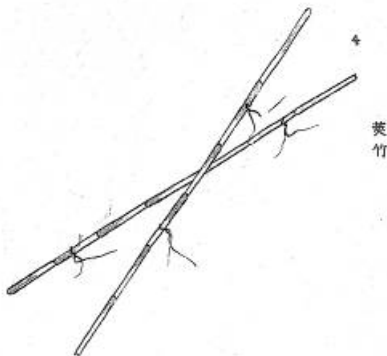


5.1. 道具の機能

台湾には、「優れた仕事ができる優秀な職人は道具に拘る」という諺がある。それは、大甲帽子と蓆の制作にあっても例外ではない。その諺は現在でも通用する。しかも、生活用品の制作に使われる道具は、その地域文化と密接な関連があり、著者は、道具を使う文化の探求には価値があると考えます。そこで、大甲帽と大甲蓆の制作に使われる道具を、以下に紹介する。

表6 大甲帽子と蓆などの製品を編む道具

名 称	使用目的
1) 帽子模型（土名は帽仔頭/笠仔模） 図 23、図 24	帽子頭部の模型
図、写真	

 <p>図 23 帽子模型[注 63]</p>	 <p>図 24 帽子模型、[注 64]</p>	 <p>図 25 帽子模型 [注 65]</p>
<p>名称</p>	<p>功能</p>	<p>図、写真</p>
<p>2) 帽子台 (土名は帽子架)</p>	<p>帽縁を編製する道具</p>	 <p>図 26 帽子台 (著者撮影)</p>
<p>3) 蓆板</p>	<p>蓆座布団紙入等を編製する道具</p>	 <p>図 27 蓆板[注 66]</p>

<p>4) 煙草入模型</p>	<p>煙草入を編製する模型</p>	 <p>図 28 煙草入模型[注 67]</p>
<p>名 称</p>		<p>使用目的</p>
<p>5) 挟竹 (土名は蓆挟又稱蓆竿)</p>	<p>蓆を編製するにそれ編み上たる部分を挟む道具</p>	
<p>図、写真</p>		
 <p>図 29 挟竹[注 68]</p>	 <p>図 30 挟竹[注 69]</p>	
<p>名 称</p>	<p>使用目的</p>	<p>図、写真</p>
<p>6) 艶付器 (土名は蓆磨仔、藤實)</p>	<p>製作品に艶を付けるためそれ表面を擦る</p>	 <p>図 31 [注 70]</p>

7)小刀（土名は蓆刀仔）	各種の製作品に用いる	—
8)鋏（土名は鉸刀、鉸剪）	裁草に用いる	—
9)尺度（土名は尺）	製作品の長短を度に用いる	—
名 称	使用目的	図、写真
10)木槌（土名は槓槌）	大甲藪を軟らかくするために用いる	 図 32 [注 71]
11)水入器（土名は茶碗）	製作中の大甲藪を潤すための水を備え置くために用いる	—
12)布帛 （土名卓布トーボー）	製作中の水分、若は塵埃を拭うために用いる	—

これらの道具が全て先人の知恵で開発された大甲藪工芸品を作るために使用された道具である。いくつかの道具は「ブリコラージュ」[注 72]の観念と一致していると言えよう。以下に、それぞれを詳述する。

5.2. 大甲藪工芸の製作道具

大甲藪を編む際には、まず、1本の竹を使う（長さ約 60 センチメートル/大甲蓆の長さ約 7 台尺[注 73]）、中央から 1/3 の所までを割り、再び編む大甲藪を隙間の中に入れて、綺麗に並べ、縄でその竹をぴったり縛る。この竹竿の名は「挟竹」と呼ばれた。俗称「蓆挟」又「蓆竿」として知られて、この独創的な道具は大甲蓆を編むのに主要な道

具の一つである（図33）。



図33 大甲蓆を編製道具—挟竹（著者撮影）



図35 泰雅族の苧麻を剃る器[注74]

一般的な竹竿は、多くは服や物品の陰干し、あるいは旗竿に用いる。竹の真っ直ぐで、長く、弾力に優れている特性を応用して挟竹を作り、それを用いて生活用具であるさまざまな大甲藺工芸品を作った。大自然から贈り物を使い、生活の道具を作る。これは先賢達の生活するために発見した知恵の結晶である。



図34 番社采風圖 織布[注75]

また、『淡水廳志』の記録によると[注 76]、大甲藪と蓆の原点はパイポ族の女性によって始められた。かつて、パイポ族の人々が大甲蓆を編む時(図 34)、この独創的な道具を用いて素材を編んだ。他の先住民族は、布を織るのに素材の苧麻をかすめ取る道具「苧麻を剃る器」図 35 は全て竹竿で作られていて、使用方法は異なるが、できた製品はいずれも同じように見事である。

なぜ、竹が選択され、道具を作る材料にとして使用されたのであろうか？

その理由は、主に、台湾の位置に関係していると思われる。台湾の地理を説明すると、南部の嘉義に北回帰線が通っている。そこを境に、北と南二つの気候帯に分かれて、北部は亜熱帯の季節風気候で、南部は熱帯の季節風気候である。台湾全体としては亜熱帯と熱帯気候と言える(図 36)。そのような気候帯に属する台湾において、竹が成長する速度は非常に速いため、最も獲得しやすい植物の材料の一つであった。特に、平地には竹が多く生育していて、利用し易い。つまり、ブリコラージュの観念は、生活に必要な道具を生活の周囲にある自然物を用いて、その自然物が持つ素材の形や構造を最大限に活用することで、生活に必要な道具としての目的を叶えることである。

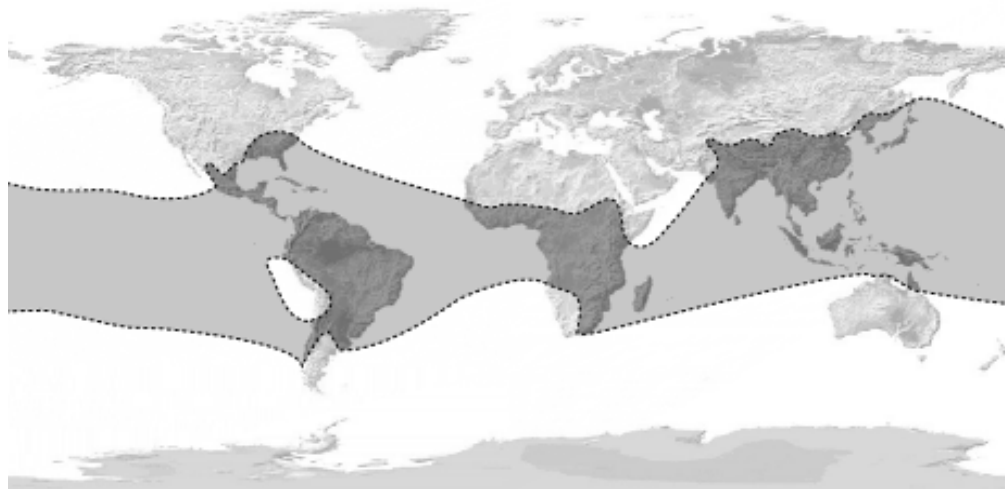


図 36 竹生長の範囲[注 77]

生活環境の周囲に存在する自然物を利用する大甲藺工芸は、まさしく自然と共生する生活の実践であると言える。

6. まとめ

本章では、大甲藺に関する栽培の肥料、刈り取り収穫、精選、編み技術、製品としての道具の文化を解析して、大甲藺工芸文化に含まれる先人の知恵の新しい展開を考察した。その結果得られた結論を総括すると、以下の通りである。

(1) 大甲藺工芸品とその利用は、当該地域の人々が不断の努力の中で作り上げてきたものである。特に、大甲藺は、大安渓流域に自生する植物であり、「ものづくり」に適した素材として、この礎は先人が自然の恵みである大甲藺（資源）を大切にし、かつ自らの手で栽培する術を学ぶことと、資源の有効利用を図るという英知の賜である。

(2) 大甲藺の栽培で肥料として最も多く使用されてきた落花生油粕は、地域の物産である落花生を食用にするのみならず、落花生油の製造、落花生搾油残滓の落花生油粕を大甲藺の栽培肥料としての利用、茎葉の家畜飼料や燃料としての利用など、自然の恵みを徹底的に利用する生活の知恵であった。また、動物の排泄物（人、動物）、堆肥等有機肥料が用いられ、それも資源の再利用そのものである。しかも、「畚堆間」を庭先に設けての堆肥（有機肥料）の製造もまた廃棄物のリサイクル再利用の実践例である。

(3) 大甲藺を発見し、それを素材とした大甲帽子、蓆作りから300年が経過し、その間、煙草入れ、財布、インソールなどさまざまな生活用具が、自らで考案した道具を使って制作され、産業としての華々しい反映を遂げるに至った。大甲藺が先住民族によって見出され、さまざまな生活用具に使われるようになった歴史的経緯を振り返ると、地域に存在する素材を、先人が知恵を絞り、創意工夫を加えて、素材を加工（この場合は編み技術）して生活用具を製作したことが明らかとなった。また、大甲、苑裡地域の婦人達が周りにいる同年齢の友達と仕事をしながら、喋り、一緒に協力し、大甲藺製品を完成する時間は彼女らの心の一番大切な時間であった。

(4) 大甲藺を加工して生活用具を作る際に使用される道具に挾竹(竹)と艶付器(もだま)などがあるが、それらは全て自然の素材であり、大甲藺利用の製品を含めて自然と共生する観念に合致している。

(5) 台湾における大甲藺を用いた生活用具づくりに使用する経緯は、中国大陸で見られる地域に住む漢民族が地域特産物を用いて(例えば：材木、陶磁器、竹など)、自然発生的に生活用具を作り始める一般的なパターンと同じであった。それらの用具はまさしく先人の知恵の結晶と言える。台湾においても、そのような地域の素材利用による用具の作成は中国大陸のそれと同様であった。すなわち、台湾の大甲と苑里両地域に移住して来た漢民族が大甲藺の用具を作り、使用した最初は350年前で、しかも、この地域に定住していた先住民だったペイボ(ペイボ)族群のタオカス(TAOKAS)族から製作過程を学ぶことから始まった。

(6) 大甲藺を材料とした大甲藺工芸産業が、一時、隆盛を極めたが、それも当該地域の人々の努力の結果である。大甲藺に対する正当な評価が薄らいでいる現在、消失が危惧されている一連の当該地域の文化・文明は、それを作り出してきた人々の知恵と文化の消失の危機でもある。

産業革命以降の近代社会において、近代化や人口増加などで地球的規模での資源の欠乏や化石燃料に頼り切った果ての地球温暖化などに全世界が苦しんでいる。そのような中で、我々人類は産業革命以前の自然と共生した生活を今一度考え直す必要に迫られているのではないかと思われる。

注

- 1) 島田弥市、倉田藤一：大甲藺及同製作品調査書、台湾総督府殖産局、8-9、1908
- 2) 前掲1)、23-24
- 3) 前掲1)、24-25
- 4) 大甲地域の建興社区の李金龍氏。
- 5) 劉家賓：八十八年大甲帽蓆工藝産業文化活動成果專輯、大甲鎮公所、16、1999
- 6) 莊溪：認識植物網站、大甲藺-花穂、<http://kplant.biodiv.tw/蒲/蒲.htm>
(2014年3月引用)。
- 7) 大甲地域の李安妮氏と苑裡鎮出身の羅麗芬氏への聞き取り調査による(日付:2013、6)。
- 8) 前掲1)、22-23
- 9) 新竹通信：臺灣日日新報、No. 4696、(六)、1913、7、2
- 10) 臺灣日日新報第8484號：新竹名物大甲藺壠蕃婦的手柄、第二十一版、1924、1、1
- 11) 甲≒ha：台湾独特の単位。
- 12) 前掲1)、48-49
- 13) 苑裡鎮出身の羅麗芬氏への聞き取り調査による(日付:2013、6)。
- 14) 前掲1)、11
- 15) 前掲1)、28
- 16) 前掲1)、29-30
- 17) 日南が大甲と苑裡の間において、大甲藺の産地の一つである。
- 18) 前掲16)
- 19) 火油(フエユウ)：台湾語の「火」は「灯」の意味です。
- 20) 林世珍、陳光華、鄭榮松：臺中縣志、(卷四)經濟志、(2)工業篇、台中縣政府、1989

- 21) 朱景英：海東札記、臺灣文獻叢刊第19種、臺灣銀行經濟研究室、37、1958
- 22) 李榮鈞：油車心榨油情、花生油的原料—落花生、沙鹿鎮沙轆文化協會、2005
- 23) 前掲19)
- 24) 台湾総督府研究所：台湾総督府研究所報告（1）、臺灣産落花生油ニ就キテ、台湾総督府研究所、56-58、1912
- 25) 前掲22)、143
- 26) 前掲24)
- 27) 前掲25)
- 28) 前掲24)
- 29) 前掲25)
- 30) 前掲25)
- 31) 前掲25)
- 32) 前掲24)
- 33) 前掲25)
- 34) 油車心榨油情：<http://book.shalu.gov.tw/book-s2/ch07/ch07-6.htm>（2013年3月引用）。
- 35) 前掲22)、142
- 36) 畚堆間は台湾昔の農家のごみを放す所。
- 37) 大甲鎮出身の李莊完氏への聞き取り調査による（日付：2013、6）。
- 38) 大甲鎮出身の蘇碧霞氏への聞き取り調査による（日付：2013、6）。
- 39) 前掲1)、29
- 40) 台湾総督府：台湾総督府研究所報告第1回、台湾総督府研究所、台湾産落花生油ニ於キテ、54、1912（花生油粕）
森口潔：実験活用一坪学校園、第二節施肥、48-49、文書堂、1937（人糞尿、有機質肥料の種類、し尿汚泥肥料）

- 41) 前掲1)、56
- 42) 前掲1)、28-30。台中市大甲区建興社区で、現在も継続して「大甲藺」を栽培している李金龍氏への聞き取り調査による（日付：2013、6）。
- 43) 苑裡鎮出身の朱阿厝氏への聞き取り調査による（日付：2014、2）。
- 44) 李安妮提供
- 45) 李安妮、著者撮影
- 46) 寸（すん）：尺貫法における長さの単位であり、約 3.03 センチである。尺の10分の1と定義される。
- 47) 大甲鎮志：第5篇、経済篇、第7章帽蓆産業、大甲鎮公所、664、2009
- 48) 吉川祐輝：工芸作物各論、第1巻（纖維作物）、成美堂書店、258、1919
- 49) 前掲5)、23
- 50) 李安妮提供
- 51) 台湾日日新報：新聞記事文庫 工業(03-024)、本島の工業(一～六)、台湾日日新報 1916.6.5-1916.6.16
- 52) 大甲蓆製品に関する調査（四）：台湾日日新報、No.1344、1902.10.23
- 53) 大甲地域の西岐国小の大甲藺課程教師、呂錦霞氏からの聞き取り調査による（日付：2014、2）。
- 54) 職人：大甲地域の建興社区に居住する李莊完氏（67歳、女性）、莊昭月氏（69歳、女性）二人からの聞き取り調査による（日付：2013、3）。
- 55) これが手に持ちして移動出来る灯具の一種類、構造が簡単で、石油ランプより照明効果がおう弱。劉建仁：台湾話的語源與理據、
<http://taiwanlanguage.wordpress.com/2012/09/08/>（2013年3月引用）。
- 56) 前掲54)
- 57) 陳怡芳：描繪苑裡草編、一個傳統工藝産業生態與脈絡的研究、國立藝術學院、21、2001

-
- 58) 大甲地域に居住する莊昭月氏（69歳、女性）からの聞き取り調査による（日付：2013、3）。
- 59) 前掲 54)
- 60) 大甲蓆 表の下駄：台湾日日新報、1903. 3. 18
- 61) 前掲 1)、56
- 62) このものが日本にない物なので、仮に「ヘルメット用内帽」と呼ぶ、用途は「蒸れ防止、消臭等効用である。
- 63) 前掲 1)、60
- 64) 前掲 63)
- 65) 前掲 5)、25
- 66) 前掲 1)、61
- 67) 前掲 1)、62
- 68) 前掲 66)
- 69) 前掲 65)、24
- 70) 前掲 47)、第5篇、経済篇、第6章傳統工藝與現代藝術、1264
- 71) 前掲 69)
- 72) 「ブリコラージュ」は、フランス語の “bricolage” に由来する。デジタル大辞泉の解説は、あり合わせの道具や材料で物を作ること。
- 73) 1 台尺（日尺） = $(10/33)$ 公尺 ≈ 0.303030 公尺
- 74) 董景生、王光玉：編織・獨歩各族的泰雅族織布、
<http://e-info.org.tw/topic/ethno/et05110101.htm>（2013年1月引用）。
- 75) 中研院史語所、<http://saturn.ihp.sinica.edu.tw/~wenwu/taiwan/index.htm>
（2013年1月引用）。
- 76) 淡水廳志、陳培桂、物産分類/幣屬、臺灣中央研究所、1871
番仔席 大甲番女取草織之甚精緻。一張價數十元、或一、二元不等、近漢人亦多效

之者。

- 77) 竹の分布の範囲: http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/2/2a/Bambusoideae_World_map.png (2012年9月引用)。

参考文献

- 1) 七島藺の栽培に関する研究(第 1 報)、1949
- 2) 海東札記、1958
- 3) 藺草帽蓆的世界、1993
- 4) 台湾日日新報、1902~1924
- 5) 漢文台湾日日新報、1905
- 6) 中外商業新報、1931
- 7) 台灣新民報、1937
- 8) 朝日新聞社、1944
- 9) 実験活用一坪学校園、1937
- 10) 本草圖譜、1917
- 11) 帝国之殖民(下)、1919
- 12) 大甲帽蓆專輯、1985
- 13) 工芸作物各論、1919
- 14) 原色台湾薬用植物図鑑(2)、1991
- 15) 大植物図鑑、1925 年
- 16) 往日情懷・大甲老照片展專輯、1994
- 17) 郷土の概観、1933
- 18) 台中縣 87 年度「初級藺草工藝實驗教材」・大甲藺編織藝術、1998
- 19) 沙鹿公學校：沙鹿郷土調査資料—郷土志（手寫本）、沙鹿公學校、1935

第4章
台湾「大甲藺工芸」の内発的发展論に基づいた
地域振興策

1. はじめに

新たな「大甲藺工芸」文化の振興計画と未来の展望を導出するためには、「大甲藺工芸」の古い歴史をただ単に回顧するのではなく、先人達が作った歴史を参考し、そこに潜在している積み重なった経験とその蓄積で形成されている「大甲藺工芸」文化を良く理解することが必要である。

その観点から「大甲藺工芸」の歴史を概観すると、大甲藺工芸は台湾における数少ない伝統工芸の一つであり、この伝統的工芸の復興と保存は私達の世代が担うべき使命と責任と著者は考える。

そこで、本章では、大甲地域の大甲藺工芸を核とした地域づくり活動を展開していく方策を得るために、大甲藺工芸産業の変遷と発展の歴史を概観し、その歴史の再確認・再認識を通して、明らかにすることが何よりも必要であろう。何故なら、そこから導き出されると思われる結論、すなわち大甲藺工芸の復活と振興にとって、「大甲藺工芸」文化の価値を地域生活者が理解することが必要不可欠だからと考えるからである。

台湾では、戦後50年を経て、ようやく、民主化や社会・文化の解放などの一環としての参加型まちづくりの考え方が生まれ、社会運動の一環として行われるようになった。そして、1994年には、政府の施策にこの考え方が取り入れられ、台湾の人々の意識を向上させる「社区総体营造」が提唱され実施されるようになった。1996年の初めての総統選挙後に、日本の地域振興や町づくり、村づくり運動などに相当する「社区総体营造」の考え方は、対象範囲が拡大され、台湾の歴史と伝統文化などの無形の財産を重視するとともに、地域振興やまちづくり、伝統工芸の振興などを取り込んだ「社区総体营造」という政策として実行されることになった。

この「社区総体营造」は、地域に存在する人、もの、特産、工芸など、およそ全てを貴重な財産として捉え、それらを有機的に結びつけて地域振興を計るという基本概念で施策が行われている。その施策の一つに人材育成が含まれていて、例えば、1997年には「社區規劃師(コミュニティ・プランナー(community planner/社区規劃師))」の育成制度が台湾全国各地を施行された。1980年代から台湾の工芸産業発展の先行指導部門である「国立台湾工芸研究所(現在の国立台湾工芸研究發展センター)」が地域の工芸振興を担うようになった。

一連の施策の流れの中で、中央政府の文化建設委員会が企画し、「国立台湾工芸研究發展センター」を実行した「地域工芸多角化支援プログラム(多角化社區工藝扶植計畫)」に基づき、大甲藺工芸関係者や著者が関係している朝陽科技大学設計人工物文化研究室が連携して、大甲藺工芸の振興プロジェクト「工藝文化明珠—大甲藺草編織(大甲藺工

芸—台湾の工芸文化の輝ける真珠)」を申請して、施策に採用され、「大甲藺工芸」技術の持続的な育成計画を推進している。また、かつて2008年にこの育成計画で研究助成を受けた大甲の建興社区では、そこで「大甲藺工芸」文化が文化創意産業としての可能性について本格的に検討されるようになった。

このような取り組みや活動は「大甲藺工芸」の振興を通しての地域振興に極めて重要なことと著者は考え、これらの全体像を詳細に示しながら、「大甲藺工芸」の振興を通じた地域振興策について、内発的発展論の概念を土台として考察した。

2. 台湾における内発的地域づくり「社區総体营造」

2.1 社區総体营造の起源

台湾における「地域づくり運動」は、「社區総体营造」と称されている。これは「社區(=地域社会)」を核として、そこに内在する自然、人、文化などの有形・無形の様々な資源の再発見・再認識・利活用に基づいた生活者を主体とした「地域づくり運動」である。この運動は、台湾全土に広がり様々な社会活動として展開されてきた。

2002年からは、「新故郷社區营造計画」を主な指針として掲げ、失われた伝統的生活工芸に代表される生活文化の復興を柱とした地域づくりに力が注がれている。この「新故郷社區营造計画」に伴って、台中県には「コミュニティー・プランナー (community planner・社區規劃師)」制度が誕生した。「コミュニティー・プランナー」とは、地域振興や建築分野の専門家、歴史研究者、地元の団体の幹部が、政府主催の研修プログラムに参加し、専門知識を得た上で認定される地域づくり・文化復興のアドバイザー／デザイナーであるが、その定義は必ずしも明確ではなく、当該地域が真に「内発的発展」を展開していくためには、単に、そのシステムを導入するだけでなく、当該地域ならではの役割を見出すことが求められている。

2.2 社區企画師制度の起源

台湾各地の「社區規画師」制度は1999年に台北市の都市發展局が「全民が参加する」理念に基づき、「市民の都市」の実現を目標として実践されている。この制度のスタートによって、コミュニティー・プランナーがコミュニティーと結びつき、コミュニティー活動のコンサルティングもしくは地区環境診断の専門計画設計等を自主的に提供するなど「社區総体营造」のマネージャー的な「コミュニティー・プランナー」になることを期待された。

コミュニティ・プランナーとそのチームの活動は極めて熱心だったこともあり、コミュニティ内、周辺地域、インターネット上、行政当局の各組織や各レベルの会議などでの活動で、その存在が認められ、新たな活動の契機や可能性を創り上げている。

2000年までに、42の業務チームが台北市「コミュニティ・プランナー」となり、コミュニティ住民の要望に適切に対応した。また、住民が提案した意見を有効に処理し、コミュニティの生活環境の質的向上に尽くした。

このように、コミュニティ・プランナーチームは都市・農村の発展のために永続的な活力を注入し、コミュニティ全体の構築と永続的な発展に寄与するという役割を期待されている。そして、コミュニティ・プランナー育成プログラムは台北政府に留まらずに、各地方自治体でも実施されるようになった。

以上のような流れの中で、2002年に台中県で育成したコミュニティ・プランナーのあるグループは「師匠の故郷を再建」というプログラムに、伝統の「大甲藺工芸」を再生するための企画を掲げて活動を開始した。

3. 産官学連携に基づく台湾大甲藺工芸の振興計画

「大甲藺工芸」は、台湾における数少ない伝統工芸の一つである。当該地域で制作されてきた大甲藺製品は古くから名高く、しかしながら、1960年代後半から始まった台湾における経済成長に伴う生活様式の変化や人件費の高騰などが主な要因となって競争力を失った。そのため、今日では、大甲藺を編む技術そのものが消失の危機に瀕して、早急な取り組みが必要であった。

大甲地域の「藺眼相看工作室」が、文化建設委員会が2008年に企画した「地域工芸多角化支援プログラム」に、朝陽科技大学ならびに「国立台湾工芸研究所[注1]」が連携して、大甲藺工芸の振興プロジェクト「工藝文化明珠—大甲藺草編織」の実施を申請した。本稿では、この大甲藺工芸の振興プロジェクトについて、特に産学の連携の観点からその実施経過と成果の詳細を示す。

プロジェクトの実施によって得られた知見は以下の通りである。

(1) 本プロジェクトの実施に際しては、地域の大甲藺工芸職人から参加学生への大甲藺工芸の技術講習会が行われた。このことは、作り手にとっては、工芸文化に携わるものとしての誇りを鼓舞するきっかけとなり、また、学生にとっては、実際の物づくりに参加する貴重な経験となった。(2) 学生からは、大甲藺工芸の技術を応用しながら異素材を組み合わせたクッションカバーなどの新製品が提案され、伝統工芸振興には創意工夫が重要であることが示された。(3) 大甲藺製品のデザインを行うデザイナーの

育成及び大甲藺工芸品の制作に携わる者を増加させるための方策の一つとして、本プロジェクトに対する期待が高まった。

3.1. 産官学連携に基づく台湾大甲藺工芸の振興計画のあらまし

「1. はじめに」で、すでに述べたように、台湾では1996年3月23日に、初めての総統選挙が行われた。この選挙は、台湾国民の自律へ向けた意識を覚醒させる大きなきっかけとなった。

台湾では、戦後30年を経て漸く、民主化や社会・文化の解放などの一環としての参加型まちづくりの考え方が生まれ、社会運動の一環として行われるようになった。そして、上述の総統選挙の2年前の1994年には、政府の施策にこの考え方が取り入れられ、台湾の人々の意識を向上させる「社区総体营造」が提唱され行われるようになった。この「社区総体营造」は、日本の地域振興や町づくり、村づくり運動などに相当するものであり、初の総統選挙を経て、その施策は範囲が拡大され、台湾の歴史と伝統文化などの無形の財産を重視するとともに、地域振興や町づくり、伝統工芸の振興などの様々な政策を取り込んだ「社区総体营造」が実行されることになった。

社区総体营造では、地域に存在する人、もの、特産、工芸など、およそ全てを貴重な財産として捉え、それらを有機的に結びつけて地域振興を計るという基本概念で施策が行われている。その一つが人材育成である。例えば、1997年には「社區規劃師(コミュニティ・プランナー(community planner/社区規劃師))」の育成制度が台湾全国各地を施行した。1980年代から台湾の工芸産業発展の先行指導部門である「国立台湾工芸研究所(現在の国立台湾工芸研究發展センター)」が地域の工芸振興を担った。

本項目で取り上げる「産官学連携に基づく台湾大甲藺工芸の振興」に向けた「地域工芸多角化支援プログラム」も、こうした社区総体营造施策に基づきつつ行われたものの一つである。ここでは、特に、一連のプログラムの一つである「工藝文化明珠—大甲藺草編織」を取り上げ、産学の連携の観点から実施状況についての詳細を述べる。

3.2. 「社区(総体)营造」の特徴と推進する取り組み手法

「社区(総体)营造」の特徴と推進する取り組み手法については、台湾大学の陳亮全教授が、2005年に、「都市環境デザイン会議関西ブロック」で行われた「第6回都市環境デザインセミナー『台湾参加型まちづくりと震災復興について』」の講演で、以下のように要約している。本稿で取り上げる「産官学連携に基づく台湾大甲藺工芸の振興」

も、社区総体营造施策に基づきつつ、下述のような特徴と推進の仕組みや手法を踏まえ行われたものの一つである。

◆「社区（総体）营造」の特徴：

- (1) 広い定義及び内容を持ち、生活文化に関わるもの全てが対象になる。
- (2) 自発性、自主性が重視され、それが一つの目標にもなっている。
- (3) 参加や対話、協力、学習などが必要である。
- (4) 台湾の様々な種族や少数民族が異なる地域に住んでいるので、それぞれの特徴を重視する。
- (5) 実践的にやっていくために実践的なプロセス踏まえている。
- (6) 革新的な社会運動の性格を有しており、社会正義や環境正義と公平性を重視している。

◆「社区（総体）营造」を推進する仕組み：

- (1) 社区総体营造の仕事を助成することやそれに関わる様々な制度の仕組み。
- (2) 組織作りの仕組み。
- (3) 様々な分野の人達がスムーズに仕事を進めるための調整の仕組み。
- (4) 支援する専門家が関わる仕組みや先進的な社区が新たに取組もうとする社区を支援する仕組み。
- (5) 住民間の合意形成の仕組み。[注2]

手法としては、ワークショップ、聞き取り調査など、多くを日本から学び取り入れてきたが、近年では、情報交換や宣伝手法、計画づくりなど、国民性にあった台湾独自の手法が開発され、今日、台湾各地で社区総体营造が実施されるに至っている。

3.2.1. 台湾大甲藺工芸の振興計画の背景

本計画の主体は、かつての日本統治時代に台湾の五大輸出品目の一つであった「大甲藺製品 [注3]」の振興を中心としたものである。その起源は、先住民族・平埔族の生活用具にあり、台湾における数少ないオリジナルの伝統工芸の一つである [注4]。

台中市大甲区(元は台中県大甲鎮と呼ばれていた)は、台湾の中部に位置し、台湾海峡を西に臨んで、清時代から大陸との交易で栄えた大安港に近接している。そのため、台湾中西部や南北の重要な品目の経由地にあたり、日本統治時代の大甲藺帽・蓆の盛況は、この地理的な利点が大きな要因の一つであった。

当該地域で制作された大甲藺品は古くから名高く、特に日本統治時代(1895～1945年)には、蓆や帽子が、台湾全土のみならず、日本や東南アジア、欧米などにも輸出・

販売された。フランスやアメリカで開催された万国博覧会にも出展され表彰されるほどの製品も生産された。

しかしながら、1960年代後半から始まった台湾における経済成長に伴う生活様式の変容や人件費の高騰などが主な要因となり、競争力を失い急速に衰退した。

さらに、1970年代以降に進展した産業革命の一環として、台湾も工業化を積極的に進めたこともあって、台湾はその技術力を買われて世界のOEMの工場と化し、大きく経済発展を遂げた。しかし、そのために生活様式の変化や人件費の高騰などが加速し、手編み細工を主とする大甲藺工芸産業は、国際市場での競争力を失い、台湾伝統工芸品の多くと同様、次第に人々の生活の中でフェード・アウトしたかに見えた。それに伴い、大甲藺を編む技術そのものも消失の危機に瀕しているのが現状である。

3.2.2. 地域工芸多角化支援プログラム

上述の通り、台中市大甲区（2010年12月25日台中県と台中市を合併し、元の大甲鎮は大甲区となった。）では、古くから大甲藺を利用した工芸品が作られてきたが、社会情勢の変容に伴って急速に廃れかけてしまった。

そこで、台中県では、地域に良い環境の創作を目指して、2003年初めに、「社区総体营造」に基づき、地域の人材育成のため、第1期の「社區規劃師」（「コミュニティ・プランナー（community planner/社区規劃師）」の育成課程を開始した。

また、「国立台湾工芸研究發展センター」主導の「地域工芸多角化支援プログラム」が、2005年から台湾文化建設委員会によって開始された。この計画では、「社区総体营造」の理念に基づいて、補佐の社区を振興するため、当該地域の各種の資源（人文、自然、地理など）を結び付け、地域工芸の活性化、地域工芸品の価値の向上、地域工芸に参加する人口の拡大、中小地域工芸の集積による産業としての振興、多方面に渡る地域内の地域工芸工房の生産力の向上などの6項の目標を定めて推進された。

3.3. 「工藝文化明珠—大甲藺編織」プロジェクト

3.3.1. 申請の経緯

大甲建興社区の民間企業「藺眼相看工作室」の主催者李安妮氏[注5]は、台中県のコミュニティ・プランナー（community planner/社区規劃師）の課程を2003年に修了した。そして、2008年、中央政府の文化建設委員会が企画した「地域工芸多角化支援プログラム（多角化社區工藝扶植計畫）」に、著者と李氏は朝陽科技大学設計人工物文化研究室と連携して「国立台湾工芸研究發展センター」に、大甲藺工芸の振興プロジェクト

ト「工藝文化明珠—大甲藺草編織（大甲藺工芸—台湾の工芸文化の輝ける真珠）」を申請し実施に至った。

このプロジェクトは、大学でデザインを学ぶ学生達が、当該地域の作り手達と交流しながら、内発的なものづくりに向けた自律心の涵養と産品開発とを、併せて行うことを目的としたものである。期待された点としては、（１）後進工芸団体の求めに応じて、将来の社区工芸を推進する手本になることができる、（２）社区工芸団体は地方の特色を生かした新たな観光工芸品を開発することができる、（３）社区工芸団体への参加人口が拡大し、小型社区工芸の産業の拠点になることができる、（４）社区工芸の環境改善を通じて、社区工芸の設計、製作、体験、普及などが推進できることなどが挙げられる。

大甲藺工芸が、人々の記憶から薄れつつあったことが、逆に、この業界に携わる人々を奮起させ、活性化への努力を促した面もある。それぞれの地域が自らの特色を見出し、地域の住民が地域振興に当たるという「社区総体营造」の観点からみれば、台湾少数のオリジナルな工芸の一つを有する大甲地域の大甲藺工芸品と大甲藺工芸職人達は、間違いなくこの地域の最大の財産、宝と言えよう。

3.3.2. プロジェクト概要

大甲藺工芸の振興計画の一つである「工藝文化明珠—大甲藺草編織」プロジェクトは、図1に示したように、地域の住民たちと職人たちを対象に、国立台湾工芸研究発展センターと朝陽科技大学、藺眼相看工作室が連携しながら「まちづくり」の進め方や「基礎デザイン」など大甲藺工芸に関わる支援と、それを支える「人材育成」などの支援を行ったものである。



図1 まちづくり概念の講義



図2 大甲藺工芸作品発表会

(1) 支援型まちづくり：

国立台湾工芸研究発展センターと朝陽科技大学が担当して、地域住民参加型を地域住民に、「まちづくり」は地域の住民が参加し、自ら行うという基本概念を理解してもらうため、講習会や討論会などを行った（図1）（図2）。

(2) 基礎デザイン：

大甲藺製品の発表会などを実施してお互いに認識を共有した。具体的なプロジェクトの流れは図3に示した。

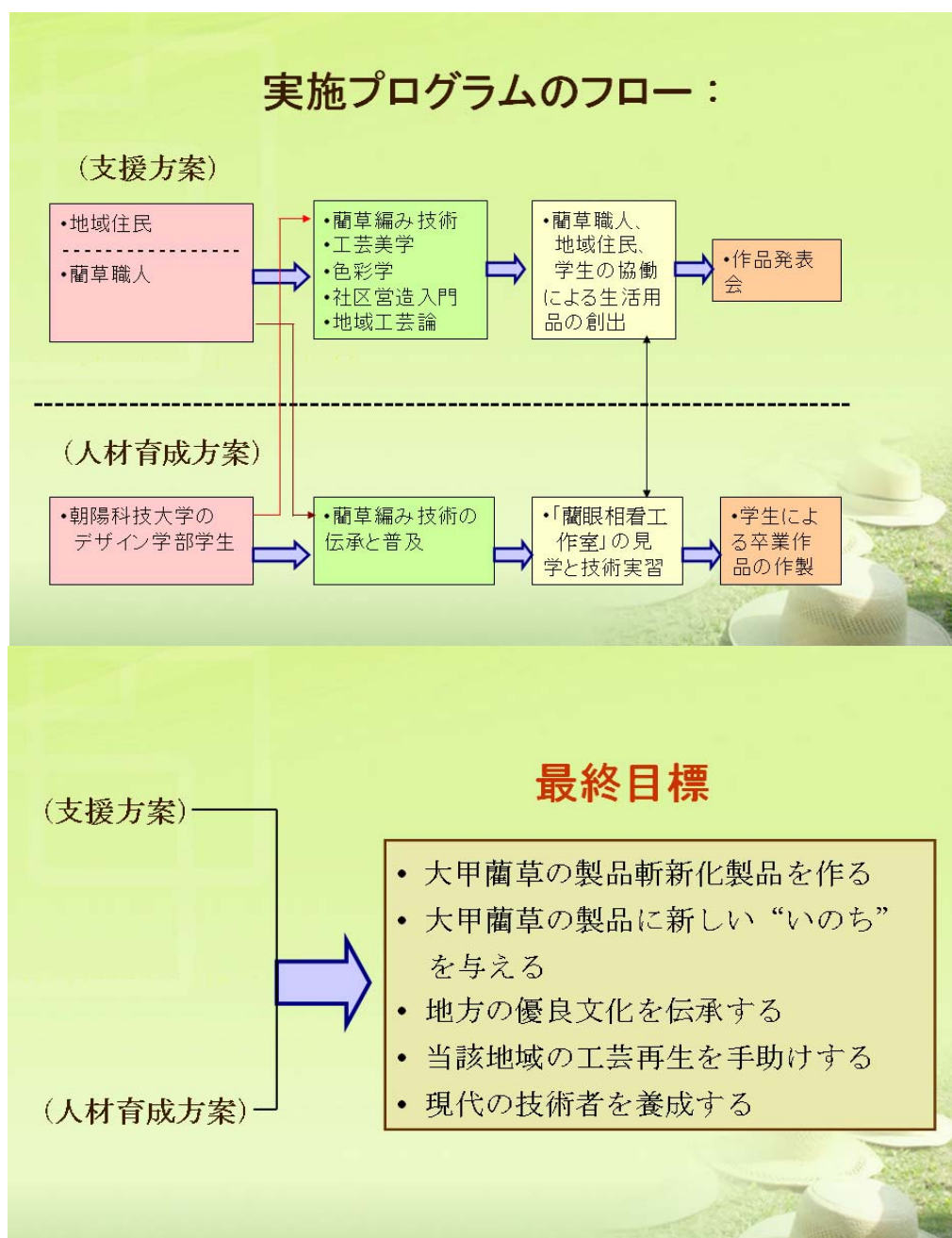


図3 地域の支援と人材育成実施図

(3) デザイン開発：

また、大甲藺生活用品のデザインに関する部分は、朝陽科技大学の視覚伝達設計（ビジュアルコミュニケーション・デザイン）学部の学生が、職人達とアイデアを出し合い、時代のニーズに応えられる実用品を生み出す基礎的なデザインなどを検討し、かつ両者が共同で作り出した。

(4) 人材育成：

人材育成の面では、建興地区の大甲藺職人たちから大甲藺工芸の技術を伝承する場所を、大学と「藺眼相看工作室」を二ヶ所に設けた（図4）（図5）。



図4 朝陽科技大学において、職人達が大甲藺編技術を伝授している様子



図5 藺眼相看工作室において、職人達が大甲藺編技術を伝授している様子

学生達は基礎的な大甲藺工芸品を編む技術を習得して、習得した技術を住民や職人達と共に、現代の生活の中で実用できる大甲藺生活用品を考案した（図6）。更には、こ

これらの活動を通して、大甲藺工芸職人が独自で現代生活にマッチした大甲藺工芸品を考案できる力を養った。



図6 職人達と学生達が藺眼相看工作室で大甲藺製品の草案を討論する様子

3.4. プロジェクトの成果と問題点

プロジェクト実施過程で、事業に参加した当該地域の人々や産学連携で参加した朝陽科技大学デザイン学部の学生達のプロジェクト開始当初と終了後の対応やその成果を、次に考察する。

3.4.1. まちづくりに関わるプロジェクトの効果について

プロジェクト開始当初、大甲地域の住民や大甲藺職人達は、「社区総体营造」の概要についてはある程度の理解があったが、「社区総体营造」では地域の住民が参加して、自らがまちづくり運動を行うという基本概念についての了解はあまりなく、運動自体への参加も極めて受動的であった。また、参加した大甲藺職人達の考えは、その技術で己の生計を維持することこそ技能の道とっていた。さらに、産官学連携に参加した朝陽科技大学デザイン学部の多くの学生達も、地域工芸である大甲藺についての知識や編むための基礎技術は身に付けておらず、互いにデザイン面でどのようなアドバイスや貢献が出来るか半信半疑で、参加に消極的であった。

プロジェクトの推進の中で、国立台湾工芸研究発展センターは、参加住民に対して、「社区総体营造」概念の説明会を繰り返し行った。このことにより、参加した住民は住民参加型のまちづくりを次第に理解して行った。

大甲藺編み職人も「社区総体营造」への理解が進み、学生達への大甲藺編み技術の授受や製品デザインのアドバイスの授受を通じて、大甲藺職人達は新しい知識を得ることが重要だと考えるようになった。そうした変化が大甲藺工芸の振興に繋がったと言える。その上、大甲藺職人達は、自分自身が技術の師匠あるいは文化の伝承人として重要視さ

れていることを自覚し、再び熱意を取り戻し、また工芸に携わる者としての誇りを持つようになつたと思われる。

また、参加した学生達は大甲藺編みという特殊技術の一端を伝授されることによって、大甲藺工芸の現状打開のために、現代生活用品として社会に受け入れられるようなデザインを取り込んだ作品を真剣に考えるようになった。

まちづくりの基本に大甲藺工芸品を据えたことで、地域住民は材料となる大甲藺栽培や製品販売など大甲藺工芸品に関わる人口が増加しつつある。「社区総体营造」のまちづくりの基本は住民参加、人づくりにあるが、このプロジェクトを通じて、住民参加意識が高まり、大甲藺工芸品のみならず、様々な社会運動の礎となることが期待される。また、大甲藺職人の誇りや学生達が得た技術や「社区総体营造」の概念の実践は、学生達が台湾全土で展開されている「社区総体营造」の担い手となりうる資質を得たと思われる、「まちづくりは人づくり」の基本概念が実現できたと言えよう。

3.4.2. デザインに関わる効果について

2008年4月から11月までの8ヶ月の実施期間に、地域住民達や職人達と朝科大の学生達が協力を通じて、数々の生活用品が生み出された。その作品の数々を次に示す。

なお、この間の活動を通じて、学生達は卒業に当たっての作品製作を実地で経験するという貴重な体験をすることが出来た。また、まちづくりや技術支援活動を経験した学生達は、将来その経験を生かして台湾全土で展開されている「社区総体营造」の新たな担い手となり得る人材として期待されている。



図7 大甲藺と竹炭のまくら



図8 カバーは大甲藺とサラサを組み合わせ

(1) 大甲藺竹炭のまくら

大甲藺の材質上の欠点は、水を吸収するとカビが生え易いことである。その欠点を補

うために、竹炭が持つ水分吸収特性を利用し、大甲藺の編みものと結合させて、健康と持続可能性「ロハス (LOHAS)」の概念に合致した製品を制作した (図7、図8)。

(2) 大甲藺スリッパ

大甲藺製品は、台湾人の記憶の中に、大甲藺の素朴な清々しさと香りを残している。この作品は大甲藺天然の素材触感を使用者に伝え、昔の自然で純真なノスタルジーを思い出させることが出来る製品を目指して製作された (図9)。



図9 大甲藺細工のスリッパ (左) 網と平編二つの模様 (中) 網の模様 (右) 平編の模様

(3) 朝陽科技大学学生作品

次に示すのは朝陽科技大学デザイン学部の学生達が大甲藺の持つ素材特性を表現するために考案した作品の数々である。それぞれの作品は未熟であるが、伝統工芸品の分野でも、絶え間ない創意工夫は、より良い製品を生み出す基本と言えよう。これは、地域工芸品におけるデザインが果たす役割が極めて高いことを示している。また、伝統工芸品の持続性維持には欠かすことの出来ない側面と考えられる。

(a) クラゲ型の大甲藺電気スタンド

クラゲの光を通す特徴を表現するため、大甲藺素材を使った緑の設計 (GREEN DESIGN) の概念を出した作品である (図10)。



図10 クラゲ形状の大甲藺編みもの (中) 電球をつけた様子 (右) 大甲藺電気スタンド

(b) アクセサリーと雑貨

様々なアクセサリー製品、イヤリング、ブレスレット、ヘアバンド、生活小物を大甲藺編みで作った作品群を図11、図12に示した。



図11 アクセサリー・小物類 (左) イヤリング (中) ブレスレット (右) ウインドチャイム



図12 生活小物 (左) コースター (中) 腕時計のベルト・ヘアバンド (右) ヘアバンド

このような若い人の新たな発想での、新たな製品作りも伝統工芸品の維持には欠かせない一つであろう。したがって、当該産業の振興と発展維持には若手の担い手の参加が重要で、そのための技術者育成がシステムも重要である。

3.5. プロジェクトの問題点等についての考察

以上のように、プロジェクトの成果が上がった一方で、問題点も多々残されている。まず、当該地域の住民は、今日、主に農漁業やレジャー産業に従事していて、まちづくりに対する考え方が比較的保守的である。大部分の住民にとっては、大甲藺工芸は地方の特産物であり、協力する姿勢は見られるものの、現段階では、「社区総体营造」へ全面的に参加することに対して、比較的冷ややかで、かつ、住民の行動は受動的に留まっている。また、地域の発展ためには、都市と農村の地域格差の解消が必要であるが、その意識は残念ながら未熟と言える。

これらの問題点の解消のためには、「社区総体营造」を根気良く継続し、地域住民の

意識の改善を進めて行く必要があり、政府や地方団体のさらなる努力が必要であると考ええる。

技術の伝承に関して言えば、現在の大甲藺職人達は最も若い人でも55歳以上であり、大甲藺を編む技術を早急に次の世代に受け継いでいく必要がある。人材育成を含めた技術伝承のシステムをどのように構築していくのか、産官学連携の重要性と国立台湾工芸研究発展センターを含む政府機関の果たす役割は非常に重要であることを指摘しておきたい。

更に、産業としての大甲藺工芸を確立するための問題点として、現状では大甲藺工芸品は大部分が小規模経営者か、あるいは個人的な工房で作られ、販売も独自で行われている。このため、販売のネットワークが未完成で、ほとんどの製品はオーダーメイド販売となっている。地域産業として興隆していくために、これら小規模経営の経営者が互いに結び付き、新たな発想、デザインを組み込んだ製品の規格化が必要である。そのためには政府の「社区総体营造」施策の継続による資金援助も必要と考えられよう。

4. 台湾大甲藺工芸の振興に関する調査

4.1 研究目的と方法

本調査では、「大甲藺工芸」の現状、未来の発展に関する当該地域の人々の要望と予想を把握するため、アンケート調査と聞き取り調査を行った。得られた調査結果を考察し、台湾大甲藺工芸を振興に当たっての問題点を明らかにする。

4.2. 調査及び解析結果と考察

本調査の配布数は150部、有効回答数は140部であった。アンケートの対象が男女比は36%:64%（図13）であった。また、年齢に40世代が28%ともっとも多く、20代、30代、50代がそれぞれ17%であった（図14）。



図13 得られたアンケートの性別比率

アンケート調査に参加した人々の地域は、大甲地域の住民が 59%、苑裡地域が 14%であった（図 15）。また、職業は会社員が 30%、農林水産業は 22%であった（図 16）。

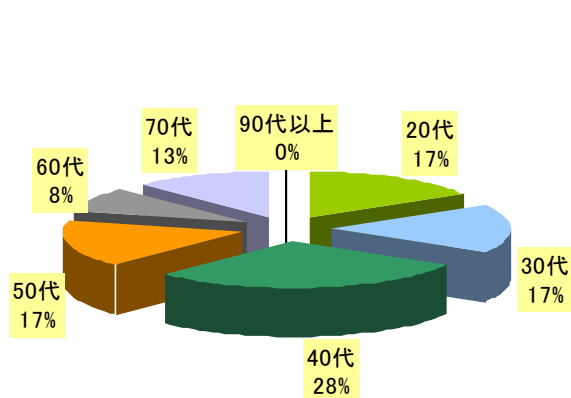


図 14 得られたアンケートの世代別比率

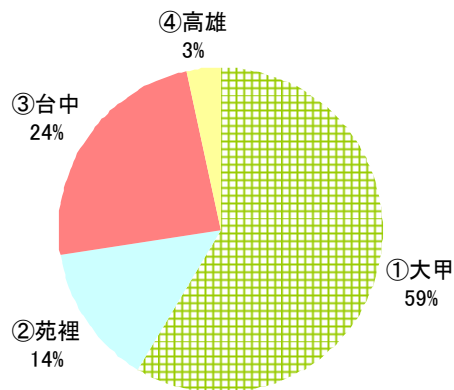


図 15 得られたアンケートの地域別比率

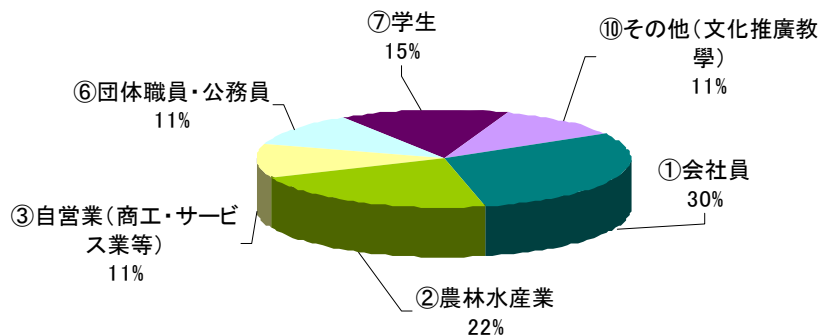


図 16 得られたアンケートの職業別比率

4.2.1. 大甲藺工芸品認知度についてのアンケート

まず、「大甲藺工芸品」の認知度についてのアンケートでは、「大甲藺工芸品を聞いたことあるかどうか?」という問いに、よく知っている人は 72%であった。知っている人は 28%であった（図 17）。

この結果は「大甲藺工芸品」を地域のほとんどの人が知っているとの事実を示し、これに関する今後の取り組みに当たっては割合スムーズに地域の人々の協力を得られる可能性を示しているのではないかと期待したい。

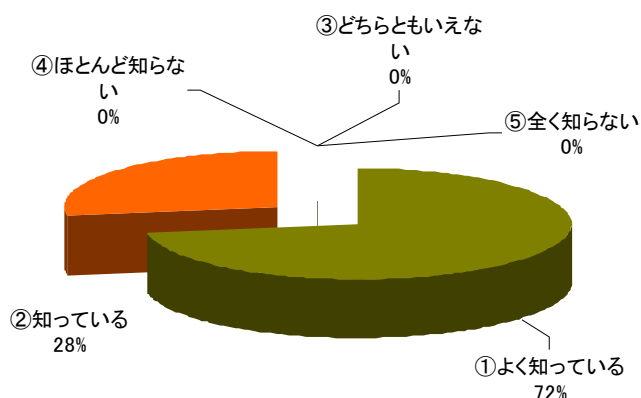


図 17 大甲藺工芸品の認知度

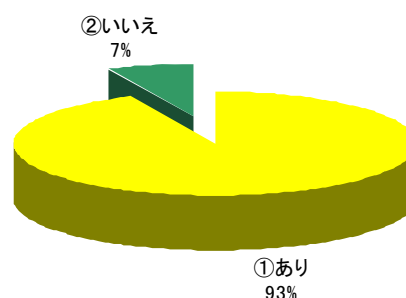


図 18 大甲藺工芸品の使用の有無

4.2.2. 大甲藺工芸品の使用の有無についてのアンケート

次に、「大甲藺工芸品を使った経験があるかどうか？」の調査では、経験有りが93%、経験無しが7%であった（図18）。このアンケート結果は、「大甲藺工芸品」の認知度が90%以上と高く、「大甲藺工芸品」は、まさに当該地域の代表的なものであると言っても差し支えないと言える。また、現代生活の中で「大甲藺工芸品」が細々ながら息づいていることが伺える。

これらも、「大甲藺工芸品」の高い認知度と同様、振興策を考える上で、大いに役立つと考えられた。

4.2.3. 大甲藺工芸品で代表的な製品の認知度についてのアンケート

現在、生産されている大甲藺製品は、①帽子（男・女）②蓆③丸座布団④紙入（財布）⑤下駄表⑥名刺入れ⑦インソール⑧スリッパ⑨カバン⑩携帯ケース⑪ヘルメット⑫面紙盒⑬動物飾り⑭パソコンカバー⑮芸術製品などである。これらに対する認知度を聞いた結果、図19に示したとおりで、帽子と蓆はアンケートに答えた全員が知っていた。また、その他の紙入（財布）、下駄表、名刺入れ、インソール、スリッパ、カバンなどの小物類も60%以上の認知度であった。

現代の生活の中で、「大甲藺工芸品」の存在は薄れつつあると言われていたが、「社区総体营造」施策が現代社会に受け入れられつつあるとの証左なのかもしれない。

著者はこれだけの認知度があるということは驚きであり、当該産業の振興を図る上で、勇気づけられる結果ではないかと思われた。

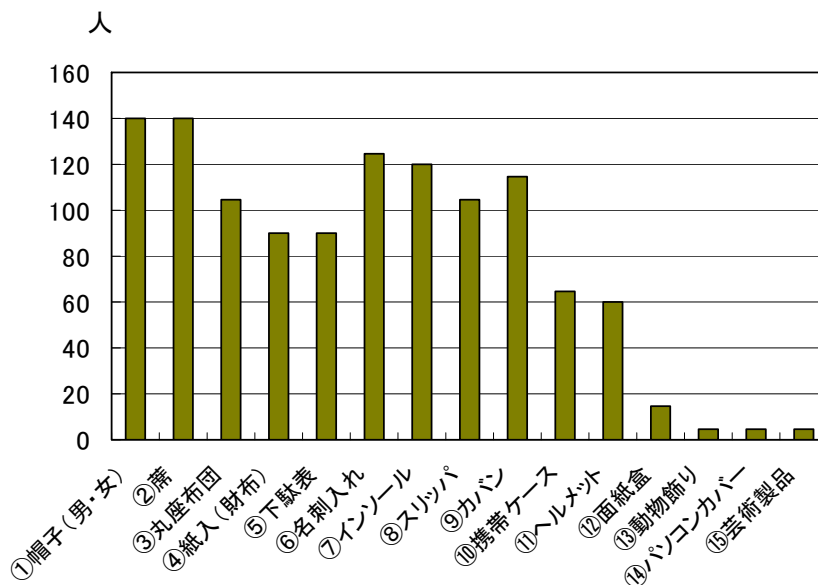


図19 様々な大甲藺製品の認識度(人数)

4.3. 地域競争の意識—大甲藺、苑裡藺名の争い問題

大甲藺、苑裡藺の名称の争いは、記録によると1935年の「台湾始政40周年記念博覧会」で始まった。それから名称争いが続いている。自分達に特有な工芸に地名を付けるのは普通で、両地域による名称争いは致し方がないことでもある。

著者が調べた日本統治時代を記載する関連産業の文献では、ほとんどが「大甲藺」と記されていた。

また、これらの地域で、大甲藺製品の編み技術を比べると、苑里が他の地域より優れた細工をすると強調している声も聞こえてくる。

これについても著者が「台湾総督府文書」を調べた結果、仮に帽子の合格率の高低で編み技術の優劣を判断することが出来るなら、通霄地域の女性の編む技術は各地に比べて合格率が高いことが判明した。このことから、著者は狭い範囲に絞って優劣を比較することは避け、大甲藺産地それぞれの地域の製品の完璧度を賞賛したいと思う。

なお、著者が実施した住民アンケートの結果でも、意外にも、名称について拘りを持っているような回答は無かったことを付け加えておくことにする(図20)。また、「大甲藺」が「苑裡藺」と呼ばれていることに対する心持ちについてのアンケートでは、「別にどちらともいえない」人は59%を占めているし、「怒る」という回答は皆無であった(図21)。

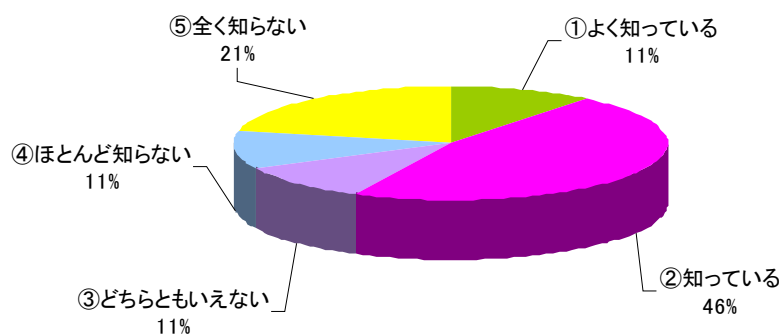


図20 大甲地域で、「大甲藪」は「苑裡藪」と呼ばれていることの認知度

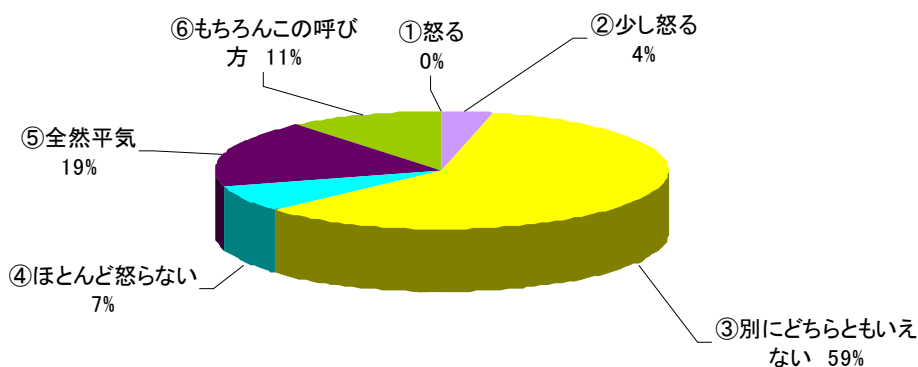


図21 大甲地域の「大甲藪」が「苑裡藪」と呼ばれていることへの感情

同じような名称争いで、例を挙げると、世界有名な「パナマ帽子」の産地はパナマではなく、エクアドルである。しかも、エクアドルの人々は自国で生産した帽を「エクアドル帽子」と言うことは無いし、名称争いも存在していない。

「大甲藪工芸」が、現在抱えているもっとも切実な問題は、大甲、苑里両地域の人々にどのようにして協力してもらい、日本統治時代に主要な産業として支えた技術を地域と共に、伝承し、振興するかである。

以前の歴史研究は、単なる歴史的事実を論述し、発展させる歴史観であった。しかし、地方の特色である伝統工芸を扱う歴史研究は、伝統工芸を周辺地域の共有の資産であり、共有の歴史的記憶だったという歴史観に立つて行う必要があると思われる。

現在、台湾政府が取り組んでいる「社区総体营造」は、地域の産業をいかに振興していくかに主眼を置いた施策であり、まさしく「内発的發展論」に立脚したものであると言える。その施策に取り上げられている「大甲藪工芸」産業の振興について、この伝統産業の持つ技

術の伝承のみならず、地域の人々による地域が有する様々な資源の積極的な利活用を押し進めることこそが重要であろう。

4.4. 地域住民の「内発的発展」の概念についての認識

地域の「内発的発展」とは、地域の住民自らが主体となって、地域固有の資源蓄積の意味と活かし方を問い直しながら、地域が進んでいく未来展望と価値観を作り出していく発展のあり方である。それについて、地域住民がどの程度認識しているかを明らかにする必要があると考えられた。そこで、当地域では「社区総体营造」施策の下で「大甲藺工芸」の振興計画案が作られ、実施されているが、その経緯について、アンケートの調査を実施して、「大甲藺工芸の持続へ向けた人々の関心を高める」ために、「社区総体营造」施策や「大甲藺工芸」の振興計画等への住民の意識を明らかにしようとした。

それらの結果と考察を以下に記す。

4.4.1. 「社区総体营造」と「大甲藺工芸」の振興計画案についての認知度

現在、政府と地域の関係機関が取り組んでいる「社区総体营造」と「大甲藺工芸」の振興計画案を知っているかどうかのアンケート調査結果で、「よく知っている」と「知っている」を合わせると100名で、回答に占める割合は約70%に当たり、これらは地域の人々によく知られていると判断される（図22）。

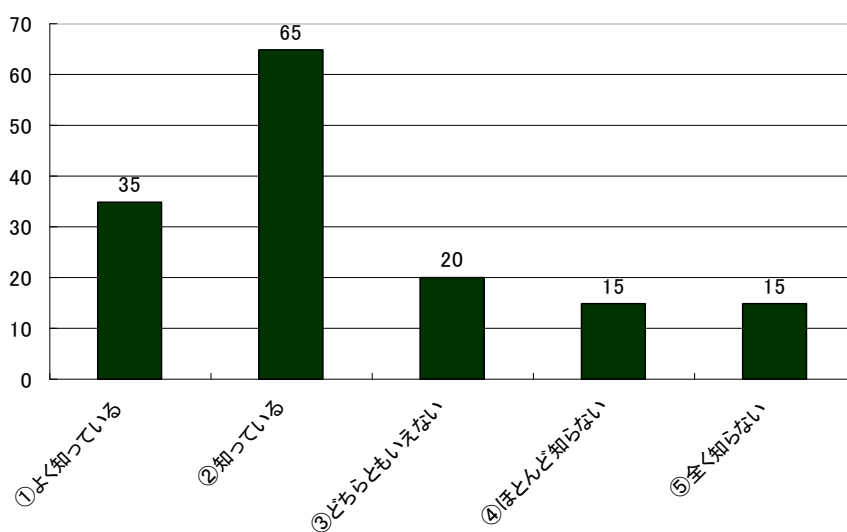


図22 「社区総体营造」と「大甲藺工芸」の認知度（人数）

4.4.2. 「大甲藺工芸」の振興計画の立案に参加した経験の有無

「大甲藺工芸」の振興計画の立案に参加した経験の有無についてのアンケートでは、40%の人が参加した経験があると答えた（図23）。

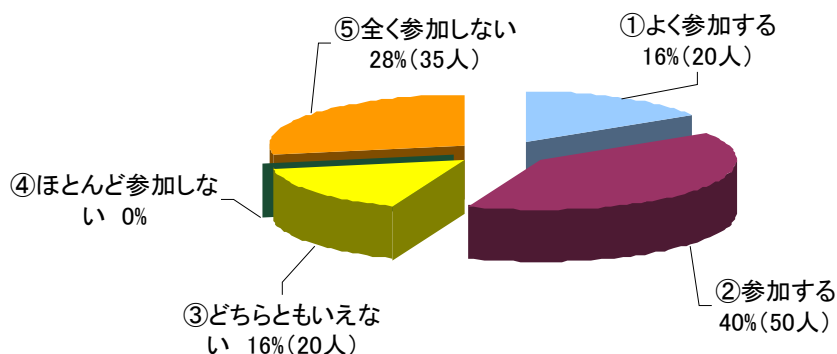


図23 「大甲藺工芸」の振興計画立案への参加の有無

4.4.3. 「社区總体营造」と「大甲藺工芸」の振興についての意識

「社区總体营造」と「大甲藺工芸」の振興をどのように思うかのアンケートでは、64%が「①とても意義ある活動だと思う」を思うという結果であった。また、否定的な意見は皆無であった（図24）。

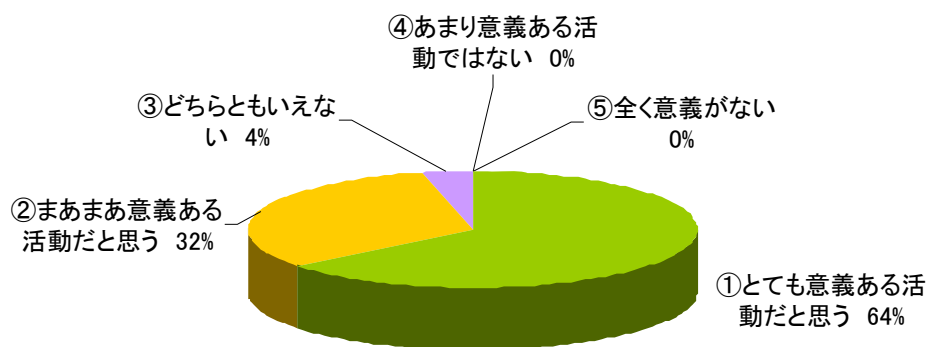


図24 「社区總体营造」と「大甲藺工芸」の振興についての意識調査

4.4.4. 「大甲藺工芸」の振興を継続について

「大甲藺工芸」の振興は今後も継続して取り組むべきとの回答が、97%とほとんど全ての人が計画の推進に賛成であると判断された。（図25）

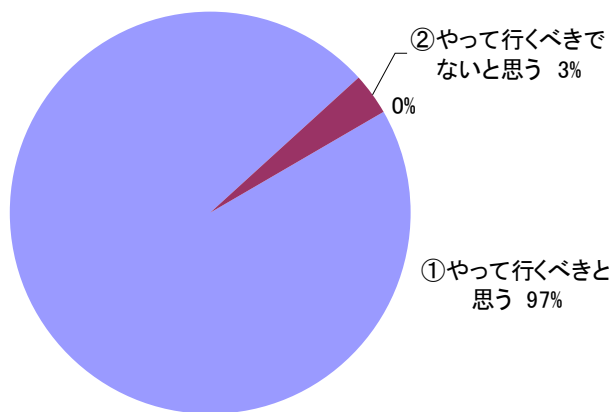


図 25 「大甲藺工芸」の振興を継続について

4.4.5. 「大甲藺工芸」の振興計画実施への参加について

「大甲藺工芸」の振興計画実施に参加する意向かどうかの意向を聞いたアンケートによると、①よく参加すると②参加する人、を合計すると 85%を占めて、地域住民は当該産業の振興計画に積極的に参加する意志があることが明らかとなった（図 26）。

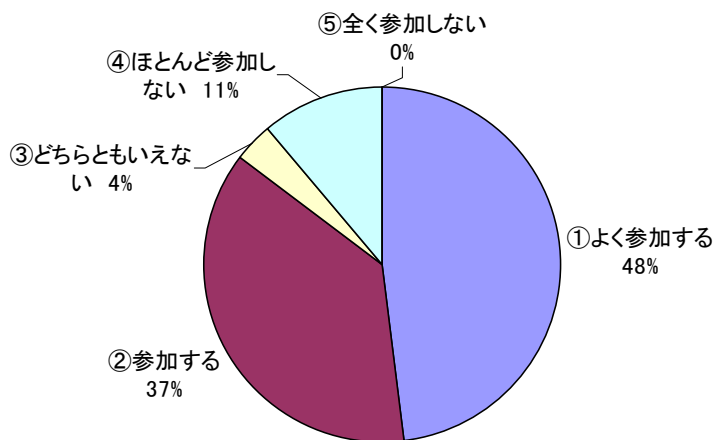


図 26 「大甲藺工芸」の振興計画実施への参加意志

以上のようなアンケート調査結果は、当該地域の人々が「大甲藺工芸」を良く認識し、関心が非常に高いことが伺えた。また、当該産業の振興の必要性についても強い関心を持ち、振興計画に参加したい意志が示された。これらの知見に基づき、大甲藺工芸の持続的振興に向けて、人々の関心をより一層高めていく必要があると考えられた。

著者はこれまでの一連の調査・研究結果や考察から、こうした住民意識を尊重しながら、大甲藺工芸の振興策については、大甲地域住民の主体性、自発性、自律性の意識を

取り込んで推進して行くべきと考えており、1990年代からの「社区総体营造」政策の支援の下で、大甲藺工芸の振興に大いに関心と期待を持っている。

このアンケート調査結果で、多くの住民が大甲藺工芸の振興策への参加意識が示された。この意識と「内発的発展」の内観精神「目標において人類共通であり、目標達成への経路と、その目標を実現することの出来る社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。また、そこへ至る経路と、目標を実現する社会の姿と、人々の暮らしの流儀とは、それぞれの地域の人々および集団が、固有の自然生態系に適合し、文化遺産（伝統）に基づいて、外来の知恵・技術・制度などを参照しつつ、自律的に創出する」[注6]とは、ある程度を重ねると言える。この意識の合致は、まさに「内発的発展」の最大資源であると著者は考える。

4.5. 大甲藺工芸振興の具体的意見の集約

4.4の結果や考察で明らかにしたように、伝統工芸の振興には、技術の伝承のみならず、地域の人々による、地域が有する様々な資源の積極的な利活用こそが重要である。その基本となる住民の意識は「内発的展開」の重要要素である住民参加を許容していることが明らかとなった。そこで、大甲藺工芸に関することや振興計画について地域の人々の具体的な意見などもアンケート調査を行った。それらの結果を以下に示す。

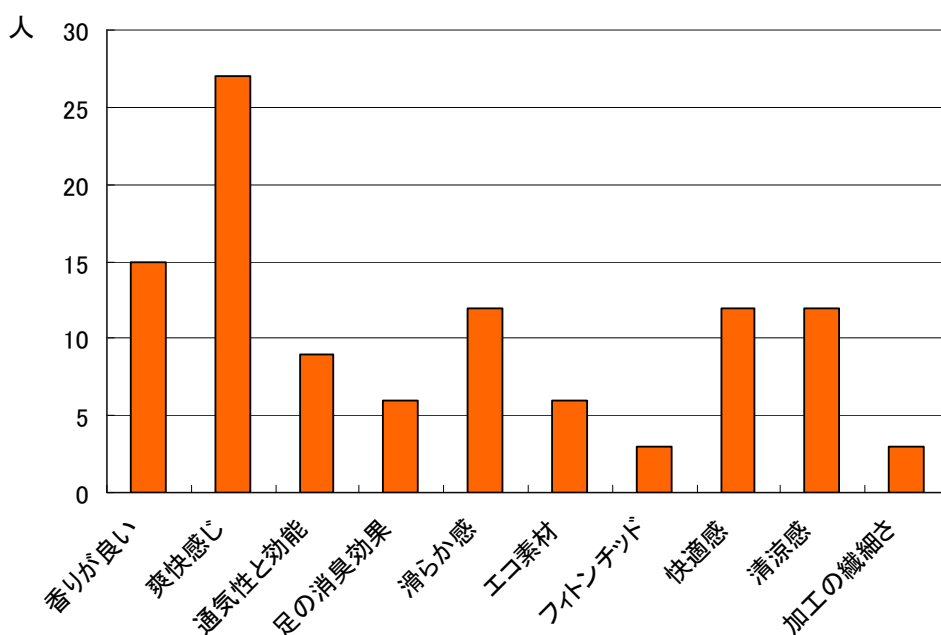


図27 大甲藺工芸品を使用した経験からの評価

4.5.1. 大甲藺工芸品の使用評価について

これまでのアンケート調査の質問に加えて、一般消費者が大甲藺工芸品を使った経験からの感想をアンケートした。その結果は図 27 に示した。

これによると、大甲藺工芸品の使用感は、爽快感や香りの良さ、滑らか感、快適、清涼感などが指示されている。これらを全面に出した製品開発、デザインが振興策としては重要視していく必要があると思われる。

4.5.2. 大甲藺工芸品を具体的な振興策について

また、具体的な振興策についての回答者の意見を、表 1 に、24 項目に整理して示した。

表 1 アンケートの調査内容

1. 政府支援のマーケティング政策が必要	2. 政府からの振興政策支援
3. 販売市場のマーケティング	4. 産官学の連結が必要である
5. マーケティングの戦略の確立	6. 国際的な工芸交流活動
7. デザイナーは大甲藺素材の特性把握	8. 小学校で大甲藺工芸の教育を行うべきである
9. デザイナーは編む技術を理解すること	10. トレーニングのマンパワーポリシー
11. 製造可能な製品のデザイン	12. 職人の養成計画
13. 製品のトレードマークをデザインする	14. 外国人配偶者のトレーニング課程
15. 文化商品に関するデザイン	16. 大甲藺工芸継承の問題点を探る
17. ファッション性、若者向け、デザイン性に富む製品の開発	18. 持続的な地方団体の支援と協力
19. 新しい製品の開発	20. 大甲藺製品は工芸品を認定する提案
21. 大甲藺素材の特性の開発	22. 地方の団結する
23. 大甲藺弱点の克服	24. 経済的な視野から工芸的視野への転換
25. 大甲藺栽培の奨励政策	26. 地方工房の設立
27. 大学、研究機構を連結する	28. 地方工芸館の設立の政策導出

本研究では表 1 のデータを利用して、K J 法による分析を行った。その結果、具体的な研究テーマ、指針について、導き出すことができた (図 28)。

これらの具体的な提案は大甲地域の大甲藺の振興を目指す上で大いに参考になると

考えられた（表2）。

表2 大甲地域の住民の見解の提案

◆ 産官学の連結をするべきである	◆ 政府からの振興政策支援
◆ 大甲藺工芸継承の問題点を探る	◆ 大甲藺栽培の奨励政策
◆ 職人の養成計	◆ 地域の人々が団結するべきである
◆ トレーニング課程を整備するべきである	◆ 地域の人々が大甲藺工芸エリアをするべきである
◆ 産官学の連結をするべきである	◆ 地域の人々が大甲藺工芸は経済的な視野から工芸的な視野への転換
◆ マーケティングの戦略が産官の連結をするべきである	◆ 地域の人々が大甲藺製品を工芸品として認定を提案するべきである
◆ デザイナーは大甲藺工芸の材や技術を知るべきである	◆ 製品のCIデザインする
◆ 新しいデザインを創出するべきである	◆ 大甲藺科学的な研究をするべきである
◆ 国際的な工芸交流活動	

大甲藺工芸振興に対する大甲地域の住民の意見は、KJ法による分析結果から、図28に示したように、五つにグループに分けることができた。

第1グループは、大甲藺工芸の振興に地域が取り組むべきことや地域住民が大甲藺工芸への意識改革など、地域独自の取り組みへの意見を集約したものである。その中で、「当該地域を大甲藺工芸エリに認定するべきである」は、表1の「26. 地方工房の設立」と「28. 地方工芸館の設立の政策導出」の両意見を合体したものである。この点について、著者は以下のように提案する。

「地方工房の設立」について、地方政府は当該地域の住民達に「大甲藺工房」の設立奨励政策を行うのが望ましい。それによって、工房それぞれは大甲藺工芸の独自な特徴を有する工房になることが可能となる。

具体的には、その奨励策で、地方政府機関が保有していて、現在は使われていない施設や土地を提供してもらって工房を作る。そこに大甲藺職人を集めて、昔の仕事場ように職人達と一緒に大甲藺製品を作るようなり場所を再現する。現在、苑里地域で設立され稼働している「大甲藺生活文化館」がある。これを大甲地域でも早急に実現する必要がある。

第2グループは、マーケティングに関する意見の集約である。現在の大甲工芸マーケティングに関する最大の問題点は、現存する生産部門はNPO組織が多いため、マーケテ

キングの戦略は極めて脆弱であるため、政府、あるいは専門機関の支援が是非とも必要である。

第3グループは、「大甲藺の科学的な研究を推進する」や「国際的な工芸交流活動」についての意見の集約である。財政基盤や研究基盤が脆弱な伝統工芸産業では「産官学の連携」は極めて重要であり、アンケートにみられた住民の意見は妥当なものと思われる。特に、大甲藺の植物学的な研究は「バイオテクノロジー」の研究に関連する点が多く、大学の農業研究所あるいは政府の農業研究機構が連携して研究を進めて、支援する必要があると思われる。

第4グループは、「大甲藺工芸品のデザイン」に関する意見の集約である。確かに、現状では大甲藺製品のデザイナーはいない状況である。これを打破し、現代生活にマッチした製品作りは当該産業の振興には欠かせない条件である。このためには、まずは大学のデザイン学部との連携が重要である。

大甲藺工芸品に触れることによって、興味を持ったデザイン学部生の中には、卒業後に大甲藺製品のデザイナーになる意向を持つ学生が出現する可能性であると考えられる。

第5グループは、「トレーニング課程」に関する意見の集約である。職人の高齢化は大甲藺工芸の危機の一つである。大甲藺工芸技術の伝承に関する課題は解決を急がれる問題である。この危機を解決するには、様々な人々を対象とした大甲藺編み技術を完全に習得できるトレーニングセンターの整備や地元小学校で大甲藺工芸品に関する学習機会の充実などが必要と思われる。

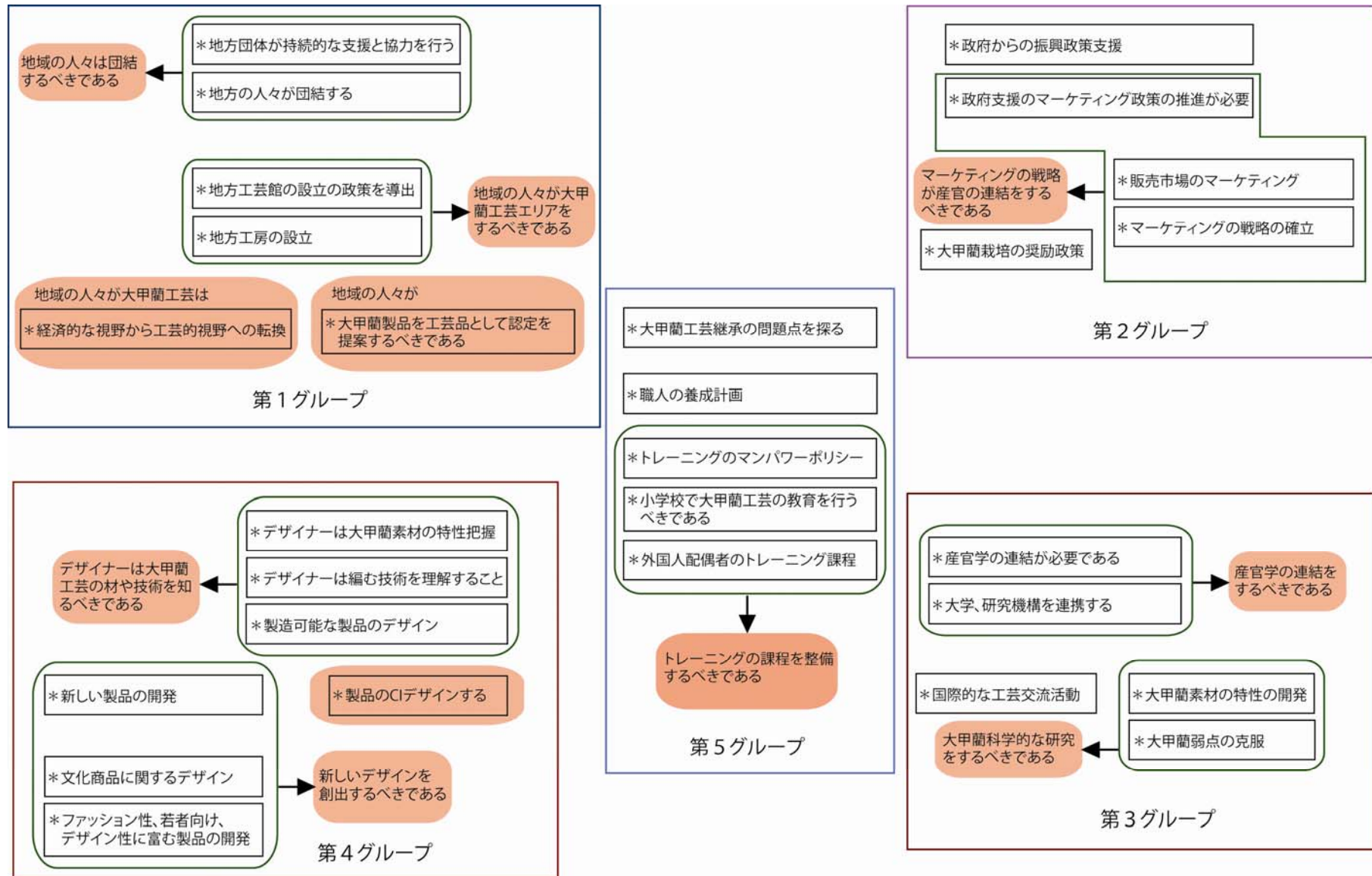


図 28 地域の人々の見解はKJ法による大甲蘭工芸振興に対する地域住民のアンケート調査の解析結果

5. おわりに

本章は、「大甲藺工芸」の振興を図るために、地域住民の「大甲藺工芸」への認識度や実施方法などをアンケート調査した。その結果を基にして考察した結果、以下の知見が得られた。

(1) 「工藝文化明珠—大甲藺編織」プロジェクトの実施に際しては、最初に、地域の「大甲藺工芸」の職人から参加学生への大甲藺工芸の技術講習会が行われた。このことは、大甲藺工芸の貴重な制作技術の記録できたと共に、学生にとっては、実際の「ものづくり」に参加する貴重な経験となった。

(a) 学生からは、大甲藺工芸の技術に基づき、ランプシェード、ブレスレット等の新製品や異素材を組み合わせたクッションカバーなどが提案された。地域の職人にとっては、今日の生活に適合した新製品のデザイン提案として好意的に受け取られた。

(b) 大甲藺製品のデザインを行うデザイナーの育成、ならびに、大甲藺工芸品の制作に携わる者を増加させるための方策の一つとして期待する声が高くあげられた。このように、「地域工芸多角化支援プログラム（多角化社區工藝扶持計畫）」によって、産学の連携による大甲藺産業の振興に関して一定の成果があげられたと言えよう。しかしながら、その振興の動きはまだ緒に就いたばかりである。

(2) 近年、台湾政府は、特色ある地域産業の振興を促進するため、積極的に文化祭などの開催を推奨している。しかしながら、これまでの方針に問題点がないわけではない。例えば、そうした方針が必ずしも生活者が主体となって十分に検討されてきたわけではない。今後、さらに掘り下げて議論していくことが必要であろう。

(3) 大甲藺工芸の振興に関する提案

大甲藺工芸には、今後、地道に工芸技術を改良していくことが出来るならば、振興・発展への道筋が存在するはずである。その品質は、造型技術を磨き上げることによって、一層高めることが出来るだろう。あるいは、材料として、大甲藺だけでなく、他の素材を組み合わせたデザインも可能かもしれない。また、何よりもまず、当該地域の生活者自身が、それらを自らの生活で活用していかななくてはならない。

(4) 台湾における内発的地域づくり「社區総体營造」に関する認知度

アンケート調査の結果によると、回答した住民達は「社區総体營造」に対して参加するという極めて高い意思を持っていた。そして、「大甲藺工芸」を振興する計画案やそれに関わるイベントなどは持続的に行うべきだとの意見が多かった。また、この伝統工芸に再注目して、その振興には地域住民の多くが関わりを持つべきとの使命があるという意志が感じられた。

この調査結果は、地域住民が自律的、主体的に取り組む考え・意思は内発的な行動を認めると実証である。また、今回の調査では著者の予想外の結果が示された。それは、「大甲藺」と「苑裡藺」の名称についての争いに、大甲地域の人々は大きな関心を示さなかったことである。また、苑裡地域の住民が「大甲藺」が「苑裡藺」と呼ぶことや、「大甲藺工芸」を「苑裡藺工芸」と主張することにも無関心であった。

この結果からは、当該地域の人々が「大甲藺工芸」を故郷に密着した愛着ではなく、大甲蓆、帽子工芸品が地域にとって掛け替えのない文化財であるとの認識を示していると思われる。大甲地域にとってもっとも大事なことは、名称争いではなく、「大甲藺工芸」の伝承ことであることの現れである。

著者も個人的にはその視点に賛成である。現在の「大甲藺工芸」にとって、緊急な課題は、どのような方法を取れば、大甲藺製品の生産地域の住民達に昔のように参加してもらい、一緒になって「大甲藺工芸」を振興し、伝承していけるかの方策を考え出すことである。これは、地域住民の多くの参加は「大甲藺工芸」の行くなるべき道であると思われる。

そして、今後にあっては、大甲藺工芸の歴史の精査、ならびに、より有機的な連携機会の創出によって、産業振興を図る必要があるだろう。このように、大甲藺工芸に関する文化祭的な活動だけではなく、地域の生活文化と位置づけ活動を展開することによって、初めて、「大甲藺工芸」の潜在化した社会的・文化的価値を高めることができるだろう。

注

- 1) 国立台湾工芸研究所は現在の国立台湾工芸研究発展センター。
- 2) 陳亮全：台湾の参加型まちづくりと震災復興について、都市環境デザイン会議関西ブロック、2005年度第6回都市環境デザインセミナー記録都市、
<http://www.gakugei-pub.jp/judi/semina/s0506/index.htm> (2013年9月引用)。
- 3) 当時の台湾の五大輸出品目には、その他に砂糖、イネ、茶、パイナップルの缶詰であった。
- 4) 台湾において伝統的工芸品といわれるものの多くは、中国大陸から伝達されたものである。それゆえに、台湾のオリジナルの伝統的工芸品は決して多くはなく、大甲藺工芸は、そうしたなかのひとつである。
- 5) 「藺眼相看工作室」：「藺眼相看工作室」は、個人の工芸工房であるが、この工房の責任者・李安妮氏は、地域の大甲藺を編む職人たちに集合をかけ、数年来、大甲藺工芸の存続・発展に努力してきた人物である。
- 6) 鶴見和子他編：内発的發展論、東京大学出版会、49、1989

参考文献

- 1) 鶴見和子：コレクション鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換—、藤原書店、1999
- 2) 2008 地方特色工芸補助・多角化社区工芸助成計画、国立臺灣工芸研究所、2008
- 3) 藤純子：現代台湾コミュニティ運動の地方社会における卓越化と地方文化の実体化政策—社区総体营造再考—、アジア太平洋レビュー、16-26、2008
- 4) 藤純子：現代台湾コミュニティ運動の地域政治へ参入—高雄市美濃区における民主化、社区総体营造、リスケーリング—、2011. 6. 15. 開催ワークショップ
- 5) 中野くみ江・大窪健之：台湾における「文化替代役制度」とその文化遺産防減災における役割に関する研究、歴史都市防災論文集 Vol. 4、233-240、2010
- 6) 黄旭茵：台湾のコミュニティ・カレッジ～、台北市文山社区大学、都市住民の居住特性別パーソナル・ネットワーク 4 都市居住類型別調査報告書
- 7) 行政院文化建設委員會、工藝産業旗艦計畫 97-102 年、2009

終章

1. はじめに

前章まで検討してきたように、本研究では、日本統治時代に台湾における五大輸出産業の一つとして成立した大甲帽蓆産業は、その歴史を回顧すると、実に多くの先人の努力によって生活工芸ならびに工芸産業として成立したことを明らかにした。

台湾は、元来、多くの先住民が居住する島であった。1624年以降は、オランダ、清国、日本に統治された歴史を持ち、その結果として、多様な文化が入り交ざって形成された多元文化と移住民によってもたらされた中華文化が融合した文化を有する国として成立した。

台湾文化に多大な影響を及ぼした漢民族は、今からおよそ350年前の明鄭時代に台湾南部へ移住を始めた。そして、次第に南部海岸地域から北部へと移住し、最終的には台湾全島へと広がって行った。

漢民族が大挙して移住して来る以前、台湾西部平原には、既に「ペイポ族」と呼ばれる先住民が居住していた。ところが、漢民族が台湾の開拓に入ってから、ペイポ族の人々の生存空間は徐々に狭められ、更に、漢民族が物産の豊饒な西部平原を占めるようになる、ペイポ族の習慣、伝統、文化は次第に消失し、漢人の社会に同化して行った。

そのような中であって、台湾中部の海岸地域の大甲、苑里地域に居住していたペイポ族の人々は、大甲藪工芸という素晴らしい編み技術を残した。この貴重な手工芸は、清時代の中葉頃には、既に中国大陸において、台湾の有名な土産品としての知名度を備えていた。そして、日本統治時代には台湾の重要な産業の一つへと発展した。

大甲藪工芸産業の発展段階で力を尽くしたのは、総督府ばかりではなかった。大甲地域の郷紳達は、大甲藪工芸の産業の発展と当該地域の振興に実に大きく貢献した。この発展段階の様相は、後に、鶴見・川田らが提唱した「内発的発展」[注1]の概念にまさに合致していたことが確認された。彼らは、当該地域の住民達の参加を促し、大甲藪工芸産業を中核とした持続的な発展を描き出そうとしたのである。しかし、その後の経済発展への志向とグローバル化は、こうした当該地域特有の発展を遂げた産業と人々の生

活を大きく変えた。それに伴って、人々の消費傾向は流行に左右されるようになり、大甲藺工芸は多様化する消費者の要求に応えきれずに取り残されるようになった。また、主に手作業で作る大甲藺工芸産業は、機械での大量生産を行う近代工業との競争に太刀打ちできず、1970年代を迎えると、いよいよ産業としての衰退を余儀なくされるようになった。

この衰退期に、台湾政府は、地場産業の振興に向けた一連の施策を実施し、当該地域にも「現代工業区」が設置され大甲藺工芸産業も維持されるかにみえた。しかし、結果的には、地域の婦人達は、より高賃金が得られる他の産業への従事を選択し、大甲藺工芸産業は苦境を脱することは出来なかった。その中で、1970年代から地域の農業に関する機構である「大甲農会」が、大甲藺工芸の技能を維持するための技術研修会を、現在まで実施したことはせめてもの継承につながったと言える。

また、台湾政府によって、1990年代に地域おこし、村おこしとも言える「社区総体營造」政策が開始され、この施策によって、大甲・苑裡両地域の住民の間には、自らが持っていた伝統工芸技術に再び新たな生命力を注ぎ込もうとする意欲が湧き上がってきた。

本研究では、大甲藺工芸産業の歴史を回顧して、その事実をできる限り正確に叙述すると共に、E・H・カー (E. H. Carr) が「歴史とは何か」で述べている「歴史とは、過去の諸事件と次第に現れて来る未来の目的との間の対話である」[注2]との歴史観に基づいて、大甲藺工芸産業史から得られた産業の特質や変遷と経済的、社会文化的な現状とを比較しながら、大甲藺工芸産業の未来展望と課題を総括的に考察した。

2. 各章で明らかにした大甲藺工芸の特質や産業の変遷

まず、各章で明らかにした大甲藺工芸の特質や産業の変遷を整理し、その後、それらを総括し、当該工芸の将来展望と課題について述べることにしたい。

2.1. 第1章：台湾における伝統的大甲藪工芸の生活文化としての特質

第1章では、日本統治時代の台湾において産業化され、主要な輸出品として認識された大甲藪工芸の礎が、当該地域の人々の創意と工夫によって生成された生活文化であったことを明らかにした。それらは以下のように整理することができる。

(1)大甲藪工芸の発展の礎は、台湾大甲地域の人々が、日常の生活の中で、大甲藪という材料を発見し、それを利活用する方法のみならず、より良質な材料を作り出すための工夫を、人々自身の手でさまざまに加えてきたことにある。

大甲藪は、台湾中部の大甲・苑里地域のみで生育する当該地域特有の植物である。その発見のきっかけは、台湾の原住民のペイポ族の一部族であるタオカス族の女性が、河口の湿原で生育していた野生の大甲藪を摘み取り、蓆を編むための素材として利用し始めたことであった。更に、当該地域の人々は、大甲藪の特質を徹底的に観察・理解し、ものづくりに活用しながら、より良質な大甲藪を得るために栽培をも行うようになった。更に、その栽培に当たっては、地域に存在した落花生油粕を肥料として活用するなど、さまざまな創意工夫を加えた。このように、産業化以前に、すでに生活用具としてより良質な材料を得ようとする努力が実に多様に展開されていた。

(2)大甲藪工芸は、当該地域の人々の生活において、全体活用が徹底されるなど、生活との密接な関連の中で創生され発展してきた。

大甲藪は、大甲蓆、大甲帽子などの生活用品のみならず、衣食住ならびに祭礼に関する文化などの多様な側面で利活用され、まさに、当該地域の生活を支える重要な素材としての役割を担っていた。また、生活用品の材料として使用に耐えないものや使用後の生活用具までもが、廃棄されることなく肥料として田畑に還元されており、徹底した「一物全体活用」が実践される中で構築された生活文化であることが明らかとなった。

(3)大甲藪工芸は、当該地域の人々を結び付ける重要な媒体であった。

人間生活において、その地域に生育する素材を利用する発端は、何よりもまず、生活者が、自身の周りを徹底的に観察し理解することであった。そうした中で、生活で必要

とされる用具を作り、それを使う物質文化が創生されたと考えられる。

大甲藺が発見され、それを素材として大甲蓆が作られるようになってから、今日でおよそ300年が経過した。その間、大甲帽子、煙草入れ、紙入れ(財布)、下駄表、インソールなどのさまざまな生活用具が、自ら考案した道具を使って製作され、産業としての発展を遂げるに至った。その礎は、先人が自然の恵みである大甲藺を大切にし、かつ、自らの手で栽培する術を学び、また、資源の有効利用を計るという英知の賜であった。また、大甲藺の優良品はもとより、不良品までをも利用するなど、そこには自然の恵みを徹底的に利活用する一物全体活用の観念が見て取れる。このように、大甲・苑裡地域の主要な産業として展開された「ものづくり」である大甲藺工芸の基盤は、まさに、当該地域の人びとの生活に根ざしたものであった。それは、また、大甲藺工芸が、人と人、人と自然とを巧みに結び付けた所以でもあった。

今日、大甲・苑裡両地域の多くの住民が大甲藺工芸を振興するために努力している。しかしながら、この工芸振興の目指すところは、主に経済的な発展を遂げることばかりに向けられているように思われる。しかしながら、本論文で詳述してきたように、両地域の住民は、今後の振興の過程で、大甲藺の文化に対してなお一層深い認識を築き上げることが出来なければ、先人達が残した生活文化を継承していくことは難しいと思われる。大甲藺工芸に組み込まれている文化の側面を再考し、伝統工芸産業の発展を、ただ経済的な側面から捉えるのではなく、生活文化として振興していくことに取り組んでいかなければならない。地域の内発的発展が叫ばれて久しい今日、当該地域の人々が自らの生活をより豊かなものにしていく営みの中で構築された生活文化として大甲藺工芸を再確認・再認識し、まさに、これからの当該地域の生活のあり方と一体化させつつ振興していくことが不可欠であると考えられる。

2.2. 第2章：台湾大甲藺工芸産業の成立と変遷

第2章では、大甲藺工芸産業の変遷を概観し、5つの時期に分類して、それぞれの時

期の特徴を明らかにする共に、内発的発展論の見地から人々の活動を考察し整理した。得られた結果は以下の通りである。

(1)黎明期：清時代に相当する 1729～1895 年頃には、当該地域において、大甲藪の編み技術が発展した。いわば、大甲藪工芸は、初期の大甲地域において、人々が自給自足を基盤とする生活を営むための生活用具として創出され使用されたものであった。

生活用具の一つとして使用されていた大甲蓆が物々交換によって取引され、次第に島内外に転売されるようになり、その後に産業化して行くための礎がこの時期に築かれた。

(2)発展期：日本領有時代前期の 1895～1903 年頃に相当し、台湾総督府の家内工業の推進を受け、大甲蓆や大甲帽子の生産が産業化した時期である。この発展期で重要な役割を演じたのは、郷紳と称される当該地域のリーダー達であった。彼らは大甲藪工芸の生産の場において、技術開発と産品開発を始め、職人の技術指導体制を整え、その後の品質の安定化に大きく寄与した。また、地域の衛生面の向上、福祉の確立、学校の設立など、大甲藪工芸の生産に関与するだけでなく、当該地域全体の発展を大きく支えたのも彼らであり、当該地域の発展に果たした貢献は極めて多大であった。彼らは、まさしく、内発的発展論で重視されている所謂キーパーソンであったと言えよう。

(3)最盛期：1903～1942 年頃に相当し、「内国勸業博覧会」を介して、大甲藪製品の優れた品質が広く海外から認められたことを契機として、特に大甲帽子の輸出が伸び、生産がピークを迎えた時期である。1937(昭和 12)年には、台湾総督府から特産として認定された。

製品の品質維持に向け、政府に先駆けて、各会社や商店が自主的に検査を開始するなど、この最盛期で輸出拡大に果たした民間の努力は極めて大きかった。すなわち、大甲地域の郷紳らは大甲帽子と大甲蓆の産業化のみならず、当該地域の未来展望を主体的に描き出し、その方向へと地域を導き、当該地域の総体的な発展に寄与したと考えられる。

(4)衰退期：第二次世界大戦を経て、内戦や近年の国内外の社会・経済体制の変容を諸因とし、産業としての大甲藪工芸が市場を失い衰退した時期である。輸出産業として経

済的成功を収める中で、知らず知らずの内に生じた地域内の綻びの修復が疎かになっており、そのことが社会体制の大きな変化の中で、柔軟な対応を阻害したと言っても過言ではない。こうした状況下において、大甲藺工芸の需要は減少したが、苗栗県の「婦人連合会」が、地産地消を促すなどして一時内需の回復が見られた時期があり、これは内発的発展の観点から見ると、重要な取り組みの実践として注目すべき点の一つである。

(5)復興期：1994年の社区総体营造施策開始から現代までの時期に相当する。1990年代以降の大甲藺工芸の復興には、大学と工房とが共同でデザイン開発を行うなどの積極的な取り組みがみられる。台湾が国を挙げて推進している内発的地域振興政策とも言える社区総体营造が、さまざまな意味で大きな支えとなったことは言を俟たない。大甲藺工芸産業を取り巻く状況が大きく変貌した現代において、新しい発想の製品づくりも欠くことのできない要素である。この点については、台湾工芸研究センター、大学等の教育・研究機関の継続的な支援も必要であろう。

内発的発展論の観点から見ると、伝統工芸産業の振興には、技術の伝承のみならず、地域の人々による、地域が有するさまざまな資源の積極的な利活用こそが重要であることがわかる。その意味においては、本章で取り上げた大甲藺工芸の「黎明期」「発展期」「最盛期」に至る発展の歴史は、まさしく内発的発展の実践であったと言って良い。今後、大甲藺工芸の振興を図るに当たっては、上述した事実を踏まえ、現代における「もう一つの発展」としての内発的発展をより強く志向すべきであろう。

2.3. 第3章：大甲藺の特性と農業生活文化に関する研究

第3章では大甲藺の特性と農業生活文化に関する調査・研究を実施し、大甲藺の特性、栽培、生活用具の制作から産業に至るまでを、地域の農業生活文化に視点を置いて明らかにした。大甲藺を含む地域の素材を生活に利用し、かつ徹底的にリサイクルしていく生活様式は、「一物全体活用」や「自然との共生」の観念の実例と言えるものであった。

第3章で得られた結果は以下の通りである。

(1) 大甲藺の利用には、当該地域の人々が不断の努力の中で作り上げてきたものである。特に、大甲藺は、大安渓流域に自生する植物であり、「ものづくり」に適した素材として、この礎は先人が自然の恵みである大甲藺（資源）を大切にし、かつ自らの手で栽培する術を学ぶことと、資源の有効利用を図るという英知の賜と思われる。

(2) 当該地域の特産物である落花生は、食用のみならず、落花生油が抽出されていた。茎葉は家畜飼料や燃料としての利用されたが、搾油残滓である落花生油粕は、主として大甲藺の栽培肥料として利用されるなど、自然の恵みを徹底的に利用する生活スタイルの中で良質の大甲藺が栽培された。

さらには、動物の排泄物（人、動物）、堆肥等の有機肥料が用いられるなど、資源の循環的利活用が徹底されていた。各家庭には、「畚堆間」が庭先に設けられ堆肥（有機肥料）の製造もなされており、そうしたサイクルの中に大甲藺の栽培が位置づけられていた。

(3) 大甲藺が発見され、それを素材として大甲帽子や蓆が制作されてからおよそ 300 年が経過した。その間に、煙草入れ、財布、インソールなどさまざまな生活用具が、自らが考案した道具を使って創出され、産業としての華々しい反映を遂げるに至った。

大甲藺が先住民族によって見出され、さまざまな生活用具に使われるようになった歴史的経緯を振り返ると、地域に存在する素材を、先人が知恵を絞り、創意工夫を加えて、素材を加工（この場合は編み技術）して生活用具を制作したことが明らかとなった。

また、大甲藺製品は、大甲・苑裡両地域の婦人たちが、地域の同年代の友人達と議論をしながら創意工夫を凝らし一緒に協力し完成したものである。この過程で共に費やした時間が、彼女達の心の拠り所でもあり、当該地域ならではの生活を生み出した最も大切な時間であったことが推察される。

(4) 大甲藺を加工して生活用具を作る際に使用される道具に、挾竹(竹)と艶付器(もだま)などがある。それらは、いずれも、天然の材料を素材としており、そこには、大甲藺利用の製品を含め、自然と共生する観念を見出すことができる。こうした知恵も、

内発的発展を目指す今日の当該地域にあつては極めて重要な生活の知恵と言えよう。

以上のように、大甲藺工芸に見られる一物全体活用や自然との共生の知恵は、地域素材を有効に利用した合理的ともいえる「ものづくり」の姿勢・観念であり、21世紀の自然と人間の共生をテーマとした農村文化の再生を考えると、大甲藺工芸産業の再生・復興は、このような考え方を基盤に据えた対策が極めて有効と考えられよう。

2.4. 第4章：台湾「大甲藺工芸」の内発的発展論に基づいた地域振興策

第4章では、著者が参加している「工藝文化明珠－大甲藺編織」プロジェクトでの活動や、同プロジェクトに関係する地域で行った質問紙調査の結果、並びに、第3章までに得られた結果に基づき、大甲藺工芸産業の振興を核とした地域振興の導出策を考察した。その結果、以下の知見が得られた。

(1)「工藝文化明珠－大甲藺編織」プロジェクトの実施に際しては、最初に、地域の大甲藺工芸の職人からプロジェクト参加学生への大甲藺工芸の技術講習会が行われた。これによって、大甲藺工芸の貴重な制作技術を記録することができた。また、学生にとっては、実際の「ものづくり」に参加する貴重な経験となった。

(a) 参加した学生からは、大甲藺工芸の技術を利用して作成したランプシェード、ブレスレット等の新製品や異素材を組み合わせたクッションカバーなどが提案された。地域の職人らは、今日の生活に適合した新製品のデザインの提案であるとし、好意的に受け取った。

(b) 大甲藺製品のデザインを行うデザイナーの育成、並びに、大甲藺工芸品の制作に携わる若い技術者の養成するための方策の一つとして、技術講習会開催に期待する声が高く挙げられた。

このように、「地域工芸多角化支援プログラム(多角化社區工藝扶持計畫)」によって、産学の連携による大甲藺産業の振興に関して一定の成果が挙げられたと言えよう。しかしながら、その振興の動きはまだ緒に就いたばかりである。

(2) 近年、台湾政府は、特色ある地域産業の振興を促進するため、積極的に文化祭などの開催を推奨している。しかし、これまでの地域産業の振興方針には、いくつかの問題点が指摘できる。例えば、実施されている振興策は、生活者を主体として練り上げられた施策とは必ずしも言えない部分がある。今後、振興策は地域住民を主体とした案を掘り下げて議論していくことが必要であろう。

(3) 大甲藺草工芸は、(1)、(2)の結果に見られるように、今後、地域の若者の参加などによる地道な工芸技術の改良や需要を喚起する新製品の開発、そのためのデザイナーの育成などを行うことによって、振興・発展への道筋が見えてくると思われる。

大甲藺工芸品の品質向上は、地域に存在する職人や発想豊かな若者参加による造形技術の磨き上げによって、一層高めることができるであろう。さらに、材料としては大甲藺だけでなく、地域に存在する他の素材を組み合わせたデザインも可能かもしれない。また、何よりも肝要なことは、当該地域の生活者自身が、それらを自らの生活で活用する意識を持って、生活に活用できる製品開発であるべきと思われる。

(4) 台湾における内発的地域づくり「社区総体营造」に関する住民の認知度

アンケート調査の結果によると、アンケートに参加した住民達は、「社区総体营造」に参加する高い意識を持っていることが明らかとなった。そして、大甲藺工芸の振興についての計画案の作成やイベントの開催を持続的に行うべきとの意見が多かった。また、この伝統工芸を再注目し、振興に全地域住民が関心を持って活動に参加することが使命と考えている人も多かった。

これらのアンケート調査の結果は、大甲藺工芸の振興に、地域住民が自律的、主体的な考えで取り組んで行こうとする意思の現れであり、そこに地域産業を内発的発展論に即した意志を認めることができる。

なお、今回の調査では、著者が想定しなかった結果があった。それは、近年にあった二つの呼び方、「大甲藺」と「苑裡藺」についてである。意外にも、大甲地域の人々は苑裡地域の住民が「大甲藺」を「苑裡藺」と呼んでいることにはさして異論を持ってお

らず、「大甲藺工芸」を「苑裡藺工芸」との主張にも無関心であることがわかった。この結果からは、当該地域の人々が故郷に対する愛着にこだわり、意固地な主張をするよりも、大甲蓆、帽子が、大甲地域にとって無形の文化財であるとの意識が強いことの現れと思われる。名称を争うのは大甲地域にとって大した関心事で無い様子がわかる。ではなく、重要な課題は、大甲藺工芸その「もの」のみにとらわれ、地域に対する愛着心がおざなりになっていることの表れといっても良い。

伝承にあるとの意思表示と言っても良い。

著者は、個人的にもその視点が重要だと考える。現在の大甲藺工芸にとって、緊急に取り組むべきは、大甲藺製品の生産地域の周辺に住む住民達を、いかにして大甲藺工芸の振興と技術と、文化の伝承の両方に参加してもらうかを考えることである。それこそが大甲藺工芸を文化として維持発展させる道筋であろう。

そして、今後の取り組みでは、大甲藺工芸の歴史の精査、並びに、地域住民、大学や行政機関のより有機的な連携機会を創出し、産業振興を図ることが必要であろう。このように、大甲藺工芸に関する文化祭的な活動だけではなく、大甲藺工芸を地域の生活文化として位置付ける活動を展開することによって、初めて大甲藺工芸の潜在化した社会的・文化的価値を高めることが出来るであろうと思われる。

3. 各章の総括的考察

台湾中部の大安溪に育成していた大甲藺が、どのような経緯を経て生活用具の素材として利用されるようになったかを明らかにするとともに、野生藺草の利用から人工栽培の藺草を使用するようになった経緯、生育特性、栽培地域、収穫した大甲藺の利用方法やさまざまな用具製作と工夫など、文化に関わる点等を明らかにした。

大甲藺工芸は、大甲藺という材料を発見して、大甲蓆が作られてから、およそ 300 年が経過した。その間、大甲、苑裡両地域の人々は、大甲藺の特質を徹底的に観察し、それらの特質を把握し、「ものづくり」に活用しながら、より良質な大甲藺を得るために栽培

を行うようになった。その後も、落花生油粕を肥料として活用するなど、すでに、産業化以前に生活用具としてより良質な材料を得ようとする努力がなされてきた。また、大甲藺の優良品はもとより、不良品までをも徹底して利用し、自然の恵みを徹底的に利用する一物全体活用の観念が見受けられ、大甲藺は、当該地域の人々に、極めて大切にされてきたことがわかる。

20世紀当初には、日本政府が、大甲藺工芸を「家内工業」として取り上げ、産業としての振興を図った。大甲蓆や大甲帽子の生産が産業化したのはこの時期である。当該産業の歴史を回顧すると、その発展に重要な役割を果たしたのは、郷紳と称される当該地域のリーダーであった朱麗、李聡和、杜清、陳瑚、李進興、李城6人の活動であった。彼らは、大甲藺工芸の生産の場においては、技術開発と産品開発をはじめ、職人の技術指導体制を整え、その後の品質の安定化に大きく寄与した。また、衛生面の向上、福祉の確立、学校の設定など、当該地域全体の発展を大きく支えたのも彼らであり、大甲藺工芸産業の発展のみならず、まさに、当該地域の内発的発展の展開に果たした貢献は極めて多大なものがあった。

今日では、1990年代に開始した台湾の社区総体营造政策の支援の下で、大甲・苑里両地域の住民が大甲藺工芸を振興するために努力している。しかしながら、この工芸振興の目指すのは主に経済的な発展を遂げることにあるように思われる。

台湾国内の社会・経済体制の変容を諸因とし、産業としての大甲藺工芸は市場を失い衰退した現状では、著者からみれば、産業規模の回復が不可能に近いという事実を否定することはできない。しかし、両地域の住民にはこの認識は薄く、今後の振興の過程で挫折するのではないかとの危惧がある。もし、大甲藺の文化に対してなお一層深い認識を築き上げることができれば、先人達が残した生活文化を継承していくことは可能と著者には思われる。

近年の大甲藺工芸の復興には、大学と工房とが共同でデザイン開発を行うなどの積極的な取り組みが見られる。内発的発展論の視点から見ると、伝統工芸の振興には、技術

の伝承のみならず、地域の人々による地域が有するさまざまな資源の積極的な利活用こそが重要であることがわかる。その意味においては、大甲藺工芸に組み込まれてきた文化を再思考し、伝統工芸の発展をただ経済的な側面から捉えるのではなく、生活文化を強く意識して大甲藺工芸の振興に取り組んでいかなければならない。

今日、地域の内発的発展が叫ばれて久しい。大甲藺工芸が成立し産業化するに至った発展の歴史を回顧すると、それはまさしく内発的発展の実践であったと言って良い。当該地域の人々が、自らの生活をより豊かなものにしていく営みの中でこそ構築された生活文化として再確認・再認識し、まさに、これからの当該地域の生活のあり方と一体化させつつ振興していくことが不可欠である。今後にあつて、大甲藺工芸の振興を図る際には、上述した事実を踏まえ、現代における「もう一つの発展」としての内発的発展の概念を強く志向するべきであろう。

大甲藺工芸を再生・復興させるためには、大甲藺工芸が内包しているさまざまな要因を考えると、内発的発展論の視点から大甲藺を地域に存在する素材として捉え、それを素材とした生活に密着した必要な生活用品を生産するという姿勢を強く持つ必要があらう。しかも、その生活用品は時代が推移した現代でも多くの人々に使用される機能とデザイン性を兼ね備えている必要がある。その製品の生産・販売に地域の住民の多くが参加し、環境に配慮しつつ、持続可能な産業として、台湾政府が推進している政策である社区総体營造と連携しながら復興を図ることが有効と考えられる。

4. 今後の課題と展望

本研究は、台湾・大甲地域で生育していた台湾特有の大甲藺を用いて、地域の人々が自らの創意工夫で、生活用具を作ることから始まり、長い年月を経て台湾有数の輸出産業にまで発展したが、第二次世界大戦とそれ以降の社会経済の発展と変容、経済のグローバル化の波を受けて、衰退を辿っている大甲藺工芸を再生復興させる道筋を、その歴史的展開に即して明らかにしようとするものである。

著者は、当該工芸の再生・伝承と復興は、当該地域の人々が積極的に参加し、また、当該工芸に関心を持って教育機構、研究センターや行政組織が当該地域の職人らとの協働しつつ、大甲藺工芸の技術を活用して、時代の流れに適合した生活用具を開発することで展望が開けると考えている。

アンケート調査結果によると、大甲藺工芸が大甲と苑里両地域で特有の伝統工芸であるとの認識は当該地域住民のコンセンサスとなっていることに疑う余地は無い。ただ、社区総体營造政策を推進し、新たな技術的、財政的支援を注ぎ込んではいるが、現状では満足いく成果が出ていないのが正直なところである。

両地域の住民達が主体的になって、この技術の伝承と産業としての振興を図ると共に、日常の生活文化の一端としてこの産業を捉え、先人らが内発的発展論的な意味を含めて取り組んできたことを理解して、大甲藺工芸の再生と振興に取り組むならば、大甲藺工芸の継承と持続的な発展が可能と考えられる。

著者が本研究の中で第1～4章の内容を整理した結果を解析し、総括すると、大甲地域の大甲藺工芸の振興策、について、主要な課題と未来の展望を以下のように取りまとめることができた。

4.1. 大甲藺工芸技術の継承の問題点を正視する

大甲藺工芸の職人および大甲藺栽培農家の高齢化と後継者不足への取り組みの問題は、大甲藺工芸の職人と大甲藺栽培の農家に共通した深刻な問題である。

まず、職人に関しては、高齢化の問題が最大の愁いである。その上、大甲藺工芸製品の販売経路の未整備が絡み、当該産業の先行きを不安視されている。このような状況下では大甲藺工芸の技術を学び、継承しようとする新規に参入する若者が極端に少ないのが現状である。このように、大甲藺工芸技術を伝承する職人が少なくなり、技術そのものが絶える危機に直面しているとも言える。

また、大甲藺の栽培農家も高齢化が進み、後継者がいない農家も少なくない状況にな

っている。この原因は、大甲藺工芸が衰退している現状の他に、大甲藺の栽培と採取は稲栽培より手間が掛かることがその大きな要因の一つである。その上、近年は台湾政府が休耕農地に補助金を出す政策が定着し、多数の農民は補助金を受け取りたいがために休耕田を放置する傾向がみられ、栽培が大変で面倒な大甲藺栽培を中止する傾向が強い。

これらの問題に目の当たりにして、著者は、大甲藺工芸の技術伝承にと職人育成計画に関して、以下のように提案したい。

第一に、定年退職者や外国人配偶者が大甲藺工芸の技術の担い手になれるような生産制を構築するため、彼らに技術を教える「トレーニング・センター」の整備である。

定年退職者は時間に余裕があり、その自由になる時間を地域社会の活性化や地域社会に根ざした生活文化に関わる担い手として、「ものづくり」に参加することは定年後の生き甲斐ある生き方につながると思われる。また、近年、当該地域には、東南アジア出身の外国人配偶者がみられるが、彼女達は手作りの作業経験が多く、性格的にも我慢強く、じっくりと時間をかけて学ばなければならない工芸技術の修得に適していると思われる。「大甲地域に手先の器用で元気な高齢者、素朴な外国人配偶者が沢山いる活気ある町をつくろう！」をスローガンに掲げて以上のことに取り組むことを提案したい。

第二に、小学校の授業で、大甲藺工芸を教材として取り上げることを提案したい。

著者の現地での聞き取り調査によると、職人達の技術は、8、9才から訓練されたもので、年齢をとお大甲藺の編み技術を忘れることはないとのことであった。この経緯をみると、大甲地域の小学校で大甲藺工芸を教材として取り上げ、学ぶことによって、子供によっては非常に興味を持って、伝統工芸の道を歩もうとする子供が出てくる可能性があると思われる。彼らが巣立ち、年を経て仕事を定年で終えたあと、地域に戻り、地域の技を教える機会が用意されていれば、生き甲斐になるかも知れない。

もちろん、伝統工芸の技術者養成を目論んで行うことは教育本来の姿と離れてしまうとの意見もあると思われる。しかし、地元の小学校で大甲藺工芸を教材として取り上げることや、大甲藺の成長過程を描くことや、大甲藺帽子は母親が息子への愛情を溢れた

物語であったことなどを教えることは、郷土愛や家族愛を育むことに極めて有用なことでもあろう。

4.2. 大甲藺工芸の創新に向けた提案

もともと、大安溪下流に自生していた大甲藺を、地域住民が発見し、それを利用して生活に必要な用具を作ることが発端となって、その生活用具作りが次第に「大甲藺工芸文化」を形成して行ったのである。

より高品質な大甲藺を得るために、地域住民達は大甲藺を水田に移植して栽培する技術を獲得した。その人工栽培によって得られた高品質な大甲藺で、それまでの粗雑な藪は繊細な藪へと変貌を遂げた。これと平行して編み技術の向上に編み手の努力もあった。それらの積み重ねが大甲藺製の生活用具を輸出可能な製品へと引き上げて行った。

大甲藺製品の品質向上は、日本領有時代の政府の後押しもあったが、大甲地域の郷紳達の大いなる努力によって、大甲帽子を核に大甲藺製品は海外に輸出されるまでに進化を遂げた。

大甲藺に関する生活文化は大まかに述べればこのような経緯を辿って形成され、当該地域では揺るぎない地位を確保したし、台湾が誇る生活文化とも言える。

以前の「大甲藺工芸文化」の特質を見ると、時代の流れに合わせるかのように、それぞれの時代に大甲藺工芸文化は上手く適応して発展に遂げて来た経緯が浮き彫りになる。

それらの経緯から、現在の「大甲藺工芸文化」を復興させ、進展していくためには、大甲地域の人々は、先人達が残した大甲藺の文化に対して、大甲藺工芸の技術の伝承のみならず、地域の人々による、地域が有するさまざまな資源の積極的な利活用こそが、「内発的発展論」の観点からより一層深い認識を築き上げると、自らの生活をより豊かなものにして行く営みの中で構築して行くことが重要と思われる。

本研究の総括の最後に、大甲藺工芸の「内発的発展」計画の導出として、具体的提案として、「地域づくり（ソフト面）」、「ハード面」について、以下の通り、順を追って説

明する。

4.2.1. 「地域づくり」での提案

(a) 「地域の文化財」の概念の構築について

以前、大甲藺を採取する季節には大甲藺を曝している風景は全体が金色に輝いていた。その景色は、現代ではもう見る事が出来ない。その大甲藺を刈り取る季節の景色は、まさしく「地域の文化財」そのものであると言える。従って、「大甲藺を刈り取りと刈り取った大甲藺を陽に曝す風景」は毎年の文化財的な行事に匹敵すると思われ、「大甲藺祭」という地域の「アイデンティティー」が創造出来るかもしれない。

(b) 「地産地消」の概念の合意形成について

地域に根ざした伝統工芸品を維持・継承していくためには、地域の人々に「地産地消」の概念を理解させ、これを住民全体の共通意識にすることが重要であると考えます。

また、大甲地域の人々が金色に輝く風景を共通の認識として共有するならば、「大甲藺」の記憶が復活し、徐々に「大甲藺」製品は地域の人々に「地産地消」の意識を醸し出すと思われる。この独特な風景に限らず、例えば、大甲地域の人々が名刺ケース、ピンなど軽いもの製品を積極的に使用することによって、次第に地域の土産として認識されるようになる。また、大甲帽子は自分自身が愛着を持って被ることや、大甲藺製のスリッパを日常生活で履くことによって、地域の人々に「地産地消」の概念が形成されることが期待される。このようなことの積み重ねによって、「地産地消」の概念の合意形成が計られると期待される。

大甲藺工芸の創新についての具体的提案として、地域の中で材を栽培、採取し、無駄なくそれらを作り使い廃棄できる工芸品を、「デザイン」面から以下の通り、考察した。

(c) 大甲藺の廃材を利用できる「ものづくり」

大甲藺で使用する製品の生産は、大甲藺の茎の部分で製作する。そのため、大甲藺の部位で使わない葉鞘や花、及び製品を編んで残った廃材が発生する。そこで、この利用

方法を「大甲藺体験コース」に参加した当該地域の人々の協力をして、自らさまざまなアイデアを出して、図1に示した陶の廃材を利用して作った図版である。このように1枚1枚の図版(約30*30cm)は自分自身に1枚の図版で想像力、個性が溢れる独自の作品を作る。この例に倣って、大甲藺の廃材で人々のアイデアで図版を作ることを提案したい。

それによって作られた作品を、自分の家に持ち帰り、部屋のインテリアとして利用するとオンリーワンの装飾品の出来上がりである。また、出来上がった図版を作った人が持ち帰らなければ、「大甲藺工芸館」[注3]の壁、展示空間に作る利用することもできる。その「ものづくり」によって、現地の住民達に対して、「一物全体活用」の概念を理解させる材料としても活用できるし、更に地域の人々が「参与式设计」(Participatory design) という方法を通して、新しい空間の構成と対話をすることでもある。

この体験コースで、「大甲藺を刈り取り行事」を毎年行うことによって、恒常的に新しい製品を創り出すことが可能になると思われる。また、地域の人々のアイデアから生まれたこれらの作品は、工芸館の空間の雰囲気や毎年リフレッシュしていく原動力となる。同時に、このような「ものづくり」の方法には、大甲地域の「内発的発展」のパワーを呼び起こすきっかけにもなると思われる。



図1 大甲藺の廃材で作る図版の参考イメージ (この例は陶の廃材利用)

このような対応は大甲藺工芸の復興・振興をめざす「社区総体营造」政策の「ソフト面」を内包していると考えられる。

また、「ハードウェア」については、以下の二点を提案する。

4.2.2. 「ハード面」での提案

(a) 「大甲藺文化エリア」の提案について

大甲藺工芸を推進するには、住民が大甲藺工芸を地域の貴重な工芸として、且つ、大甲藺工芸を総体的に「地域の文化財」として認識し、「地産地消」の概念を共通認識することが重要であることは前述したとおりである。その上に立って、地域や自治体、国などが「大甲藺文化エリア」という企画を推し進めることが必要であると考えられる。

「大甲藺文化エリア」構想の目的は地域住民の人々に、「大甲藺の生命循環期」を認識させることである。著者の提案は以下の通りである。

まず、「大甲藺文化エリア」で、適当な大甲藺栽培畑を設ける。その栽培畑で、大甲藺が成熟する旧暦6月に、毎年、地域住民参加の下で、大甲藺を刈り取る「大甲藺祭」を主要なイベントとして実施する。そして刈り取った大甲藺を曝して金色の景色を創出し、人々の記憶の中に「大甲藺特徴」を強烈に留める。その後、乾燥させた大甲藺は、「大甲藺文化エリア」の大甲藺製品を作る材料として提供する。

(b) 「大甲藺工芸館」の創立について

また、大甲藺文化エリアに「大甲藺工芸館」を創立する。この「大甲藺工芸館」は「地産地消」の理念に照らし、地域の古民家を活用するのが相応しい。また、外向けの観光施設である前に、地域の人々が楽しみ通い、地域の技や文化をお互いに繋ぎ合う、協働の場として機能すべきである。大甲藺の職人達や一般の地域の生活者が、地域で使うための大甲藺工芸品を作る。また、大甲藺製品を展示するスペースも設ける。やがては大甲藺製品の編む技術を見に来る見学者と職人がインタラクティブに交流して、大甲藺の編み技術を伝承が持続的に維持されることとなるであろう。

なお、大甲藺工芸館は製品の展示や技術の伝承に限定するのではなく、館内には、大甲藺工芸の発展の歴史、生活文化の内包がされている実態、大甲藺工芸の革新と将来展望など関連する内容を展示されるべきと考える。

また、「大甲藺文化エリア」では、大甲藺に関連する消費施設を含めて設ける。例えば、飲食、記念品、大甲藺工芸の体験コースなど、大甲藺文化を探索できる全ての展示である。

次に、「デザイン面」について、次に若干具体的な提案を述べる。

4.2.3. 住生活

古くからある大甲藺の編み模様（図2）を多様に組み合わせ、建材やインテリアに活用する方策を提案する。



図2 大甲藺の編み模様[注4]

(a) 衝立（ついたて）：

台湾の夏の気候は蒸し暑いので、大甲藺製の「パーティション」は生活空間を分割でき（図3）、しかも吸湿力が高いので、ある程度は除湿効果も期待できる。また、図柄に、大甲藺の龍鳳模様、大甲藺の編み模様等を応用することで、大甲藺製品の「アイデンティティ」も維持することが出来ると思われる。

ついたてを大甲藺のみでデザインするには硬度が不足である。そのため、他の素材とのコラボレーションは避けられない。そこで、台湾全土で生育する竹、或いは毎年大甲溪、

大安溪上流から西海岸までに漂流する流木(大甲の建興社区の西の方に台湾海峡である)と組み合わせる。その完成品は、実用的に優れるだけでなく、現地の特有な風土に富む文化的な雰囲気を含んでいると言える。

表1 大甲藺製品の住生活に関する提案

住生活の製品の提案	
	
図3 竹、木と大甲藺パーティションのイメージ図	
	
図4 大甲藺の座布団(著者撮影)	図5 車用の座布団のイメージ図

(b) 車用の座布団：

大甲藺は直に肌に触れると心地良い感覚を与える特質を持っている。そのため、座布団（図4）は人々の心が惹きつける特性がある。また、車が人々の移動手段として定着している現代、車の運転席にマッチするように形や模様を整えた大甲藺製の「車の座布団」（図5）は、蒸し暑い夏季には、その清涼感で好評を博す夏に実用生活用品となるかもしれない。

4.2.4. 衣生活

(a) 大甲帽子のイメージの改善

「ファッション性、若者向け、デザイン性に富む製品の開発」が必要との意見もアンケートにあった。現在、大甲藺製品の不振の原因の一つは、年寄りっぽいイメージが強くあることも原因していると思われる。

このイメージを払拭するためには、帽子に「ファッション性、デザイン性に富む製品の開発」が重要である。その例として、大甲藺男帽（図6）女帽（図7）の原型は改良した様子（図8）などを提案したい。

台湾は夏季の太陽光は非常に強烈で、防止無しでの外出は無謀である。そのため、帽子の消費市場は需要が非常に大きい。人々に好まれる帽子をデザインするなら、当該地域の若い人を含む人々に大甲帽子を着用する機会が大幅に増加すると思われる。このことによって、「地産地消」の目標が可能になるとと思われる。

(b) カバンの内装及び外観の改善

伝統的な大甲藺カバンは図9のような一層式のカバンである。また、正三角形の頂点を一辺とするように材料を切り分けて使用した。繊細なイメージは感じられるが、時代遅れのイメージは拭えない。このイメージチェンジのために、現在の女性達のカバンの用途を考え、内側を幾つかに分割して（図10）使い勝手を良くする努力も必要である。また、大甲地域の「台中市レザー産業科技発展協会」と協力して、外観に新しい素材とし

てレザーを組み合わせて制作した大甲藁カバン（図 11、12）はワイルドなイメージがあり、大甲藁カバンのブームが巻き起すことが出来るかもしれない。

(c) 和風の「かごバッグ」

大甲藁の繊細な触感は浴衣が良くマッチすると思われる。浴衣を着た女性が持つバッグとして、大甲藁を組み合わせた「かごバッグ」（図 11、12）の製作を著者は期待している。この「かごバッグ」は和服や夏の浴衣を着る機会の多い日本女性に用いられる可能性が高く、マーケティングの対象は当然日本である。日本人は和服や浴衣を着る機会が多いだけでなく、日本は古くからの畳文化に慣れ親しんでいるので、大甲藁製品を使用する事に違和感がないのではないかと思われる。

表 2 大甲藁製品の衣生活に関する提案

衣生活製品の提案	
	
<p>図 6 大甲藁男帽（著者撮影）</p>	<p>図 7 大甲藁女帽（著者撮影）</p>
	



図8 改良した大甲帽子の様子



図9 大甲藁カバン (著者撮影)



図10 大甲藁カバン内側を機能性を加える



図11 レザー、迷彩布、大甲藁のコラボ



図12 レザーと大甲藁の組み合わせ



図 13 浴衣のかごバック

4.2.5. 包装素材

(a) エコバッグ

図 14 に、ワインを持ち運びする時に使用するワインバックを示した。図のように、ワインを入れる大甲藁製のワインバックは、ワインボトルが入る大きさより 2~5 倍の大きさに大甲藁で作る。このエコバックはワインを 2 から 3 本を入れることも出来るし、ワイン以外の物も入れて持ち運びが出来る便利なバックである。また、編み目のサイズを小さくすることによって、エコロジカルな雰囲気を持ったエコバックが期待出来る。

(b) 紙バック

大甲藁の廃材を用いて大甲藁紙を作り、これを用いて作った紙バックは当該地域の代表的な紙バックになるのではないかと思われる。

(c) 大甲藁製品のケース

大甲藁製品の包装には、現在は紙バックが使われている。しかし、紙製の入れ物では帽子の型が崩れやすい傾向がある。そこで、「大甲藁製品用のケース」があれば重宝であると思われる。そのうえ、その材料に「大甲藁紙」を使うならば素晴らしい大甲藁の活用である。

表3 大甲藺包装素材の提案



(d) パッケージや梱包時の緩衝材への活用

一物全体活用の実践に向けて、工芸品の制作過程で発生した破材・廃材を積極的に活用する。

このような製品の開発研究を進めることで、大甲藺の利用範囲は大幅に拡大し、需要の拡大が喚起できると考えられる。それは大甲藺の需要拡大に直結し、栽培を志す農家も自然に増加すると期待される。

4.3. 大甲藺の物性を活かした「ものづくり」の展開

台湾で刊行されている書籍では、大甲藺は他の藺草に比べて、2.14 倍の水分吸収力がある。また、大甲藺の感触は、夏は涼しく、冬は暖かく感じると記載され、不思議な植物である。しかし、大甲藺についての科学的な解析は、台湾ではほとんど行われていないのが現状である。

そこで、工業試験場もしくは植物試験場などの公的な研究機関あるいは大学などで、「大甲藺そのもの」、「編み方の違い」、「多様な編み方を組み合わせた場合」、「大甲藺籐

の太さの違い」などの強度、柔らかさ、皮膚感覚あるいは肌触りの感触などを詳細に測定して、その科学的データに基づく「ものづくり」を推進することも、これからの「ものづくり」では重要であると思われる。

なお、現代では触覚感性計測用システムなどのような感触についてのさまざまな物性測定装置が開発されているので、このような計測は十分可能と思われる。

このような物性を利用して作られた「大甲藺工芸製品」の普及は、最終的には人間の感覚が製品の善し悪しに大きく左右されると思われる。そこで、ワークショップなどを通じて、人々の意見を集約して、「ものづくり」を進めることを提案したい。

4.4. 大甲藺工芸の持続的発展に向けた意識の転換

「文化」は、先人が残した共有生活の記憶とも言える。その記憶の中に保存された先人の知恵は、式典、歴史、技術だけではなく、最も重要なのは「精神」の伝承である。

歴史研究の目的は何であろうか？イギリスの歴史学者、E・H・カーは『歴史とは何か』で、「歴史とは、過去の諸事件と次第に現れて来る未来の目的との間の対話である。(An unending dialogue between the present and the past.) [注5]」と記している。

その意味するところは、歴史の回顧で重要なのは、歴史をただの文字の記録だけでなく、歴史が現代人に語りかけているのは、過去の人々の豊かな経験から現在の人々の進むべき道、あるべき姿であって、それを現代人が受け止めて、未来を創造することである。

大甲藺工芸は、日本統治時代に、大甲、苑裡地域において、前代未聞の隆盛を迎えた。しかし、社会変化や経済のグローバル化によってもたらされた素材やデザインの多様化・流行に後れを取ったことや、否応なく引き出された価格競争に対応するため、「粗製乱造」による品質低下などが見られるようになった。

過去との対話をしっかりとやっていれば、もしかしたら未来展望が開け、大甲藺工芸産業の衰えを予測できたかもしれない。

近年、大甲藺工芸は、政府の社区総体营造政策の推進で、大甲、苑裡両地域で大甲藺

工芸の技術を再生しようとするものである。しかし、各章の総括で考察したように、現状では昔の産業規模を回復することは極めて難しい状況にある。

第2章で、大甲帽蓆が台湾の第三大産業まで興隆した経緯を明らかにした。それによると、当時は家庭の主婦が家事を切り盛りしながら、余った時間を利用して大甲帽蓆を編んでいた。つまり、家事の合間にできた束の間の時間を利用して、一つ一つの大甲帽蓆を完成していたのである。工業が発達していない時代に、このような「細かい時間」を利用した手工芸で得られる収入には時間コストの概念が無かったためでもあろう。したがって、作り手は自身の納得がいくまで、丁寧な工芸品を作っていたため、その品質は極めて優れていて、中国大陸や日本で好評を博していたのである。しかも、時間コストの概念が無かったので、製品単価は高品質の割には安かった。これが台湾を代表する産業にまで興隆した一つの要因でもあった。

現在の経済観念から時間当たりのコストを原価に参入して計算すると、大甲藺工芸品の製作コストは相当な割高となり、産業として維持するには非常に難しいと思われる。これが現在、大甲藺工芸技術を学ぼうとする人が少ない原因の一つでもある。

この行き詰まった事態を打開し、大甲藺工芸の振興を図ろうとするなら、先ず、この産業に対する概念を転換し、経済的な観点からの脱却が必要と考える。そして、大甲藺工芸が創造した文化、すなわち、大甲、苑里両地域の住民が遺した無形の生活資産・生活文化に光を当てる振興策を考えるべきと思われる。

世界がグローバル化した今日、多くの地域で「アイデンティティ」が失われている中で、大甲、苑里両地域の住民自身が、大甲藺工芸を受け継いだ伝統の知恵を、改めて評価すべきであり、そして地域の主導性を取り戻すことである。更に、地域の特殊な生活形態と意思を尊重しながら、この伝統工芸を永遠に伝承していくことによって、住民全体の共同の生活記憶、すなわち歴史を作り上げることとなる。一方で、現代の工業や商業の文明的な発展を真摯に反省し、住民と自然の間の相互協力関係を再構築する復興計画が必要であると提案したい。

4.5. 伝統工芸を通して心の豊かな生活と地域の実現

人類は、産業革命以降、生活の近代化を推し進めてきた。人々がそれを享受する時代になって以降、ライフスタイルは産業の構造変化から受ける好影響だけではなく、資源の枯渇、環境汚染の発生、生活文化の画一化、地域アイデンティティの消失等の悪影響を受けることが甚だしくなり、人間の心は功利と現実には捕らわれたような状況になった。

鶴見和子は、1970年代に自らが提唱した内発的発展論で以下のように述べている。

「地域の『内発的発展』とは、地域の住民自らが主体となって、地域固有の資源蓄積の意味と活かし方を問い直しながら、地域が進んでいく未来展望と価値観を作りだしていく発展のあり方のことである。また、『内発的発展』とは、目標において人類共通であり、目標達成への経路と、その目標を実現するであろう社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。そこへ至る経路と、目標を実現する社会の姿と、人びとの暮らしの流儀とは、それぞれの地域の人々および集団が、固有の自然生態系に適合し、文化遺産（伝統）に基づいて、外来の知恵・技術・制度などを参照しつつ、自律的に創出する」[注6]。

大甲地域における大甲藺工芸産業の発展経過を顧みると、当該地域のリーダー達であった朱麗、杜清、李聡和、陳瑚、李進興、李城の6人の卓越した活動があり、彼らの活動は製品の製造販売に留まらず、地域社会の発展にも尽力した。このように、地域が自律的に主体性を持って、地域固有の資源を活かして、地域と伝統産業が発展したことが認められる。まさに、内発的発展論の概念の実践的な成果であった。

現在、大甲地域の人々は、先人の努力の賜である大甲藺工芸という掛け替えのない伝統を受け継いでいる。同時に、鶴見和子が提唱する内発的発展の概念を受け継いでも同様で、共に力を合わせて自分達の郷里の未来を創造して行こうとする気概が求められている。

例えば、大甲藺の職人は大甲藺製品を編む時、主に心の満足を得ようとしている。同時に、製品を通して人と人との相互交流を図る幸せを求めている。これはまた、大甲藺

工芸の学習者が大甲藺製品を編む時も職人と同じ満足を求めている。また、職人と学習者が共に大甲藺製品を編む時、彼らが持っている気持ちは、自分達の生活の中で使う物を作ろう！実用的な物づくりをしよう！自分達で生活空間を飾る物を作ろう！という気持ちである。これで得られる心の豊かさはお金には換えられないものである。自分が作った物が周りの人々から褒められることや、励ましの言葉を受けられるだけでも人間は心の幸せを感じられる。このようにこの伝統工芸を捉え、心の豊かさを感じ、尚かつ余った力で製品を編んで、外に販売して行くことは、経済的にも得るものがある。しかし、基本的にはそれはあくまでも余剰分である。このように伝統工芸を捉え、推進していこうとすれば、持続可能な産業になりうると考えられる。

4.6. 地域住民と官学連携と内発的地域づくりの可能性

本論文では、前述した内発的發展論、一物全体利用、そして、E.Hカーの歴史観などの観点を基づき、大甲藺工芸の歴史を振り返った。最後に、内発的發展論に基づいた大甲藺工芸の復興と地域づくりについて考察する。

大甲藺工芸は、地域に存在する貴重な藺である大甲藺を素材に用い、生活に密着した用品を編み、実生活で利用することによって生み出された。また、日本統治時代の発展期、最盛期には住民の多くがこの産業に関わり、自主的に創意工夫をこらして工芸品を作成し、台湾有数の輸出産業にまで高めたことが明らかとなった。

その過程で、6人の郷紳と称される当該地域のリーダー達の卓越した活動があり、彼らの活動は製品の製造販売に留まらず、地域社会の発展にも尽力した。このような大甲藺工芸の発展経過は、内発的發展論で重要視している概念の相当部分が含まれていると考えられる。もちろん住民自らが主体性を持つことが重要との考えに立脚している。

近年、台湾が国を挙げて推進している内発的地域振興政策ともいえる社区総体營造が、さまざまな意味で、大甲藺工芸の再興の大きな支えとなったことは言を俟たない。

大甲藺工芸が大きく変貌した現代において、産業として更に発展していくためには、

新しい発想の製品づくりも欠くことの出来ない要素である。この点については、台湾政府所属の「台湾工芸研究センター」、大学等の教育・研究機関の継続的な支援も必要であろう。

こうすることによって、大甲地域の住民の主体性、自発性、自律性を尊重しながら、外部との協同と連携で、大甲藺工芸の振興をより長期的な視点から確立することが出来ると思われる（表4）。

表4 大甲藺工芸の振興を目指すための短・中・長期課題

期間		短期 (1~2年)	中期 (3~8年)	長期 (10~15年)
地域の人びと (職人さん、大甲藺農家を含める)		<ul style="list-style-type: none"> ● セミナーの受講：地域の文化や歴史の再確認・再認識を行う。 ● 振興イベントを計画・参加する。 ● 伝統工芸の認定を推進める。 ● 「地産地消」の概念の合意形成を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「大甲藺文化エリア」の提案 	<ul style="list-style-type: none"> ● 伝統工芸を通して心の豊かな生活と地域の実現
政府	中央	<ul style="list-style-type: none"> ● 大甲藺工芸振興計画を主催する（Ⅰ） ● 伝統工芸の認定 	<ul style="list-style-type: none"> ● 大甲藺工芸振興計画（Ⅱ） ● 大甲藺工芸の工房の奨励政策 ● 大甲藺市場の研究 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「大甲藺文化エリア」の支援 ● 海外市場の研究
	地方	<ul style="list-style-type: none"> ● 職人と栽培農家の調査統計 ● 中小学校の定番な郷土教育 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「大甲藺文化エリア」の提案を支援する。 ● 大甲藺師匠の認 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「大甲藺文化エリア」の開設 ● 「大甲藺工芸館」の開設（大

		を認定する。 ● 大甲藺栽培の農地奨励政策 ● 編み技術クラスを開催する。	定制度 ● 若い職人人口の成長提案。	甲藺文化エリア内)
大学等の教育・研究機関	● 製品デザイン、素材開発の支援 ● 大甲藺特性の研究 ● 大甲藺生活文化の研究	● 大甲藺素材の開発 ● 大甲藺特性の応用と開発と製造 ● 国際大甲藺工芸交流イベントの支援	● デザイン人材の育成 ● 新生大甲藺製品の開発 ● 健康商品の製造	
大甲地域の中小学校、NPO 等組織	● 郷土教育を支援する。 ● 振興計画を提案する。	● 地域の小学校の特色になる。 ● NPO 工芸工房の設立 ● 「大甲藺文化エリア」の提案を協力する。	● 小学校の郷土教育を継続的な支援。 ● 「大甲藺文化エリア」の経営	

注

- 1) 鶴見和子・川田 侃：内発的発展論、東京大学出版会、1989
- 2) E. H. Carr、 “What is History?” 、 1961
清水幾太郎訳：歴史は何か、岩波書店、184、1962
- 3) 本章の4.2.2. 「ハードウェア」方面、(b)「大甲藺工芸館」の創立について
- 4) 鄭聯慶、黄清龍：百年召集藺、國立台中技術學院圖書館數位内容組、86、2012
- 5) 前掲書2)
- 6) 前掲書2)、4

参考文献

- 1) 美しいモノ・夏、2014、No248
- 2) 藺草栽培と染め、1900
- 3) 中里茂樹：い草いい草、株式会社マガジンハウス、9-8、2005

謝 辞

本研究を進めるに当たって、千葉大学植田 憲先生には、研究テーマの設定、研究方法、研究データのとりまとめなど研究全般に渡り、懇切なるご指導を賜りました。ここに深甚なる謝意を表します。

また、本論文の審査の労を引き受けいただくとともに、ご教示いただきました千葉大学の佐藤公信先生、寺内文雄先生、福川裕一先生には、深くお礼を申し上げます。

そして研究の遂行に当たり、大変お世話になりましたデザイン文化計画研究室の皆さんにも、感謝の意を表します。特に、研究室特任研究員の立原さおりさん、大変お世話になりました。

学校外でも多くの方々に大変お世話になりました。特に、渡部富男さん、志津さん御夫婦には、本論文の日本語の指導と最終的なチェックをしてくださいました。心から深く感謝致します。

また、千葉市国際交流協会は、いつも私の留学生活や論文の研究を応援していただき、また、様々な日本文化の体験をさせてもらいました。協会の皆様に心から深く感謝致します。

最後に、留学生生活を精神的で支えて下さった家族、そして幼い頃亡くなった母、2009年に亡くなった父と姉に本論文の完成を報告すると共に、この場を借りてお礼の言葉を伝えます。

千葉大学大学院工学研究科
デザイン科学専攻・デザイン科学コース
2014年7月 陳 香延